

土質区分
細礫・中礫層

砂層

粗砂・有機質を含むシルト
7.5Y4/1

シルト2.5Y5/1・7.5Y6/1・5YG6/1

有機質を多量に含む粘土10YR2/1・5YR1.2/1

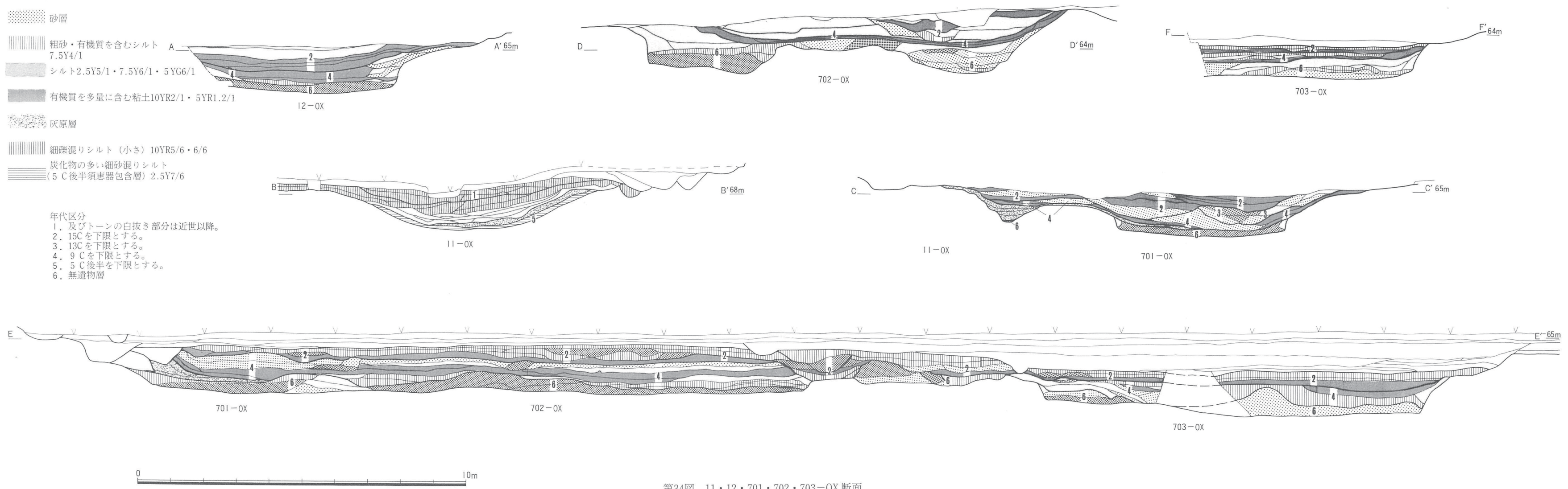
灰原層

細礫混りシルト (小) 10YR5/6・6/6

炭化物の多い細砂混りシルト
(5 C後半須恵器包含層) 2.5Y7/6

年代区分

1. 及びトーンの白抜き部分は近世以降。
2. 15Cを下限とする。
3. 13Cを下限とする。
4. 9 Cを下限とする。
5. 5 C後半を下限とする。
6. 無遺物層



第34図 11・12・701・702・703-OX断面

C 12-OX 出土遺物 (第35図)

埋土第2層からは瓦器椀(386)、土師器小皿(387~389)、瓦質羽釜などの中世遺物の他、縄文時代のものとおもわれるスクレイパー(S-9)が出土している。(386)は見込み部分に連結輪状暗文を施し、高台の退化傾向の著しいもので凡そ14世紀後半代のものと思われる。(387~389)も器高が低く、口縁部がゆるやかに内湾する点から(386)とほぼ同時期のものと判断される。スクレイパー(S-9)はサヌカイトの不整横長剥片を素材とする。二等辺三角形を呈する素材剥片の二縁に両面から粗い階段状剥離を加え刃部としている。

埋土第4層からは須恵器の無蓋高杯(390)や器台など古墳時代の遺物が出土している。これらはいずれも5世紀後半代に比定できる。

D 701-OX (第33・34図 写真図版38)

最大幅約10m、長さ32m以上、深さ約1.2mを測り、西流する「西ノ谷」の本谷である。調査区の西壁付近では、一時期北側に蛇行した時期があったらしく、702-OXの堆積状況が不明となっている。層位的所見からその時期は9世紀以降のことと判断される。

701-OXの底面から約20~30cmは無遺物層の礫・砂層が堆積し、その上に2号窯(2a・2b-OK)の灰原層が堆積している。以降、有機質土・砂泥・砂層が互層をなすように堆積しており、701-OXが水流作用と沈澱を断続的に繰り返したことがうかがわれる。なお、断面C-C'で観察される11世紀末~12世紀末にかけての瓦器椀を出土した幅約4.2m、深さ約1mを測る流路(第3層と表示)は、断面E-E'では明瞭ではない。

E 701-OX 出土遺物 (第36図)

埋土第2層からは青磁椀(406)、瓦器椀(407)、瓦器小皿(408)、須恵器蓋(409)、杯(410)、皿(411・412)、鉢(413・414)などが出土している。

(406)は型押し成形による蓮弁文椀で釉調は灰緑色(7.5GY6/1)を呈し、15世紀代のものとおもわれる。(407・408)は14世紀後半代に比定できよう。(409~414)は平城京、長岡京、平安京各跡の出土例からすれば、8世紀末(411・412)~9世紀中葉(409)にかけての遺物と思われる。

埋土第3層からは完形に近い瓦器椀(415~419)がまとまって出土している。(416)は口縁部内外面を4分割して密にヘラミガキしており、11世紀末葉に比定できる。(416~418)は見込みに格子状暗文を施し、口縁部外面も粗略化しているとはいえヘラミガキを行って降り、凡そ12世紀後半代のものとおもわれる。(419)は見込み部の暗文がまばらな平行状

を呈し、口縁部内面のヘラミガキも（416～418）に比し粗略化が目立つ。12世紀末葉の時期が想定できよう。

埋土第4層からは須恵器皿（422・423）、杯（420・421）、蓋杯（425）、机の天板（W-15）などが出土している。（422・423）は8世紀末葉、（424・425）は9世紀初頭に各々比定でき、（424・425）は2号窯灰原出土遺物と形態・手法上の特徴が一致するため5世紀後半代のもと思われる。机の天板は周囲に面取り加工を施し、二箇所^(注1)に脚部を付けるためのホゾ穴を設けている。

F 702-OX（第33・34図 写真図版39）

最大幅約13.5m、長さ約15m以上、最深部で深さ約2mを測る。丘陵部の状況は不明であるが、おそらく3号窯（3-OK）の北側の現有道路敷下に上部が位置し、西流するものと思われる。

上部断面D-D'では無遺物層の礫・砂層の堆積が著しく、上層の有機質土層が堆積した後、幅約6mの流路が形成されたことが看取できる。下部断面E-E'では、大阪層群に刻まれた谷地形と最後の小流路以外には702-OX独自の堆積状況は明瞭ではない。おそらく、本谷（701-OX）の侵食と堆積作用が702-OXの下部に及んだのであろう。

G 702-OX 出土遺物（第35図）

埋土第4層からは（400～405）の須恵器が出土している。これらは2号窯（2a・2b-OK）灰原出土遺物と形態・手法・胎土の状況が極めて近似している点と、出土位置が2号窯灰原に近い地点に集中していることから、2号窯灰原の遺物が流出したものと判断される。

H 703-OX（第33・34図 写真図版40）

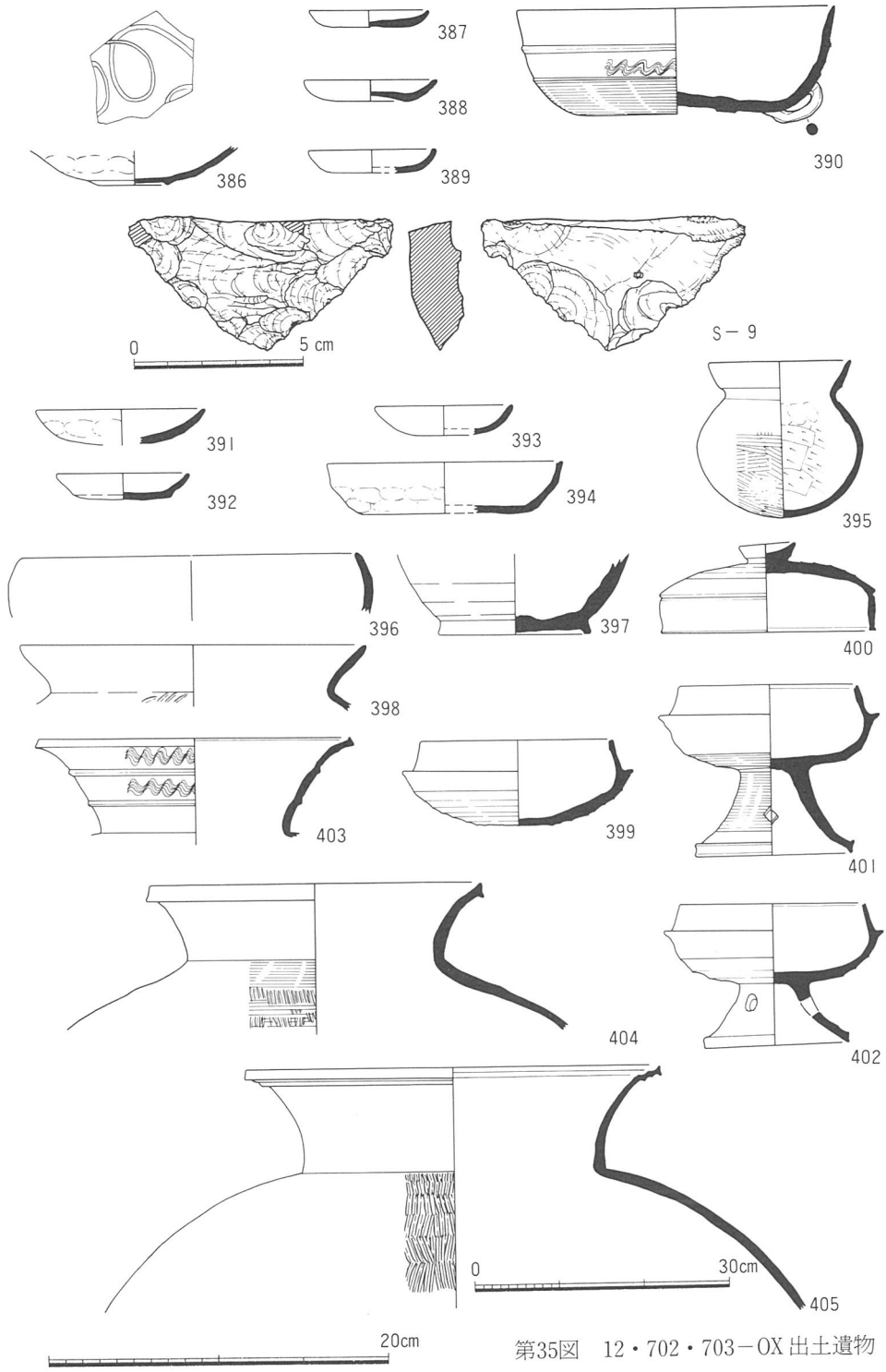
長さ30m以上、最大幅15m以上の規模で東北側丘陵から南西方向に伸び、701-OXに合流するものと思われる。丘陵裾部が用水路によりカットされているため、上部と下部は分断されており、下部は最深部で深さ約1.4mを測る。

703-OX 下部は無遺物層の礫・砂層の堆積が著しく、その厚さは最大で約80cmを測る。

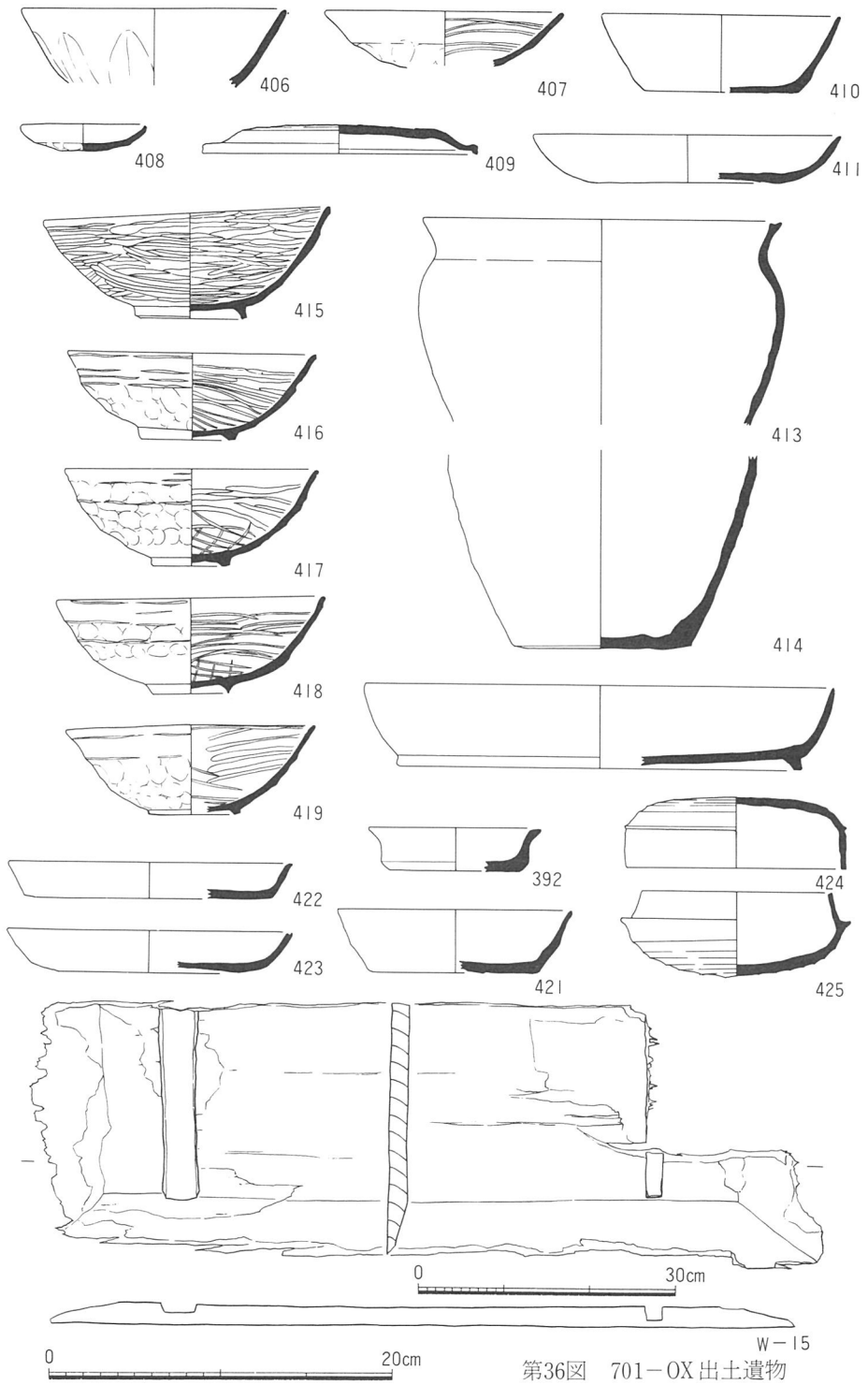
I 703-OX 出土遺物（第35図）

埋土第2層からは瓦器小皿（391）、土師器大皿（394）、土師器小皿（392・393）などの中世遺物が出土している。

埋土第4層からは土師器壺（395）がほぼ完形で出土している。頸部に強い「ヨコナデ」を加え、二重口縁状に仕上げたもので、いわゆる「布留系」^(注2)の特徴を備えたものといえる。



第35図 12・702・703-OX 出土遺物



第36図 701-OX 出土遺物

3 丘陵部（図版6～8、12 写真図版41）

「西ノ谷」から信太山3号窯へかけての西側斜面、および信太山1・2号窯の位置するところから南へのびる西側丘陵部が調査対象地で、約19,000㎡におよぶ。これらの丘陵部は、どちらも台地となって南北方向にのびており、北西方向へ鶴田池に連なっている開析谷をはさむ形になっている。

東側丘陵の西斜面においては、近代の攪乱が著しく、盛土が深いところでは1 mを越える。基本層序は三層で、第1層が近代の盛土（10YR6/6）、第2層が旧表土（10YR3/3）、第3層が地山混黄褐色細砂層（10YR5/6）である。

西側丘陵部における基本層序は二層である。第1層が表土層（10YR5/6）、第2層が明黄褐色細砂質土（10YR5/6）である。

東側丘陵部では、近代の攪乱が著しく、遺構は検出できなかった。西側丘陵部においては、表土層を除去後、多数の溝状遺構および土壇・ピットをほぼ全域にわたって検出したが、その時期・性格を明らかにするような遺物は出土しなかった。

第二節 各窯跡

1 信太山1号窯（図版15 写真図版42・43）

1) 位置と状況

本窯は、鶴田池から大谷池へと南に連なる谷部南端の西側丘陵東側斜面に存在する登窯である。この斜面の北側には、信太山2号窯が位置しており、これに付随する排水溝の一部が1号窯の下をめぐるている。

管理用道路を作る際に、斜面の裾部が切断されたため、2号窯同様、本窯も大幅な削平を受けている。また、残存している部分についても、いくつかの小規模な攪乱をみとめる。

2) 窯体の構造

残存部床面の傾斜がほぼ一定であること、および傾斜変換点がみとめられないことから、焼成部より下方は、灰原を除いたほとんどの部分が失われたと考えられる。主軸線上における窯体の残存長は4.90m、残存部最大幅1.55m、床面の平均傾斜は約17°である。主軸方位はN-34°30'-Wである。残存部も窯体の流出が著しく、遺存状態は良くない。

焼成部では、断面B-B'、C-C'（図版15参照）の観察から、左右に各一枚の貼壁をみとめる。また、断面A-A'の観察から、床面は三枚をみとめる。道路造成のために断ち切られて崖となった付近では、窯体の流出が特に著しい。さらに、断面D-D'にもみられる

とおり、左右側壁付近に、それぞれ攪乱が存在する。

奥壁は立ち上がりの基部を残すのみである。煙道部は確認できなかった。

3) 灰原

灰原は、窯体の主軸を中心に半径約5m程度の扇形を描いていたものと推定できる。残存部最大厚は約20cmである。

1号窯の灰原直下には、古墳時代後期の須恵器を多量に含む灰層を検出している。この層から出土した須恵器には焼け歪みをもつものが多く、2号窯の灰原がのびていたものと考えられることができる。

4) 1号窯出土遺物（図版32 写真図版55・56）

窯体内遺物はごく少量であった。焼土層からはタコ壺、甕片を検出している。床面遺物としては、杯蓋（写真図版56-430）、杯身、甕片がある。

灰原からは、杯蓋、杯身、皿、鉢、壺、甕、タコ壺などを検出している。ただし、そのほとんどが小破片で、復元不可能なものが過半数を占めている。以下に、比較的残りのよい器種についてその概要を述べる。

杯蓋はかえりをもたず、天井部がほぼ平らである。口縁端部はゆるい屈曲をもつ（図版32-304～308）。輪状つまみを貼付けたものが一点出土している（図版32-309）が、これ以外につまみは検出していない。ただし、つまみをもたないことが確実な遺物は検出していない。外面は、天井部以外には丁寧な回転ナデを施しているものが過半数を占める。

鉢には、外反する短い口縁部をもつもの、長い口縁部が真直外方に開くもの、摺鉢（図版32-311～313）がある。いずれも内外面に丁寧な回転ナデを施している。

皿は、口径に比して器高がきわめて低く、口縁部が外傾して立ち上がるものが多い（図版32-314～319）。高台を伴うものは検出していない。口縁部内外面および底部内面には、丁寧な回転ナデを施している。

壺は、口縁端部が外方へ大きく屈曲してから段をなし、上方へ鋭く伸びている。肩部が張り気味のもの（図版32-326）と、張りがなくなだらかに丸いもの（図版32-322）とがみられる。後者の方が個体数は多い。残存していた底部は全て高台をもつ。

甕は、口縁部が肥厚し、強く外反している（図版32-330）。頸部外面には、タタキの痕跡が明瞭に残っている。また、平底の底部を検出している（図版32-329）。

上記の遺物の観察から、1号窯の操業期間は、陶邑編年のIV型式第4段階の範疇に入ると考えうる。

2 信太山2号窯

1) 位置と状況 (図版16・17 写真図版44~47)

「西ノ谷」本谷(701-OX)と小規模支谷(11-OX)に挟まれた丘陵の東向き斜面に構築されている。標高約69~72mの斜面で検出された新窯(図版17)と、それと主軸方向・位置を全く同じくしながら標高約69~71.5mの下層斜面で検出される旧窯(図版16)の二基の窯体が重複しており、前者を2a-OK、後者を2b-OKと称することにする。

両窯とも煙道部付近を「タコツボ」に、焼成部から焚口にかけてを「管理用道路」により破壊されており、各々の断面に窯体が露呈している状況(写真図版37-1)であったが、それ以外の部分での窯体や灰原は比較的良好な状態で遺存していた。

2) 旧窯(2b-OK) (図版16・20 写真図版44~47)

窯体

窯体は大阪層群の地山を掘り込んで構築されており、掘り方が確認された。

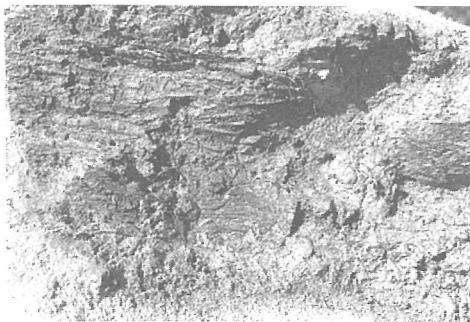
遺存する床面の主軸上延長は約6m42cm、床面最大幅約2m01cm、床面の傾斜度約24°、主軸方位W-22.5°-Sをそれぞれ測る。

床面は砂質土で構成されており、最大で8枚の重なりを数えることができた。最終床面は炭化物を含み柔らかいが、下層の床面はいずれも焼固しており奥壁近くの最下層の床面下には厚さ約2cmの炭層の堆積が認められる(写真図版46-2)。また、最下層の床面下で径約16~22cm、深さ約26~28cmの規模のピットが、主軸上で二箇所、北側窯壁際で一箇所検出されている(写真図版47)。

窯体壁はスサ入り粘土で作られており、最大で二枚の重なりを認める。最も良好な部分で約55cmの高さに遺存しており、構築時の指頭痕が顕著である(第37図)。

なお、本窯の天井部は床面と密着するように崩落しており、窯体下部では天井部と床面が空洞のままのところさえ認められた(図版20)。したがって本窯は最終焼成時の製品搬出後、ほどなく崩落したものと判断される。

最終床面から少数の蓋杯と多数の甕・壺の体部片が出土している(第51図-378~379)。蓋杯はいわゆる「取りこぼし」と判断されるが、甕・壺の体部片については床



第37図 2号窯(2b-OK)北壁にのこる指頭痕

面に一様に散布している点から「焼き台」に使用されたものと判断される。

なお、下層の床面からもそれぞれ少量の甕・壺の体部片が出土している。

排水溝 (383-OS)

最大幅約1m46cm、深さ約50cmを測る。断面形は二段の「U」字状をなし、旧窯(2b-OK)の窯体上方を長さ約6m50cmにわたり「馬蹄形」に巡る。底面上に約6cmの厚さで堆積する埋土第5層は旧窯(2b-OK)崩壊前の自然堆積と目されるが、その後の焼土・窯体片混りの堆積土は新窯(2a-OK)構築時の整地作業の所産と判断される。こうした383-OS内の埋土堆積状況は、旧窯(2b-OK)崩壊後比較的短期間で新窯(2a-OK)が構築されたことを示唆するものといえよう。

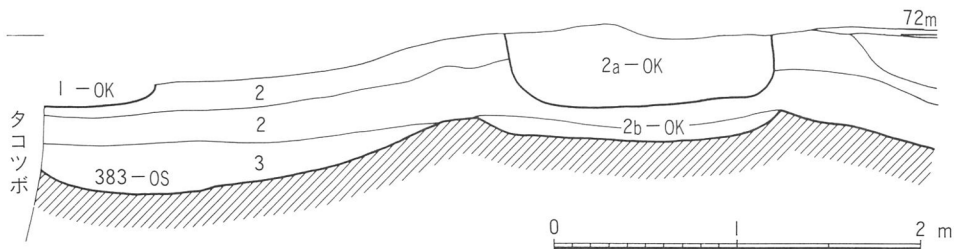
焼土・窯体片混土層の下部から蓋杯・甕が少量出土している(第51図-380~381)。

3) 新窯(2a-OK) (第38図 図版17・20 写真図版48・49)

窯体

窯体は2b-OK崩壊後構築されている。その際、窯体下方は2b-OKが崩壊したおりの落ち込みを利用して、上方では崩壊した2b-OKの煙道部付近を削平した後、2b-OKの排水溝(383-OS)を埋め立てるなど、地盤の高上げがおこなわれている(第38図 図版20)。つまり、2a-OKの構築に際しては、2b-OKとほぼ同じ床面傾斜を保ちながら窯体を丘陵上部へスライドもしくは延長させる企てがなされたものと思われる。従って2a-OKの構築ベースは、窯体上方では2b-OKで焼成された遺物を包含する焼土混り土となっている(図版20 写真図版49)。

遺存する床面の主軸上延長は約7m02cm、床面の最大幅約1m72cm、床面の平均傾斜度約25°、主軸方位W-22.5°-Sを、それぞれ測る。床面は砂質土で構成されており、最大で四枚の重なりを数えることができる。下層の床面は青灰色を呈し焼固しているが、最終床面は炭化物を含み柔らかい。床面下のピットは窯体上方の主軸線上で、径約8cm、深さ約28



第38図 第40図のB-B'延長土層図(層名は第37図に順ずる。)

cmのものが一箇所検出されたのみである。

窯体壁はスサ入り粘土で作られており、最大で2枚の重なりを認める。最も良好な部分では高さ約32cmにわたり遺存しており、構築時の指頭痕が顕著である。

なお、窯体内断面で天井部の崩落まで最大で約10cmの厚さの間層の堆積が観察できるため、本窯は操業停止後幾許かの時間経過の後に崩壊したものと判断される。

窯体の構築ベース及び最終床面から少量の蓋杯・甕ないし壺の体部片が出土している(第51図-376・377)。

4) 新窯(2a-OK)・旧窯(2b-OK)の灰原(第39図 写真図版50)

11-OXの末端部から701-OXにかけて、東西約16m、南北約13mの範囲で窯体主軸を中心に幅約5mの円弧状に遺存する。灰原層は大阪層群上に堆積する砂・礫層上にあり、最大約50cmの厚さを測る。

三箇所の断面観察の結果、灰原は基本的には四層にわたる安定した層序を示すことが確認されるが、窯体と灰原が後世の攪乱により分断されているため、重複する二基の窯体と灰原の層序との関係は直接的には不明である。

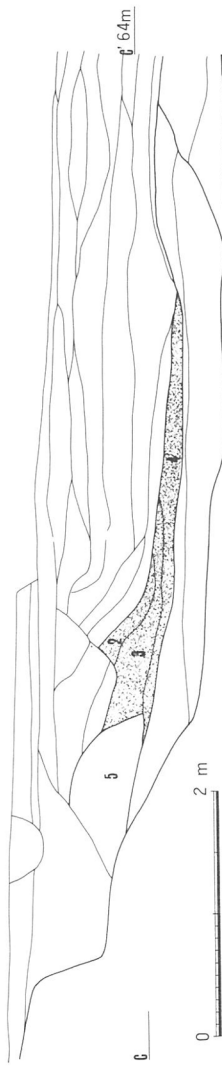
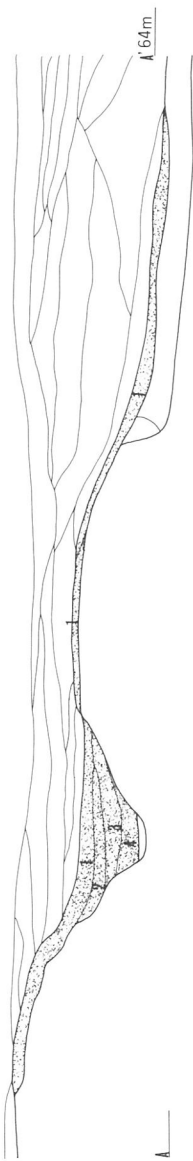
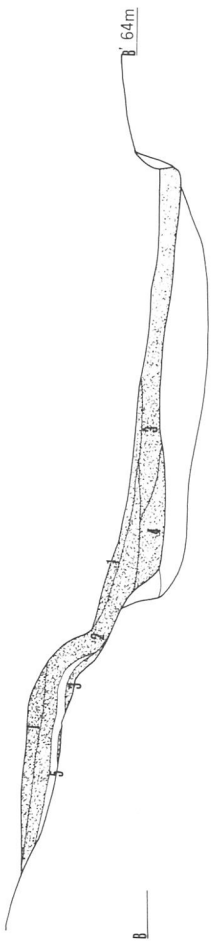
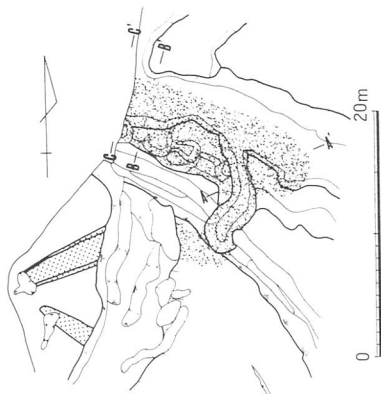
灰原からは総数8万片におよぶ遺物が出土している。そのほとんどは須恵器であるが、少数の土師器やその他のものも含まれている。

5) 遺物

2号窯(2a・2b-OK)の窯体及びその関連施設と灰原から出土した遺物は極めて多量であり、総数約8万片にも達する。その99%以上は灰原からの出土で、当該期の須恵器のほとんどの器種と高杯・甕などの土師器のほか韓式系平底鉢(?)や「窯道具」なども見られる。

二基の窯体の重複から、これらの遺物はある程度の時間差を有したものと想定でき、この時間差が出土遺物の変化を伴うものかどうかは重大な関心事といえる。ところが、多量の遺物を出土した灰原は前述したように、各々の窯体との層位的関連は不明であるし、一方、層位的所見から先後関係の明かな各窯体及びその関連施設から出土した遺物は極めて少量に過ぎない。したがって、層位的所見から先後関係の明らかな遺物を標式にして灰原出土遺物を検討していく方法にも無理があると思われる。

そのため、2号窯(2a・2b-OK)出土遺物の整理・検討作業は、その主たる部分である灰原出土遺物の形態・手法上の分類をまず試み、設定された類型に型式差が認められるかどうかの検討をおこなうことにした。



灰原第1層 10YR1.7/1
 遺物をあまり含まれない
 灰原第2層 7.5YR2/1
 細砂を多く含む遺物をあ
 まり包み含まない
 灰原第3層 7.5YR2/1
 遺物を多く含む粘性大
 灰原第4層 7.5YR2/1
 遺物を多く含むし炭・
 灰・10Y8/1粘土粒子を多
 く含む
 第5層 間層 (地山崩壊土)

第39図 2号窯 (2a・2b-OK) 灰原断面

灰原の層序と遺物の関連については、分類作業の後に層間接合の検討も含めて扱うことにする。少数の先後関係の明らかな遺物は種々の検討の補助資料に供することができよう。

なお、本項は以下の要領で記述している。

- ① 提示した破片数は接合前の状態である。
- ② 法量の統計処理に供した資料は遺存率40%以上の歪みの少ないものを対象にしている。
- ③ 扱った須恵器のロクロ回転の方向は、確認できるものすべてが上からみて反時計回りなので、本文・観察表にロクロ回転方向についての記述は省略する。
- ④ 扱った須恵器のタタキ目については、すべて平行ないし擬格子状平行タタキ目なので、これについてもいちいち記述はしていない。ただし、1cmあたりのタタキ目条線の凹部の数は観察表に示している。カキ目についても同様の数字を示している。
- ⑤ 須恵器の胎土は基本的に以下の三群に分類できるので、観察表に分類結果を記している。I群—挟雑物は少ないが器面に黒色の吹き出しが多く、胎土中に細長い隙間や気泡のふくらみが多い。多くは灰白色(7.5GY6/1)に発色し器壁の厚いものが多い。II群—酸化鉄の還元した黒色粒子や石英と思われる白色粒子を多く含む。やや肌理が粗く灰色(N7/1)に発色するものが多い。III群—肌理の細かい胎土で、石英と思われる白色微粒子をわずかに含む。概ね暗青灰色(10BG6/1)や灰色(N5/0)に発色し硬質に焼成されている。
- ⑥ 特にことわりのない場合、遺物の種類は須恵器である。
- ⑦ 用語については「陶邑III」^(注3)にほぼ準じている。
- ⑧ 観察表を巻末に掲載しているので、本文と合わせて参照されたい。

灰原出土遺物

灰原からは総数79,661点の土器資料が出土しており、その内訳は第40図のとおりである。第40図では甕・壺については口径約20cm、体部径約35cmを基準として、大型・小型に分類して計数しているが、口縁部の全容の判明する破片1,974点にしめる甕・壺形須恵器の比率(第45図)から推計すれば、総出土数に占める甕形須恵器の比率は約48.2%、壺形(甕を含む)須恵器のそれは約13.8%となる。

以下各器種毎に器形・手法上の分類について述べていく。

蓋杯(図版33-86~105 写真図版57)

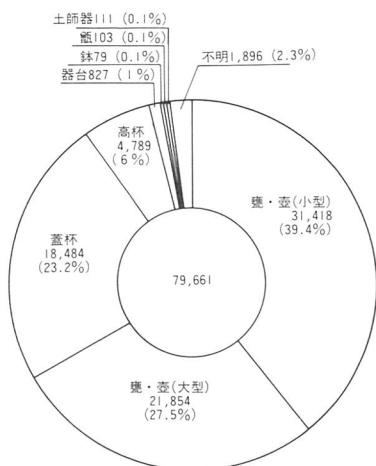
18,484点が出土しており、総出土点数の約23.2%を占める。蓋は口径11.2cm~14.8cm、器高3.3cm~5cmの範囲に分布し、身は口径9.8cm~12.6cm、器高3.9cm~5.7cmの範囲に分布するが、第41図によれば蓋・身とも器高が同じ程度でも口径に差のある個体の集合であ

ることがわかる。つまり、蓋・身とも径高指数に個体差が顕著なものといえる。この点を手掛かりにして蓋杯の分類をおこなってみる。

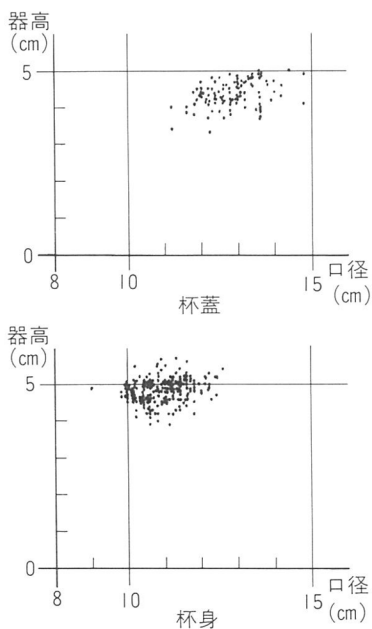
蓋

蓋は径高指数と器形により以下の三種に分類できる。A類－径高指数が34未満で、天井部が平で全体に扁平な印象を受けるもの（86～89）。B類－径高指数34～37未満で天井部がA類より丸みをもつもの（90～101）。C類－径高指数37以上で、全体に丸みをもった半球形の器形を呈するもの（102～105）。分類可能な個体をみるかぎりではA・B類が多くC類は少数である。いずれのタイプも口縁部と天井部の境目に稜をもつが、突出した稜をもつのはA類とB類の一部に限られ、C類に分類できるものはすべて稜の下方に凹線を加えた程度のもとなっている。口縁部は垂直に近い角度で垂下するものと外反気味の二種類あるが、後者が大勢を占める。口縁端部は丸くおさめたもの（a形態）、平坦面をなすもの（b1形態）、平坦で凹面をなすもの（b2形態）、内傾する面をなすもの（c1形態）、内傾し凹面をなすもの（c2形態）の五形態がみられるが、明瞭な段をなすものはない。蓋の口縁部諸形態の破片数による比率はa（3.8%）、b1（29.9%）、b2（19.4%）、c1（17.6%）、c2（29.6%）である。なお、これら口縁端部の形態とA～Cの基本器形による分類には相関関係が認められない。

A～Cいずれのタイプも径5cm程の粘土板を基礎にマキアゲ・ミズビキ成形されており、天井部外面に回転ヘラケズリ調整を施す。ヘラケ



第40図 2a・2b-OK 灰原出土土器の構成比



第41図 杯蓋・杯身法量表

ズリの範囲はいずれも天井部の2/3以上を占めるが、表に見る如く天井部の4/5以上をヘラケズリするものはA～C類の順に減少する傾向がうかがえる。ヘラケズリの一単位の幅は1cmを越えるものはなく、全体的には丁重なヘラケズリが施されているものといえる。

天井部内面の調整はA類およびB類の一部に丁重なスリ消し状の不整方向ナデを施したのものもあるが、大部分はやや丁重さを欠く不定方向ナデや一定方向ナデを加えたものである。全体的にはやや丁重さを欠くきらいがあるが、ナデの範囲は広範囲にわたっている。なお、稀にはナデ調整以前に回転カキ目調整を施したのも認められる(88、92、94、99)。

ヘラケズリ の範囲 分類別	2/3	3/4	4/5以上	計
A	13.6% (3)	9.0% (2)	77.3% (17)	99.9% (22)
B	32.1% (9)	25.0% (7)	42.9% (12)	100% (28)
C	16.7% (1)	66.7% (4)	16.6% (1)	100% (6)

杯身(図版33-106~125 写真図版58)

第42図 杯蓋タイプ別ヘラケズリ範囲
() 内の数字は個体数

個体毎の形態・法量・手法上の差が大きく分類は困難といえるが、蓋と同様に径高指数と器形の違いにより以下の三種に一応の分類が可能である。A類—径高指数が43未満、底部が平で全体として偏平な印象を受けるもの(106~109)。B類—径高指数43~48未満(110~121)が該当するが、底部が平で受け部にかけての底体部のカーブの強いもの(114~121)が多く、このタイプの杯身がもっとも形態・法量・手法上の画一性を有する。C類—径高指数48~52、底体部がまるく弧を描き半球形の器形を呈するもの(122~125)。三種の内B類に分類できるものが最も多く、A・C類は少ない。

いずれのタイプも受け部は比較的長く外上方へのびる。立ち上がりはすべてオリコミ技法によっており、器高の32~40%を占める例がほとんどであるが、A類のごく一部には立ち上がりが器高の50%以上を占めるものがある。また、立ち上がりは概ね内傾しているが、B類には直立気味のものも目立つ。

口縁端部は蓋で見たのと同様にa~c2の五形態があるが、やはりA~Cの基本器形との相関関係は認められない。杯身における口縁端部各形態の破片数による比率は、a(8.5%)、b1(13.4%)、b2(18.7%)、c1(16.3%)、c2(43.2%)である。

いずれのタイプもマキアゲ・ミズビキ成形によっているが、B類には径7cm程の粘土板を基礎に底体部をマキアゲた痕跡をとどめるものが多い。いずれのタイプも底体部の2/3以上の範囲に回転ヘラケズリ調整を施す。ヘラケズリの一単位は幅1cmを越えるものはなく丁重なものといえる。また、C類の一部には底体部の上方に回転カキ目調整を加えたもの

も認められる (125)。

内底面の調整については、蓋でみたのと同様の状況である。

高杯 (図版34・35-126~174 写真図版59~62)

4789片が出土しており、灰原出土土器の約6%を占める。器形の大小と有蓋・無蓋の別に分けられ、大型のものは無蓋形態に限られる。以下、高杯に伴う蓋、小型有蓋高杯 (高杯A類)、小型無蓋高杯 (高杯B類)、大型無蓋高杯 (高杯C類) の順で記述する。

蓋 (図版34-126~141)

杯蓋の天井部につまみを付したもので分類も杯蓋に準じ、A類(126)、B類(127~135)、C類(136~141)となる。成形・調整についても杯蓋とほぼ同様であるが、C類には天井部に回転ヘラケズリを施した後に回転カキ目を加える例が多い。

つまみの形態には中央が凹んだものと、中央が突出し、宝珠状を呈するものがある。なお、天井部とつまみの接合部には、天井部側に回転力を利用したラセン状刻目に加えて放射状刻目を施した例が確認されている (第43図)。



第43図 高杯の蓋と鈕の接合部

高杯A類 (142~161)

杯身に短い脚台を付したもので杯部の分類は杯身に準ずるが、脚部の形態の違いにより以下のA I、A IIの二種に分類できる。したがって杯部の分類との組み合わせで、例えば(142)は高杯A I Bと観察表では示されている。

高杯A I類 (142~144)

脚部に長方形透かし穴を四方配置したもので脚部はまるく肥厚するが、屈曲して段をなすものはない。小型有蓋高杯の中でも少数である。

高杯A II類 (145~161)

比較的基部の細い脚部の三方ないし四方に、円形・菱形・三角形・涙滴形の透かし穴を配するもので、脚端部は拡張され凹面をなす。透かし穴はいずれの形態のものも刺突によ

り施され、三方配置を取るものがほとんどである。

小型無蓋高杯（高杯 B 類）の透かし穴と合計すると、透かし穴の形態のわかる脚部片1453片のうち円形のもののは69.8%、菱形27.1%、涙滴形2.7%、三角形0.02%の比率を各々占める。菱形透かし穴がかなりの高率を占め、この点でも従来から指摘されているように、本窯は大野池支群の工人系譜につながるものといえる。^(注4)なお、透かし穴が円形、涙滴形のものに限り、脚端部近くに突線を一条巡らせるものが少数認められる。



第44図 高杯脚部の接合部

杯部・脚部ともマキアゲ・ミズビキ成形で製作され、杯部と脚部の接合部には杯部側に同心円状刻目やそれに放射状の刻目を加えたものを施している。第44図は刻目が脚部側にネガティブに遺った例である。

なお、脚部から杯底部にかけて回転カキ目を施した例が認められる（146・147・149・151）。

高杯 B 類（171～174）

杯蓋を転用した杯部に脚台がつく。脚部の形態は小型高杯 A II 類と近似するが、やや基部の細いものが目立つ。無透かしのものも稀に見られるが、その他は円形三方透かしに限られる。

杯部の分類は杯蓋に準ずるが、C 類に分類できる杯部をもつものは、得られた資料の限りでは認められない。杯部の調整も杯蓋とほぼ同様であるが、底体部に回転カキ目を施した例もある（172）。

なお、杯部内底面に径数cm程の突線が巡る例（172・173）が少数認められるが、このような例は管見の限りでは豊中遺跡^(注5)以外には知られていない。きわめて稀な例であると同時に、生産地と消費地を結びつける好例といえよう。

高杯 C 類（162～168）

四方に長方形透かし穴を配した基部の太い短い脚台がつく。脚端部は概ね丸く肥厚する

が、中には(167)のように角ばって凹面をなすものもある。(164)は透かし穴の両面に、(167)は外面に各々面取りを施している。

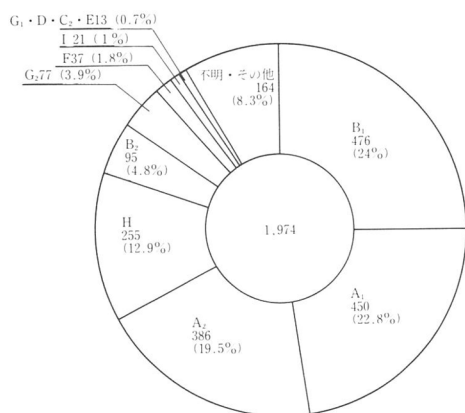
一杯部は比較的深く、口縁部と底体部の境目に一条ないし二条の突線を巡らせる。口縁部が外反するもの(162・163)もあるが、多くは直立し、口縁端部はすべて尖り気味である。底体部の上方を波状文で加飾するが、(162・164)のように波状文の下方に凹線を巡らせるものや、(166)のように突線を付加するものもある。

把手は環状をなすものが主であるが、(163)のように突起状を呈するものもある。いずれの把手も確認できる限りでは一箇所だけに付き、概ね底部近くの位置に配されている。

調整技法については、杯底体部に回転ヘラケズリを施し、脚接合後さらに回転ナデ調整を加えたものが多く、概して丁重といえる。(166・167)は杯底体部にかけて回転カキ目調整を加えた例である。なお、杯部と脚部の接合部には、高杯A II類でみたのと同様の刻目が認められる。

甕・壺 (図版36～42 写真図版63～69)

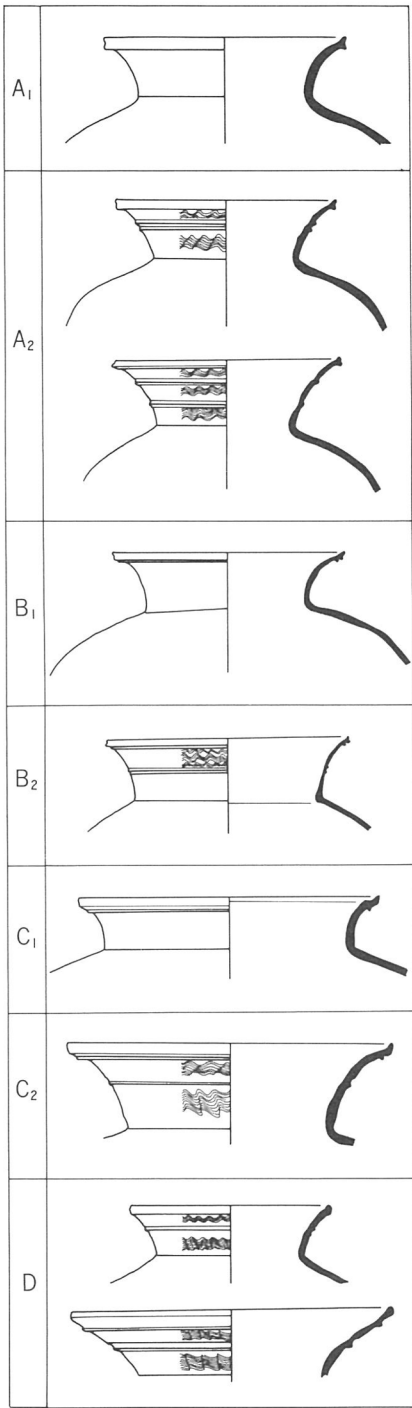
甕・壺については完形に復せるものがないため、専ら口縁部の形態で分類・計数をおこなった。分類の基礎になる形態概念は第46・47図に示しており、便宜的にA～D類までを甕、E～I類までを壺としている。この分類に基づく計数結果は第45図のとおりである。また、甕のうち口径・頸基部径のわかるもので資料数の多いタイプについては、第48・49図にその法量を示している。



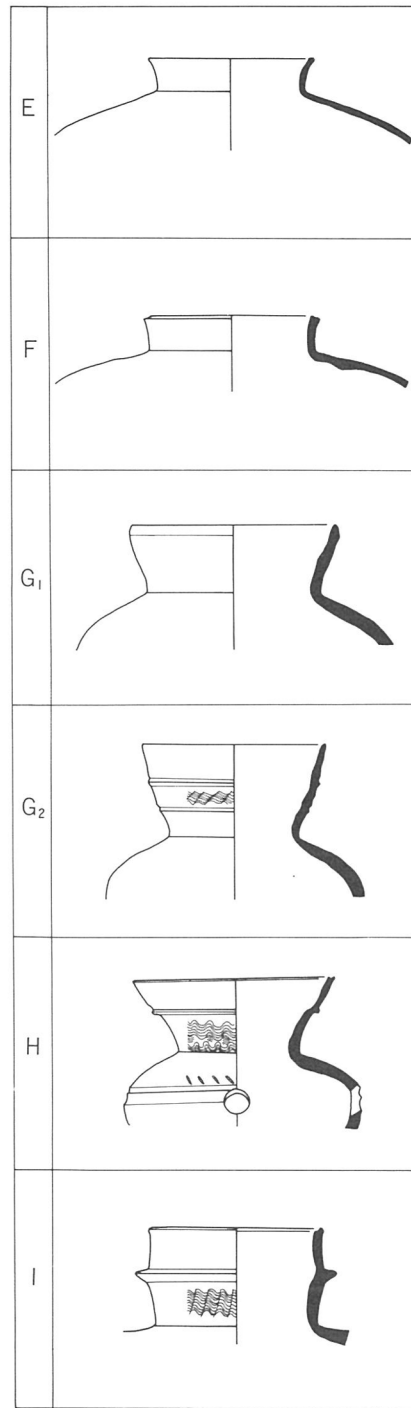
第45図 甕・壺口縁部形態別数量比

出土した甕・壺の内面の同心円文について

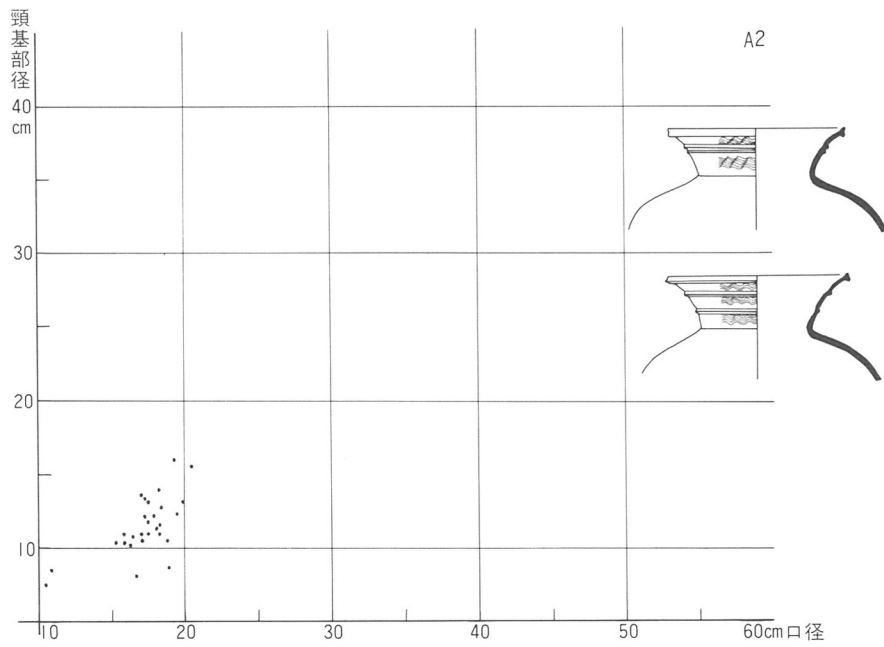
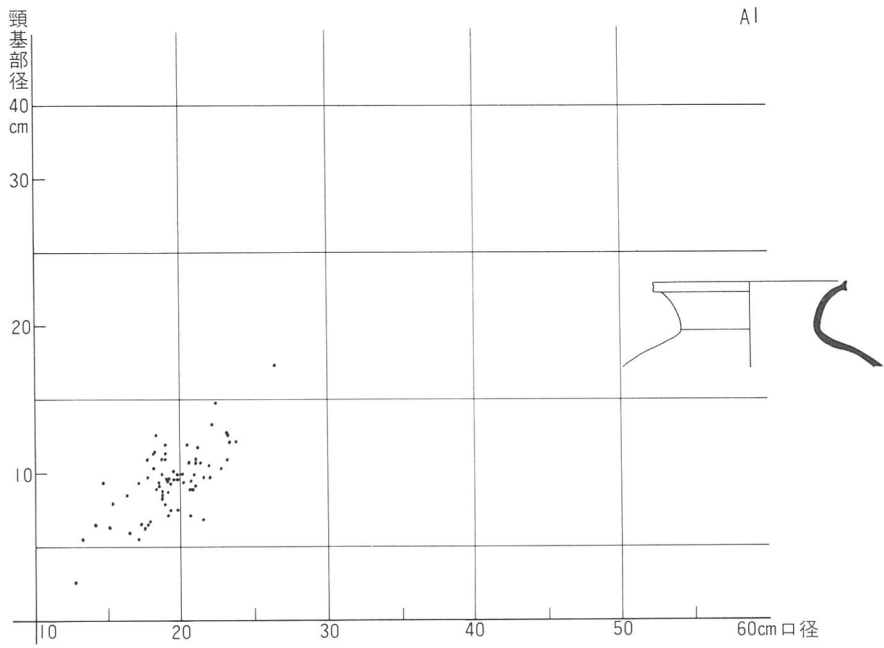
ては、一部に器面のカーブのせいで遺存する例もあるが、基本的には消し去ることを指向している。内面の丁重なスリ消し状ナデ調整は大型の器種に主として認められ、中小型器種はヨコナデ・底部からのナデ上げ・回転ナデが多用されている。内面の調整に関せば大型器種の方が丁重であるといえる。また、胎土の状況についても大型器種には精良な第III群の胎土のものが多い。



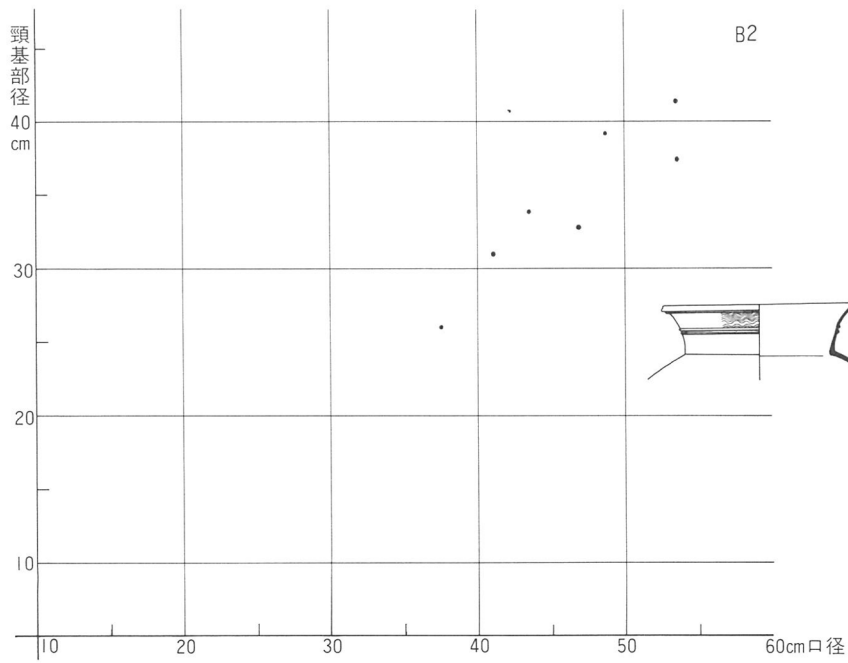
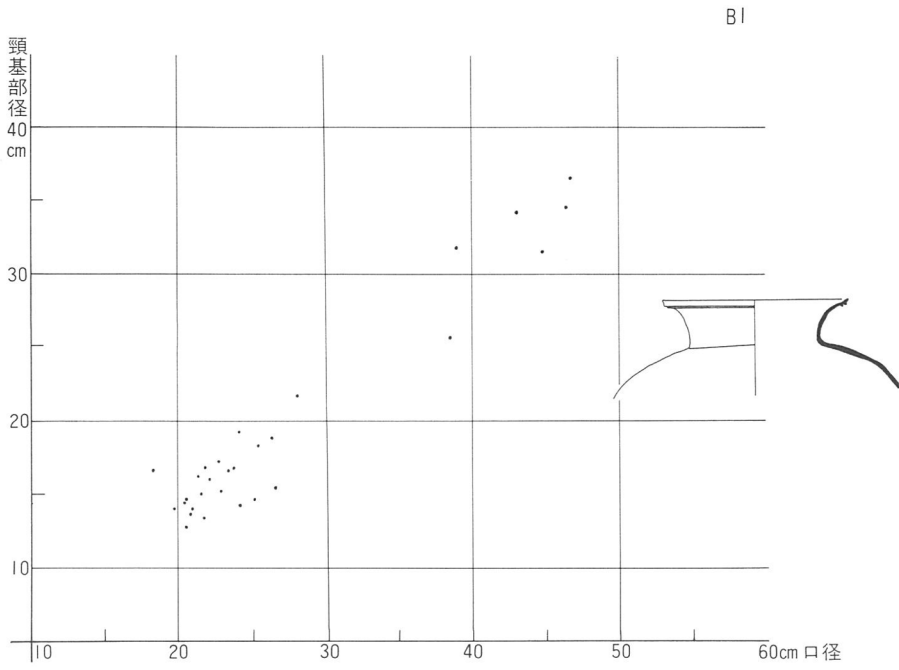
第46図 甕口縁部分類概念



第47図 壺口縁部分類概念



第48図 甕口縁部タイプ別法量表



第49図 甕口縁部タイプ別法量表

甕

マキアゲ・タタキ成形で底部から口縁部を成形しており、口縁部の一部についてはミズビキ成形もおこなう。大型器種には頸基部の接合状況が明瞭に観察できる例が多く、また頸基部から口縁部の約1/2の範囲に最終調整として回転力を利用しないヨコナデが施されている点から、少なくとも大型器種の口縁部と体部は分割成形されたものと判断される。

甕は口縁端部の形態と、突線・波状文など口縁部の装飾の有無で以下に分類される。

甕 A1類 (181～186)

口縁部は逆「コ」字状に外反し、口縁端部は上下に拡張され凹面をなす。口径13～27cm程の中・小型器種である。口縁部内外面はいずれも回転ナデ調整を施しているが、体部上半部については回転ナデ (182・184)、回転カキ目 (181・185)、調整痕の認められないもの (186) など様々である。

甕 A2類 (187～193)

A1類に比べると口縁部がやや長く、「く」字状に外反する。口縁端部は上下に拡張され凹面をなす。口縁部を二分・三分割するようにヒネリ出し突線を巡らせ波状文で加飾する。突線は比較的鈍く、二条で一組をなすもの (192) もみられる。

口径11～21cm程の中・小型器種に限られる口縁部形態といえる。

体部外面上半部に回転カキ目調整を施す例が多いが、なかには回転ナデと回転カキ目の併用がみられる例 (188・189) もある。なお、底部内面に円弧状 (188・189) や同心円状 (193) の工具痕が遺存し、その付近の器壁の凹凸の著しい例が多いことから、底部は「突^(注6)き出し技法」による可能性がある。

甕 B1類 (175～177、194～198)

A1類の口縁部直下に一条のヒネリ出し突線を巡らせる形態、突線は比較的鈍い。口径18～28cmの中・小型器種 (194～198) と口径38～48cmの大型器種 (175～177) がある。大型器種の体部外面には回転力を利用しないカキ目やヨコナデ調整が多用されているが、中・小型器種には回転ナデ・回転カキ目調整が施されている。

甕 B2類 (178～180)

B1類の口縁部中程に一条ないしは二条一組の突線を巡らせ、波状文で加飾したものといえるが、B1類に比すと口縁部が長く「く」字状に外反する。口径38～55cmの大型器種に限られる口縁部形態である。

甕 C1類 (199・200)

口縁部は逆「コ」字状に外反し、口縁端部を上方につまみ上げる。口縁端部直下に一条の鋭い突線を巡らせている。

甕 C2類 (201)

甕 C1類の口縁部中程に一条のヒネリ出し突線を巡らせ、波状文で加飾する形態であるが、C1類に比して口縁部が長く「く」字状に外反する。

甕 D類 (202・203)

口縁端部が肥厚するものすべて。口縁端部に面を持つ (202) と、丸みをもつ (203) とがある。出土した資料の限りでは口縁部に一条ないし二条のヒネリ出し突線を巡らせ、波状文で加飾する。

壺 (図版40～42-204～240 写真図版65～69)

体部はマキアゲ・タタキ成形、口縁部はマキアゲ・ミズビキ成形によるものと思われる。大型器種の内面の調整にはロクロ回転を利用しないものもあるが、大型器種の外面および中・小型器種の内外面の調整にはロクロ回転が多用されている。第50図は大型の壺 F 類と思われる個体の底部に見られる回転カキ目の状況である。壺は口縁部の形態の違いにより以下の分類が可能である。



第50図 壺底部外面の回転カキ目

壺 E 類 (204～207)

口縁部が短く、直立気味に外反する。口縁端部をまるくおさめるものが多いが、なかには凹面をなすもの (207) もある。(205) の底部には「突き出し技法」の可能性を示唆する径7.8cm程の工具痕が遺存している。

壺 F 類 (208～214)

口縁部が短く直立するいわゆる「直口壺」の形態をとるもの。口縁端部は凹面をなすもの (208・209・212・213)、平坦面をなすもの (210・211)、丸みをもつもの (214) の三種がある。

壺 G1類 (215)

短めの口縁部が内湾気味に外上方にのび、口縁端部はまるくおさめている。体部最大径は比較的上方にあるが、肩部はまるくなだらかである。

壺 G2類 (216～220)

G2類に比べると長めの口縁部が内湾気味に外上方にのびる。口縁部に一条ないし二条のヒネり出し突線を巡らせ波状文で加飾する。小型の器種に限られる口縁部形態である。体部最大径は器高の1/2以下にあり、肩部はまるくなだらかである。

体部最大径付近に加飾するものが多く、体部の文様帯には波状文(217)、凹線に挟まれた波状文(216・218)、櫛状工具による刺突文(220)の三種がある。

壺 H類(颯) (221～229)

口縁部が中程で一度屈曲し二重口縁状を呈するもので、体部との接合資料を見る限りではすべて颯の形態をとるといえる。いずれも口縁部の屈曲部には上下を窪めたヒネり出し突線を巡らせているが、口縁端部は平坦面をなすもの(221)、と凹面をなすもの(222～229)があり、後者の形態が主体である。二重口縁の上下を波状文で加飾するものと、頸基部側だけ加飾するものがある。

器形の大小で二種類にわけられ、大型のもの(225～229)は小型のもの(221～224)に比べて体部最大径に対する頸基部径の比率が小さい。

大型・小型のいずれも体部最大径は器高の約1/2付近にあり、肩部はまるくなだらかである。体部全体の形状は偏球形状をなし、底部はわずかに尖り気味である。体部最大径付近に波状文・櫛状工具による刺突文・凹線よりなる文様帯を巡らせ、外上方より円孔を穿つ。

外面の調整は概して小型のものの方が丁重で、大型のものには体部下半にタタキ目を遺す例が多い。小型のものには少数であるが体部下半に手持ちヘラケズリを施した例(223)もみられる。なお、内底面に「突き出し技法」を示唆する工具痕の認められるもの(224)もある。

壺 I類 (230～239)

有蓋形態の壺すべて。脚台付きのもの(233)と脚台のつかないもの(239)がある。

脚台付きのものについてほぼ完形に復せた例(233)をみると、体部最大径が体部の中位よりやや上方にあり、短い口縁部が外傾気味に直立する。口縁部は中程で内傾し屈曲部の外面に受け部を作り出しており、杯にみられるオリコミ技法と同様の技法が採用されている。口縁端部は内傾する平坦面をなすが、他の例(234・235)では内傾する凹面となって

いる。脚台部は基部が太く「ハ」字状に外反し端部はわずかに凹面をなしているが、他の例では脚台部が内湾気味のもの(237)もあるし、端部が丸みを帯びるもの(236・238)もある。口縁部を波状文、体部は凹線に挟まれた波状文と櫛状工具の刺突による綾杉文で加飾する。脚台部は二条一組のヒネリ出し突線により三分割され、上二段を三角形七方交互透かしと波状文で加飾している。他の脚台部の例(236～238)は二条一組のヒネリ出し突線で脚台を四分割し、上三段を透かし穴と波状文で加飾している。透かし穴の形態は三角形七方交互配置のもの(237)、三角形五方交互配置のもの(238)、二段縦列長方形透かしと三角形透かしを六方交互配置したもの(236)と様々である。なお、脚端部近くに平行タタキ目が遺存する例(236)から、脚台部もマキアゲ・タタキ成形されたものと判断される。

脚台の付かないタイプは小型のものが一個体(239)出土しただけである。体部最大径は器高の約1/2付近にあり、肩部はまるくなだらかである。体部は全体として偏球形をなすが底部は径5cm程の平底状を呈し、この粘土板を基礎にマキアゲ・タタキ成形されたものと解される。口縁部は逆「コ」字状に屈曲しており、屈曲部内面に短い受け部を造り出している。口縁端部はわずかに凹面をなす。口縁部、体部を波状文で加飾しており、外底部近くには平行タタキ目を残す。なお、内底面には円弧状の工具痕が顕著で「突き出し技法」を示唆している。

蓋(壺I類)(230～232)

有蓋形態の壺(壺I類)に伴うと考えられる蓋が少量出土している。

小型の杯蓋につまみを付した形態のもの(230・231)は法量から判断して(233～235)に伴うものと考えられる。特に(231)は(233)と胎土・色調が同じで、セットをなしていたものと判断される。(230・231)はいずれも天井部に櫛状工具の刺突による綾杉文が巡っている。

(232)も有蓋形態の壺に伴うものと考えられるが、セット関係をなすべき壺は不明である。口縁部が直立して付き、あたかも8世紀の杯蓋の如き形態を示す。天井部には櫛状工具による綾杉文が巡っており、口縁端部は細く丸い。

その他(240)

以上の分類に合致しない口縁部形態の壺が一片だけ出土している。口縁部は直立した後わずかに外反し、口縁端部は拡張され凹面をなす。二条のヒネリ出し突線と波状文で加飾されている。

器台 (図版43・44)

高杯形器台と筒形器台の二種類が出土しているが、筒形器台は少数である。また、出土した高杯形器台は大型のものに限られている。

高杯形器台 (写真図版70・71、241～246)

丸みを帯びた半球形の底体部から短い口縁部が外反する。口縁端部は上下に拡張され凹面をなす。口縁部と底部の境目と底体部中位に二条ないし一条のヒネリ出し突線を巡らせ、その間を波状文で加飾している。底部外面にはタタキ目を残し、脚部との接合には刻目を付けている。

脚台部は基部が比較的細く、内湾気味に長く「ハ」字状に開く。端部は肥厚し、概ね丸みを帯びているが、(242)のように凹面をなすものもある。脚部は二条一組の突線で四・五段に画され、上三・四段を透かし穴と波状文で加飾する。透かし穴は長方形と三角形のものを組み合わせ、交互に配置したもの(241・242)、長方形透かしを三段縦列組にしたものと三角形透かしを交互配置するもの(245)、三角形透かしの交互配置、長方形透かしの縦列配置(246)など様々である。また、脚台部の装飾には、櫛状工具による幅広の刺突文が施文されている例も少数みられる。

筒形器台 (図版44-247・248)

破片数にしてわずかに8片出土したのみである。(247)は受け部近くの破片で、受け部は逆「ハ」字状に外反し口縁端部は凹面をなす。脚部はエンタシス形の柱状をなし、受け部との境に端部が凹面をなす突線を巡らせる。受け部は二条一組のヒネリ出し突線と波状文で、脚部は長方形八方透かしと波状文で各々加飾されている。なお、受け部に穿たれた円孔の正確な数は不明である。

(248)は脚部裾近くの破片と考えられる。脚柱部との境にヒネリ出し突線を巡らせ、その下方を波状文とヒネリ出し突線で加飾する。

鉢 (図版45-249～252 写真図版72)

把手の有無で大別される。把手の付かない(249・250)は平底状に内湾する体部がつき、口縁部が外方へ屈曲する。口縁端部は拡張され凹面をなすが、(250)の口縁端部は突線を巡らせたが如き形態を示す。いずれも体部の外面下方と外底部に静止ヘラケズリを施している。なお、(250)の口縁近くには円孔が穿たれているが、その正確な数は不明である。

(251)はピヤ樽状の体部にヘラで成形された把手が付く。口縁部は水平に外反し、端部は拡張され凹面をなす。円盤状の底部が付くものと思われる。(252)は底部から体部・口

縁部が外上方に直線的にのび、口縁部と体部の境がない。口縁端部は丸くおさめており、把手の有無は不明である。

椀（図版45-253～261 写真図版72）

器形と文様帯の有無により、四種に分類できる。把手の有無が判別不能のものもあるが、大半は把手の存在が確認できる。

椀 A（253・254）

平底に球形の体部が付き、口縁部が内湾気味に直立し、体部と口縁部の境に二条のヒネリ出し突帯を巡らす。体部中位にも凹線を巡らせ波状文帯をもうける。(253)にはボタン状装飾の付いた手づくね成形の把手が付く。(258)の体部の文様帯以下には回転ヘラケズリと静止ヘラケズリの併用がみられる。

椀 B（255・256）

体部と口縁部の境が屈曲し、口縁部は直立する。体部が杯状をなす(255)とビヤ樽状をなす(256)があり、体部及び口縁部を波状文で加飾する。

椀 C（257・258）

平底に球形の体部が付き、口縁部は外湾する。波状文・凹線・突線などの装飾は一切施されていない。

椀 D（259～261）

平底に球形の体部が付き、口縁部が内傾気味に直立する。体部最大径に比し口径が小さく、椀 C 同様何等加飾されないタイプである。

甌（図版45・46-262～268 写真図版73）

器形の大小と口縁部の形態で三種に分類できる。確認できる資料の限りではいずれも体部の下方に静止ヘラケズリを加え、体部の中位には凹線を巡らせ、二対の牛角状把手をつける。把手の接合はすべて体部に孔を穿ち、把手を差し込む方法によっている。なお把手(264・265)には切り込みが施されている。

甌 A（262・263）

口径35cmを越える大型のもので、平底から体部・口縁部が内湾気味に立ち上がり、体部と口縁部の境目が、口縁端部は平坦面をなす。(263)の底部には円孔を中心に長方形の透かしが配列されている。

甌 B（266）

体部と口縁部の境に一条のヒネリ出し突線を巡らせ、口縁部は外上方にのびる。口縁端

部は拡張され凹面をなす。底部には円孔が配列されている。

甕 C (267・268)

口縁部が「く」字状もしくは「コ」字状に外反し、口縁端部は拡張され凹面をなす。口縁部と体部の境が段をなす(268)とヒネリ出し突線を巡らせる(267)がある。

土師器(写真図版74-1)

灰原から土師器が若干量が出土しており、壺(269)、甕(270)、鉢(271)、高杯(500・501)などの器種があるが、いずれも遺存度がわるく断片資料である。

壺(269)は二重口縁の呈を保つが、口縁全体がゆるやかに屈曲するにすぎず、屈曲部の上方に凹線を加えて口縁部の段を強調する所作がなされている。甕(270)は内湾気味の口縁部で口縁端部はわずかに内側に肥厚し、凹面をなしている。壺・甕ともいわゆる「布留^(注7)系」と称される形態的特徴を備えたものといえる。鉢(271)は器形と胎土・手法の状況から「韓式系平底鉢」の公算が強いものと考えられる。

その他(写真図版74-2)

以上の土器資料のほか2号窯(2a・2b-OK)灰原からは「窯道具」に供されたと思われる資料が二点出土している。(S-10)は長さ11.15cm、幅6cm程の硬質砂岩の自然石に甕の体部片が熔着したもので、加熱のため砂岩の表面に細かいヒビ割れが無数に走っている。

(C-1)は窯体の材料と同じスサ入り粘土を径11cm、高さ9cm程の半球形に丸めたもので、還元焰で焼成されたため青灰色を呈する。

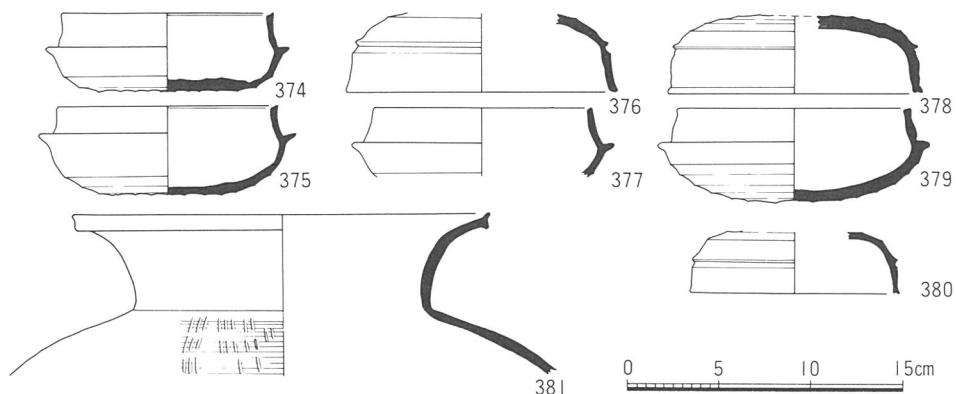
一方は自然石を利用したもので、一方は人工物という差があるが、両者とも窯体床面上で製品を支えるために使用された一種の窯道具と思われる。(S-10)の状況から、おそらく上に何枚かの甕の体部片を重ね、製品と「窯道具」が直接熔着することがないように配慮されたものと推察される。

窯体床面及び窯体関連施設出土遺物(第51図)

重複する二基の窯体の床面および旧窯(2b-OK)排水溝埋土、新窯(2a-OK)構築ベース内より、それぞれ少数の須恵器蓋杯・甕の破片が出土している。

層位的所見からこれらの遺物の先後関係を示せば、旧窯(2b-OK)最終床面出土遺物(378・379)・旧窯(2b-OK)排水溝埋土出土遺物(380・381)、新窯(2a-OK)構築ベース出土遺物(376・377)・新窯(2a-OK)最終床面出土遺物(374・375)となる。灰原出土遺物の分類に従えば杯蓋(378)はA類、(380)はB類、(376)はB類に、杯身(379)はA類、(374・375)はB類に、甕(376)はA1類にそれぞれ分類できる。

なお、旧窯・新窯ともそれぞれの下層床面より若干の遺物を出土しているが、いずれも甕・壺の体部片で、分類や比較検討資料には適さない。



第51図 2号窯 (2a・2b-OK) 窯体及び関連施設出土遺物

灰原の遺物出土状況

2号窯 (2a・2b-OK) の灰原が四層におたる堆積をなすことは先述したとおりであるが、ここでは確認された灰原の層序と出土遺物の関連を検討することにする。

灰原の層序と遺物の出土傾向

灰原から出土した土器資料計79,661片の灰原各層に占める割合は、第52図に示した如くである。灰原第3層からの出土量が最も多く、次いで灰原第4層、第2層、第1層となっ

灰原第1層	12793 (16%)
灰原第2層	10666 (13.4%)
灰原第3層	34072 (42.8%)
灰原第4層	22130 (27.8%)
計	79661 (100%)

第52図 灰原層位別土器出土破片数

層位 タイプ	灰原第1層	灰原第2層	灰原第3層	灰原第4層	計
A	(3) 13.6%	(3) 13.6%	(11) 50%	(5) 22.7%	(22) 99.9%
B	(1) 3.6%	(4) 14.3%	(10) 35.7%	(13) 46.4%	(28) 100%
C			(4) 66.7%	(2) 33.3%	(6) 100%

第53図 杯蓋タイプ別出土層位 (個体数)

ている。

次に第52図で明らかとなった灰原各層の遺物包含量の状況と、特定遺物の出土傾向の関連をみる。具体的には、まず杯蓋を対象とする。杯蓋は器形により A~C の三種に分類でき、それが少なからず編年的な意味を持つ可能性があると考えられるからである。第53図は分類可能な杯蓋の出土層位をタイプ別に示したものである。資料数の少ない C 類の灰原第1・第2層の出土は見られないが、杯蓋各タイプの層別出土状況はほぼ第52図に示した全土器片の層別出土量の状況と似た傾向を示すものといえる。

次に A 1~I 類まで分類した甕・壺の口縁部について同様のことをみ

てみる。資料数が30片以上あるものを対象に、各層毎の出土量をまとめたのが第57図である。甕・壺の各タイプとも灰原第3層よりの出土が最も多く、次いで第4層あるいは第1層が多く第2層よりの出土量は少ない。第52図でみた総出土器・第53図の杯蓋の層別出土傾向と全く同じ状況を示すといえる。つまり、以上のことから判明したのは灰原の四層にわたる層序は遺物の包含量の差以外に何等意味を持っていないか、あるいは出土土器の分類がほとんど編年的な意味をもつ

層位 タイプ	灰原第1層	灰原第2層	灰原第3層	灰原第4層	計
A ₁	(89) 19.8%	(78) 17.3%	(97) 43.3%	(88) 19.6%	(352) 100%
A ₂	(51) 13.2%	(57) 14.8%	(94) 50.2%	(84) 21.8%	(296) 100%
B ₁	(55) 11.6%	(66) 13.9%	(95) 40.9%	(84) 33.6%	(300) 100%
B ₂	(10) 10.5%	(12) 12.6%	(38) 40%	(35) 36.8%	(95) 99.9%
F	(5) 13.5%	(4) 10.8%	(18) 48.6%	(10) 27%	(37) 99.9%
G ₂	(16) 20.8%	(11) 14.3%	(37) 48%	(13) 16.9%	(77) 100%
H	(43) 16.9%	(29) 11.4%	(137) 53.7%	(46) 18%	(355) 100%

第54図 甕・壺タイプ別出土層位 (破片数)

	Q	P	O	N	M	L
I						
J						
K						
L						
M						
N						

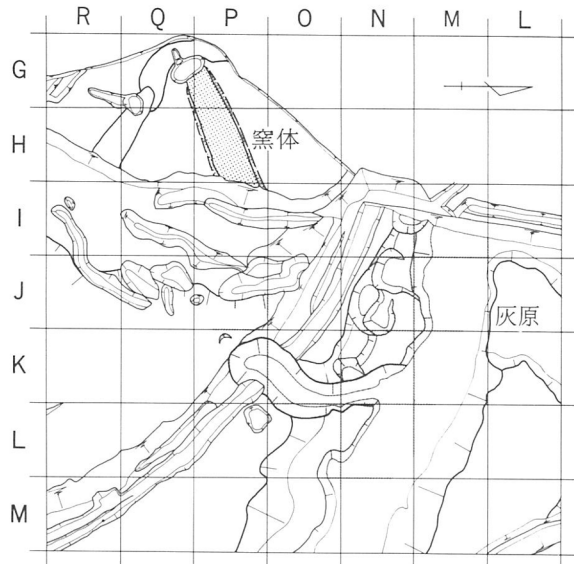
第55図 器台 (241) の地区・層間接合関係

ていないかのどちらかである。

次にこの問題を解決するために灰原から出土した遺物の地区・層間の接合状況を試みる。

この検討の素材には器台および有蓋壺の脚台を選択した。何故なら、出土破片数が適当であり、かつ多くの装飾が施されていることから個体識別が比較的容易であると判断されるためである。

具体例として最も象徴的な結果を示す器台(241)の例を提示



第56図 2号窯(2a・2b-OK) 灰原地区割

する。第55図は器台(241)の接合破片の出土地区と層位を示したものである。ここで使用した地区(方4Mの単位)は本協会の定めた方法にしたがったもので、2号窯および灰原付近の地区割りは第56図に示している。特定の地区の呼称は第56図の南北・東西列のアルファベットの組み合わせで表現される。また、第56図で方4Mの地区内を四分分割しているのは灰原の層序をあらわし、上から順に灰原第1層~第4層に対応する区分である。

第55図によれば器台(241)の同一個体接合片は8地区に分散し、かつ灰原の各層から出土していることがわかる。その他の器台・有蓋壺についてもほぼ同じ状況であった。

以上の検討から2号窯の灰原の堆積は安定した層序を示すにもかかわらず、灰原の層序と遺物の間に考古学的な意味を見出すことは困難であるといえよう。

ヘラ記号 (第57図)

本窯出土須恵器の一部にいわゆる「ヘラ記号」のつけられたものが認められる。使用された工具には文字どおりヘラ様のものと、櫛様のものの二種がある。記号のつけられる器種と位置は、杯身(底部部)、杯蓋(口縁部)、高杯(脚部)、壺・甕(底部部)、甕(口頸部・体部)であり、第57図に示した如く最低九種類の記号のパターンが確認される。

重ね焼き

灰原出土須恵器のうち、蓋杯・有蓋高杯・有蓋壺・器台に重ね焼きが確認された。

蓋杯はすべて蓋と身を正合させて焼成されている。有蓋高杯は杯部に蓋を正合させ、その上に蓋と組み合わさった別固体の脚部を重ねてゆく方法がとられている。有蓋壺も蓋と正合させて焼成されている。器台の一部には壺・甕を乗せたまま焼成された例が認められる。第58図に示した甕ないし壺の底部に認められる「火ダスキ」は、おそらく、器台との



第57図 2号窯 (2a・2b-OK) 灰原出土須恵器ヘラ記号 (1/2)

重ね焼きに際しての溶着防止の配慮の痕
であろう。

器種構成

本窯出土遺物が実に多様な器種で構成
されていることは、先にみてきたとおり
である。そのうち土師器については、須
恵器生産に携わった工人の生活用具と解
することができる。本窯付近にそれらの
生活用具を使用する工人達の居住空間が
あったと思われるが、その痕跡は検出す
ることができなかった。

須恵器については、当該期の須恵器の
ほとんどの器種を含んでいるといっても

過言ではない。その全出土遺物に対する数量比は第40図に見てきたとおりである。これら
本窯出土須恵器の器種毎の構成比を、ほぼ同時期と考えられる陶邑窯跡群 TG-207号窯の
器種構成^(注8)と比較してみる。TG-207号窯の場合は蓋杯13.19%、高杯1.3%、壺・甗3.15
%、鉢0.07%、器台0.13%、甗60.94%で、本窯の場合は蓋杯23.2%、高杯6%、壺・甗13.8
%（推計値）、碗・鉢0.1%、器台1%、甗48.2%（推計値）である。

両者の器種分類・計数の方法には当然若干の違いがあるであろうが、蓋杯、高杯、壺・
甗など主として供膳器種の比率が本窯出土品のほうがわずかに高いことが指摘できる。

3 信太山3号窯（3-OK）

1) 位置と状況（図版18 写真図版51-1）

本窯は、通称「西ノ谷」の東側丘陵斜面に位置する登窯である。調査の結果、本窯が位
置する丘陵斜面部分の下約半分は後世に削平され、盛土が施されていた。本窯は、焚口の
一部と焼成部を残し、それ以外は、消失していた。

2) 窯体の構造（図版19 写真図版51~53）

窯体残存長は約5.48m、最大幅約2.0m、床面傾斜角約23、主軸方向S-79°-Wを沿れぞ
れ測る。

床面は全体に青灰色に焼固し、二枚の床面補修が認められる。側壁は、指ナデの痕跡が
認められ、一部で貼壁も確認できた。



第58図 甗・壺底部の火ダスキ

窯体内埋土は、焼土、窯体片の混じった土層で、これら埋土を除去すると、最終床面に、甕片が11片残っていた。

床面除去後、直径約20cm、深さ約18cm前後のピットが三箇所、主軸上にほぼ2 m 間隔で、10cmのピットが一箇所確認できた。埋土は、いずれも木炭混じりの焼土である。

丘陵斜面に施してあった盛土を除去すると、灰層を検出することができた。この灰層を除去後、一部地山が、赤褐色に焼けしまっている部分を検出した。また、右側の地山が若干「八」の字形に掘り下げられており、本窯の焚口であると考えられる。焚口の標高は約66.81mである。

3) 灰原

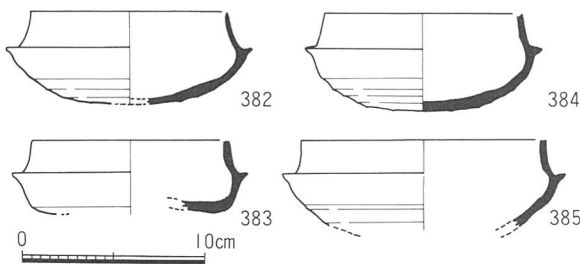
灰原は、用水路、攪乱などにより、大半が失われていた。残存していた灰原は、焚口と考えられる地山焼土を覆う形で、主軸方向に2.0～2.5m、厚さ約20cmで、おもに主軸より左側に残存していた。

4) 154・155-00 (写真図版54)

154-00は3号窯の南に、155-00は北に各々位置する。154-00の残存長は、3.84m、最大幅2.42m、155-00の残存長は3.40m、最大幅2.33mで、両方とも舟底状を呈する。埋土は、154-00、155-00とも、ほぼ同様の堆積を示し、窯体片、焼土を含む粘質土が、3号窯側から流れ込み、レンズ状に堆積しており、窯壁、地山の焼けた痕跡は確認できなかった。最下層には、木炭を含む粘質土が薄く堆積していた。

両遺構内からは、若干の須恵器が埋土から出土しており、その大半は蓋杯(第59図-383～385)、甕である。最下層からは、1片の杯身(第59図-382)を検出したのみである。

上記の遺構の時期、性格については、前述した最下層出土の杯身が3号窯灰原出土遺物



とほぼ同時期であること、最下層の木炭層が、3号窯操業時のものである可能性を考え合わせ、3号窯操業当時には、これらの遺構は存在していたものと思われる。

第59図 154・155-00出土須恵器 (382、383 154-00

384、385 155-00)

その性格については、3

号窯に關係する遺構であると思われるが、類例は少なく、性格は不明であり、今後の調査に期するところが大きい。

5) 3号窯出土遺物(図版47 写真図版75・76)

本窯出土遺物破片総数は、2661片を数える。その内、窯体内出土例は11片を数え、灰原出土例は2650片である。以下に、灰原出土資料の形態、調整、成形の特徴を記述する。

a 杯蓋(図版47-272~275)

破片数80片を数える。稜を有し、口縁端部は内傾する凹面や平面をなすものが大半で、平坦なものも若干みられる。

天井部は丸みを持つもの(図版47-272・273)と平らなもの(図版47-274・275)がある。調整は天井部外面4/5に回転ヘラケズリ調整が施され、天井部内面中央に不整方向のナデ調整が認められるものが数点ある。他は回転ナデ調整が施されている。ロクロ回転は反時計回りが多い。

b 杯身(図版47-276~287)

破片数578片を数える。立ち上がり部分は、内傾するものが大半を占める。端部は、丸いものと内傾する凹面をなすものが大半であるが、平坦(図版47-284)、内傾する平面をなすもの(図版47-278・279・287)、平坦で凹面をなすものなどが若干みられる。底体部は、比較的丸みを持つものが大半を占めるが、平らなもの(図版47-287)も若干みられる。

杯身の口径は、11~12cmのものが大半であるが、10cmに満たないもの(図版47-288・289)が若干みられる。

調整は、底体部外面の3/4以上に回転ヘラケズリ調整が施されているものが多くみられるが、他に1/2に回転ヘラケズリ調整が施されているもの(図版47-287)もある。底体部内面中央に不整方向のナデ調整を施しているものが大半を占め、その他は回転ナデ調整である。底体部外面にカキ目調整を加えた後、回転ヘラケズリ調整を施したもの(図版47、286、287)が2個体あり、2号窯、4号窯にも同様のカキ目を残す例がある。

c 高杯(図版47-289~293)

破片数69片、有蓋高杯については、蓋杯との区別が破片ではつきにくく、相違点といえば、底部に脚部の痕跡のあるもので、この数字は、これをもとにして割り出した。

有蓋高杯の蓋、身は、数も少なく形態などについてはわからないが、前述した蓋杯とほとんど変わりが無いものと思われる。

無蓋高杯は、口縁部がわずかに外湾して上外方にのび、体部との境で2本の凸帯がめぐ

り、丸みのある底体部をもつ、体部外面凸帯下に波状文を施すもの(図版47-293)と凸帯の上にも波状文を施すものもある。

調整は、底部外面に回転ヘラケズリ調整が施され、他は回転ナデ調整である。

脚部については、脚基部より下外方に下り、端部は平面を持つものが大半を占め、その他に端部を丸く仕上げているものもある。端部平面に凹線を有すもの(図版47-291)もみられる。

脚部に関しては、円孔透かしを有すもの(図版47-291・292)、突帯をもち、円孔透かしを有すもの(図版47-289)、長方形透かしを有すもの、突帯をもち、長方形透かしを有すもの、突帯をもち、レンズ形透かしを有すもの(図版47-290)がある。

調整は、カキ目調整を施しているものが若干あるが、他は回転ナデ調整である。

d 壺・甕

破片数1,914片を数える。有蓋壺(図版47-296)1片、無蓋短頸壺6片、口縁が上外方にのび、突帯・波状文を有するもの(図版47-295)2片がある。体部、底部は、残存しておらず不明である。口縁の調整は、回転ナデ調整である。

甕については、口縁が上外方に外湾してのび、端部を拡張しているもの1片、口縁が上外方に外湾してのび、端部を拡張し、一条のひねり出し突帯を有し、二条の波状文を施すもの62片、二条のひねり出しを有し三条の波状文を施すもの(図版47-301)15片、口縁が上外方に外湾してのび、端部近くに突帯が一条めぐり、口頸部に上方に一条の突帯を有すもの(図版47-297・298)、口縁が外方に外湾してのび、端部は拡張した面をもち、口頸部上方に一条の突帯を有すもの(図版47-299・300)、その他に二条の突帯上下に各一条の波状文を有すもの(図版47-302・303)もある。

体部は、平行タタキが施されている。カキ目調整を施しているものも若干みられる。その他は回転ナデ調整である。

e 甗

甗は破片数6片で、すべてが小さな破片であり、二重口縁のもので、頸部に波状文を施し、甗の可能性のあるものはこれ1片のみである。

f 器台

器台は、体部の破片のみで、1、2本の凸帯がめぐり、三角形の透かしを有するものと思われる。

g 椀 (図版47-294)

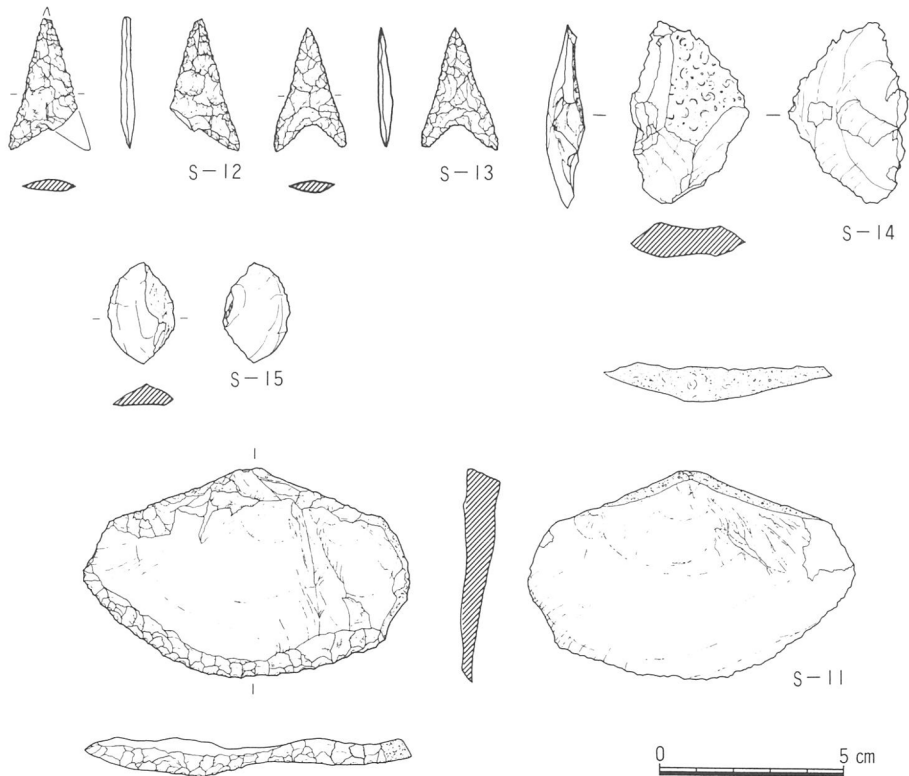
わずか9片、1個体分の破片が出土したのみである。この椀は歪みが激しく推定復元である。口縁端部はうすく鋭い。体部は上外方にのび、把手の痕跡をもつ。底部は比較的平らであると思われる。調整は、底部静止ヘラケズリ調整、その他は、回転ナデ調整である。上記の灰原出土遺物からみて、本窯は、陶邑中村編年のI型式3段階に比定できるものと思われる。

h 混入遺物 (第60・61図 写真図版77)

本窯の灰原には、サヌカイト製の削器1点、石鏃く2点、縄文土器3点が混入していた。以下にそれらについて記述する。

削器(第60図S-11)は、横長剝片を使っている。平面扇形で、縁辺に細部調整を施し刃部を作る。長さ56.6mm、幅88.0mm、厚さ7.5mm、重さ47.4gである。

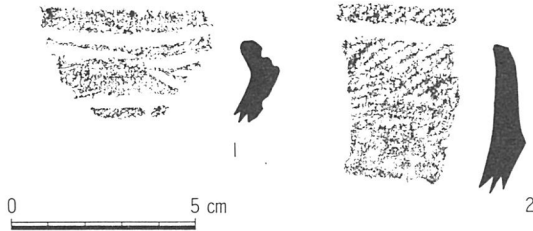
石鏃は、S-12・13とも凹基無茎式石鏃である。S-12は、先端、基部一方を欠失してお



第60図 B地区出土石器

り、現存長36.2mm、現存幅15.3mm、厚さ3mm、重さ1.9gである。S-13は、長さ32.3mm、幅21.0mm、厚さ3.85mm、重さ1.7gである。ともに側縁は、細かに剝離しており、比較的優美な作りの石鏃である。

縄文土器のうち、2点は深鉢と確認できた(第61図)。428は、口縁部から胴部にかけて



第61図 3号窯(3-0K)灰原検出縄文土器

沈線を描き、429は、外側に肥厚する口縁部の外面にLRの縄文を、縁部上端面に縄文を施す。

縄文時代後期前半に属する土器と考えられるが、429は縄文時代中期末葉に属する可能性も考えられる。

4 遺構外出土遺物(第60・62図 写真図版77)

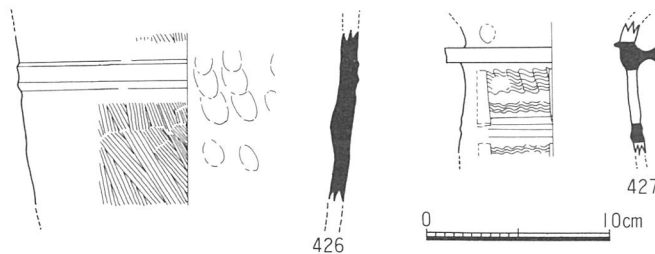
先にも触れたとおり、丘陵部では遺構に伴って出土した遺物は皆無であった。とはいえ、調査区全域にわたって古墳時代以前の遺物を検出している。以下に主だった遺物について、その概要を記述する。

石器(第60図-S-14・15)

S-14・15は横長剥片である。S-14は、打面に打撃痕であろう小さな凹みをみとめ、背面は、自然面を残し、大きく3枚の剝離面がみられる。長さ32.4mm、幅48.6mm、重さ11.1g、石材はサヌカイトである。S-15は、自然面に打撃面がみられ、背面は一枚のポジティブな剝離面よりなる。長さ21.2mm、幅27.5mm、重さ2.2g、石材はサヌカイトである。

須恵器(第62図-427)

筒形器台片である。筒部の推定復元径は約10cm、長方形透かしと波状文を施し、上位の杯部に円形透かし穴をあけている。



第62図 丘陵部出土遺物(426 円筒埴輪、427 須恵器器台)

埴輪(第62図-426)

調査区ほぼ中央の攪乱から出土した。現存最大径は18.5cm、タガは、断面は低い台形で、

端部はナデによる凹みを有す。体部外面タテハケ、内面は指オサエの後ナデを施している。時期は、6世紀前半と思われる。

第三節 まとめ

前節までにB地区の調査成果の報告をおこなってきた。

丘陵上部は後世の攪乱状況が著しいため、遺存した考古資料は少なく、調査地付近にかつて古墳が存在したことを示唆する円筒埴輪片や須恵器片を少量検出するにとどまった。一方、「西ノ谷」付近の遺構・遺物の遺存状況は良好で、4基の須恵器窯及びその灰原を検出することができた。また開析谷の埋土からの遺物の出土も少なくない。

ここでは、「西ノ谷」の埋没過程（特に須恵器窯との関連）と各窯跡出土遺物の編年観についてふれることにし、まとめとしたい。

1 「西ノ谷」の埋没過程

「西ノ谷」本谷と各支谷の埋没過程は、層位的所見や出土遺物の面からみて、次のような共通点のあることが看取できる。

- ① 大阪層群に谷地形が形成されて以降、2号窯(2a・2b-OK)灰原層が堆積する5世紀後半代までの礫・砂層の堆積はわずかである。
- ② 2号窯灰原層の上を被う下層の有機質土層から出土した遺物は、9世紀中葉を下限年代とする。つまり、5世紀後半から9世紀中葉にかけての堆積作用は、ほとんどなかったものといえる。一方、9世紀中葉から15世紀代にかけての堆積作用は、それ以前に比すると非常に急速と言える。
- ③ 各埋没谷が「西ノ谷」谷底部分で自然堆積をおこなっていたのは、埋土第2層の出土遺物から15世紀代までのことと判断される。
- ④ 「西ノ谷」全域で検出した遺物は、縄文、弥生後期、5世紀後半、8世紀末～9世紀中葉、11世紀末～12世紀末葉、14世紀後半～15世紀代、近現代と七つの断続した時期にわけられる。

①～③の所見から「西ノ谷」が急速に埋没し始めるのは9世紀中葉以降のことであり、周辺窯跡の操業以前や、約400年間の須恵器生産期の堆積作用は顕著なものとはいえない。つまり、「西ノ谷」が急速に埋没し始める要因は、須恵器生産に伴う周辺山林の伐採にあるのではなく他に起因するものと思われる。その可能性の一つとして「西ノ谷」下流の溜池の築造が挙げられよう。

また、調査地付近の「西ノ谷」が水田化されたのは15世紀以降のことと判断される。そして、その際に「西ノ谷」を流れていた自然流路は農業用水路として改変されたものと思われる。図示していないが調査区の一部で、東北側丘陵の裾にそった素掘り溝を現水田耕作土下で検出している。

④からは須恵器生産以外の時期にも、周辺に人間生活が営まれたことがうかがえる。今のところ丘陵部の調査成果からはその痕跡は明瞭ではないが、今後の周辺地域の調査に際しては充分留意されるべき点といえよう。

2 各窯跡出土遺物の編年観

A 1号窯

検出遺物の総量が少なく不明な点も多いが、1号窯出土遺物には以下の特徴があるものといえよう。

①、蓋杯の蓋のつまみが消失しているか、消失傾向にある。^(注9)②、皿Bが消失ないし減少傾向にある。③、皿Aの口縁部の外傾度が著しい。④、長頸壺の頸部の接合方法にいわゆる「三段接合」と「二段接合」の二種類が認められる。⑤、平底の甕が存在する。

以上のような器種構成・形態・技法上の特徴を有する須恵器は、いまのところ陶邑窯跡群からはほとんど検出されておらず、わずかに平底の甕がTK-7号窯出土遺物やMT26号窯^(注11)出土遺物に認められるにすぎない。陶邑窯跡群以外の窯跡出土遺物では、蓋杯の蓋のつまみの消失は小柳1号窯^(注12)、札馬1・22・23・30・47号窯^(注13)に、皿Bの減少傾向は西長尾1号窯^(注14)や小柳1号窯出土遺物に各々認められる。また、皿Aの口縁部の外傾度や長頸壺の頸部の「二段接合」についても、これらの窯跡出土遺物と共通するものといえる。

一方、消費地遺跡での出土状況を見ると、蓋杯の蓋のつまみの消失は長岡京期以降の平安京跡出土遺物に多くみられるし、長頸壺の「二段接合」が登場するものも概ね平城V様式^(注15)からと考えられる。

以上の点からみて、1号窯出土遺物は大概9世紀前半代のものと思われ、形式的にみても長頸壺の「三段接合」など一部に古い様相を残すものの、遺物の主体は陶邑編年IV型式4段階より後出するものといえよう。

1号窯出土遺物は量的に不十分とはいえ、なお不明な点の多い末期陶邑窯跡群の実態解明にとっては重要な資料といえる。そして、形式的にはIV型式4段階とV型式の間に位置づけられよう。

B 2号窯

2号窯(2a・2b-OK)出土遺物の形態・手法上の分類は前途してきたとおりである。そして、灰原の層序と出土遺物の関連・灰原の層間接合の検討をとおして、これら分類された遺物に対して灰原の層序を手懸りに編年上の秩序を与えることが適当でないことも明らかになった。

したがって、本窯出土遺物全体の編年観や窯体の重なりから想定できる出土遺物の時間差については、前項までの分類を基礎に、陶邑窯跡群大野池地区の調査成果と対比させる方法でおこなうこととする。

本窯出土遺物のうち、主要な器種の編年観に関わる形態・手法上の特徴を再度概括してみる。

- ① 蓋杯 口径にバラエティーがあり、とくに杯身については個体毎の器形の差が大きい。天井部・底部が平らなもの(A類)が含まれており、回転ヘラケズリは概して丁重である。内面の調整も比較的丁重で、一部にはスリ消し状の不整方向のナデ調整が認められる。
- ② 高杯 小型無蓋高杯(B類)が存在する。小型有蓋高杯(A I類)は四方透かしに限られ、脚端部が屈曲して段をなすものはない。A II・B類の脚端部はいずれも拡張された凹面をなし、一部には脚部に突線が認められる。
- ③ 大型無蓋高杯(C類)の杯部は深く、口縁部は直立気味である。また、C類に付される把手は概ね底部近くの位置にある。
- ④ 甕 A1・B1・C1類のように口縁部が逆「コ」字状を呈し口縁部の装飾を欠くものと、口頸部を突線・波状文で加飾するA2・B2・C2・D類がある。後者は概ね口縁部が長く、「く」字状を呈する。内面の調整は両者とも比較的丁重である。
- ⑤ 壺 多様な器形があり、有蓋形態のものがある。壺H類(甗)には大型のものが存在する。甗の体部は偏球形状で、底部はやや尖り気味である。甗の一部には底部に静止ヘラケズリを加えたものがある。

以上が本窯出土遺物の主要器種についての形態・手法上の特徴である。これを既報告の陶邑窯跡群大野池地区の出土遺物と対比すると、本窯出土物はON-57・58・220号窯出土^(注16)遺物と共通する要素が多いといえる。したがって本窯出土遺物は陶邑編年I型式2～3段階に相当するものと判断される。蓋杯とくに杯身の法量・形態・手法の個体毎の差が大きく、全体として統一性を欠いている点も、まさに当該時期の特徴と理解されよう。

次に2号窯(2a・2b-OK)出土遺物の時間差についてふれる。

新窯 (2a-OK) と旧窯 (2b-OK) 築造の時間差がさ程でないことは旧窯排水溝 (383-OS) の埋土堆積状況が示すところである。そして、出土遺物の分類・検討をとおしても、出土遺物に明瞭な型式差を認めることはできないように思われる。つまり、層位的所見からも出土遺物の手法・形態上の検討からも、旧窯と新窯の築造はきわめて近接した時期におこなわれたものといえよう。

ただし、2号窯出土遺物のなかに敢えて微差を抽出するとすれば、蓋杯と甕に新窯・旧窯の操業期間内の変化を想定しうる。

蓋杯 蓋の変化が比較的顕著といえる。口径が大きく天井部の平な A 類から、器高が高く半球形の器形を呈する C 類への変化が調整の粗略化という観点から想定できる。B 類はその中間的な存在であろう。

杯身についても蓋とのセット関係から、A 類から C 類への変化を想定できる。なお、蓋杯の口縁端部の五つの形態は、上述の変化との関連性が認められないため、工人差に起因する公算が強いと判断される。

甕 甕については陶器窯全体の傾向として、同種の器形であれば、装飾を欠くものから加飾されたものへとの変化が想定されている。本窯の出土遺物についても、そうした観点に立脚すれば甕 A1・B1・C1類から A2・B2・C2類へのそれぞれの変化が想定できる。そして、その場合、想定された口縁部形態の変化と連動して B2類が大型器種に限定されたり、A2類が A1類に対して容量が著しく減少し、小型器種化するといった変化をも看取することができる。

旧窯の操業時には少なくとも蓋杯 A 類・B 類、甕 A1類が焼成され、新窯では少なくとも蓋杯 B 類が焼成されていたことが、窯体関連の遺物出土状況からうかがえる点も、上述の想定の一助となろう。また、蓋杯 C 類が A・B 類に対して少量であることや、加飾された甕が装飾を欠く甕の約1/2の破片量である点も、旧窯と新窯の遺存した床面数の差に対応するものといえるかもしれない。

C 3号窯

3号窯は灰原の遺存状況があまり良好でなく、出土遺物の総量もさほど多くない。3号窯出土遺物は器種・形態・手法上のすべての点にわたって、2号窯出土遺物との類似性が認められる。ただし、2号窯出土遺物の中で相対的に古い要素として抽出した蓋杯 A 類、甕 A1類がみられないことからすれば、本窯出土遺物は2号窯出土遺物のうち比較的新しい段階のものと並行関係にあるものと思われる。

- 注1 年輪年代測定法による分析では、使用されたヒノキ材の伐採の上限年代は西暦278年という結果を得ている。分析には奈良国立文化財研究所光谷拓二氏の御好意を得た。
- 注2 八尾南遺跡調査会 「八尾南遺跡」1983年
- 注3 文献51
- 注4 文献4
- 注5 文献326
- 注6 植野浩三 「須恵器甕の製作技術」『文化財月報第一集』 奈良大学文学部文化財学科 1982年
- 注7 注2に同じ
- 注8 文献59
- 注9 高台のつく皿をさす。
- 注10 文献615
- 注11 文献61
- 注12 京都府教育委員会 「篠小柳窯跡群の発掘調査」1980年
- 注13 加古川市教育委員会 「札馬古窯跡群発掘調査報告書」『加古川市文化財調査報告7』1982年
- 注14 京都府埋蔵文化財センター 「京都府埋蔵文化財情報第7号」1983年
- 注15 奈良県国立文化財研究所 「平城宮発掘調査報告VII」『奈良国立文化財研究所学報第26冊』1978年
- 注16 注4に同じ

第五章 C地区の調査成果

第一節 C地区の調査経過と概要

1 位置と調査経過（図版1・9 写真図版78～80）

C地区は、府道和泉・富田林線の南側に位置する調査区である。南北に延びる信太山丘陵の西辺近くにあたり、調査地周辺では南東から北西へかけて下る緩斜面をなしている。現状では大半が畑地として利用され、畑地北端を流れる農業用水路で画された府道沿いは資材置場として使用されていた。調査地の標高は、おおよそ79.0m前後である。

本調査は、1985年10月11日より翌年の1月18日まで実施した。調査は、約5,400m²を対象とした。その調査終了後、農業用水路の付け替え工事が道路公団により行われ、2月3・4日の2日間にわたり改修部分を追加調査した。調査は、幅2.0m、長さ約16m、9mのトレンチを2本設定し、面積は約50m²であった。

2 基本層序（図版13）

C地区では5層の土層堆積が確認できた。

第1層 暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）土 耕作土、層の厚さ0.10～0.3m。

第2層 黄褐色（10YR5/8）粘質土、層の厚さ最大0.2m、

第3層 明黄褐色（10YR6/6）粘質土、層の厚さ最大0.2m。

第4層 明黄褐色（10YR6/8）粘質土、層の厚さ最大0.2m。

第5層 黄橙色（10YR7/8）粘質土、砂礫を含む。洪積層。

以上のうち第2～4層はやや低い所に位置し、調査区北端周辺にのみ確認できる土層であった。大半の所では第1層直下で第5層があらわれた。限られた北端周辺での状況をもとに記述を進めると、第2層上面からは畑作に関連する溝、土壌等を、第4層上面では歴史時代の溝（3-OS）を、第5層上面では第4層と同系土を埋土とする土壌を検出した。しかし、大半の部分では第2～4層を欠くため第1層直下の第5層上面において各層対応の遺構を重複して検出した。

第2～3層からは近世の陶磁器が若干出土した。第4層は、他の調査区のあり方をみると第5層上面全域に堆積する土層のようであり、この調査区の低い箇所部分的に存在するのは、高い箇所を削平したためであろう。第4層上面で歴史時代の溝を検出しているこ

とから古代から中世の遺構は、本来第4層を遺構面としていた可能性が高い。第4層には遺物が全く含まれておらず、この層と同系土を埋土とする土壌の時期も伴出遺物がないために明らかでない。また、土層の時期には関係ないが第1層から第3層にはサヌカイト製の石器類、古墳時代の須恵器等が含まれていた。

第二節 遺構

中世を遡ることが明らかな遺構は、方形周溝状遺構1基、溝2条のみである。焼土壇2基については時期が定かではない。その他は、耕作に伴う溝、土壇等であり、全て近・現代の所産である。第4層下面の第5層上面において検出する第4層と同系土を埋土とする土壌は、第1層直下で検出する耕作に伴う土壌との判別が明瞭でなく、一括して扱わざるを得ない。

1 方形周溝状遺構（1-OX）（第63図 写真図版81-2）

調査地中央において検出した溝が方形に巡る遺構である。後世の削平が著しく、溝等の重複もあり残存状態は悪く、溝は残りのよい部分で幅2.0m、深さ0.2mを測り、南北主軸が座標北に対して7度程度西へ振り、隅丸方形に巡っている。溝の内法で東西6.8m、南北7.7m、外側で東西・南北とも10.6mを測り、溝の心々間は東西・南北とも約9.0mである。四周の溝底のレベルはほぼ等しく、溝は南辺中央で陸橋状に開くようである。削平をうけているため周溝内側での盛土の有無は確認できず、構内及び周辺にも周溝に伴う遺構は検出できなかった。

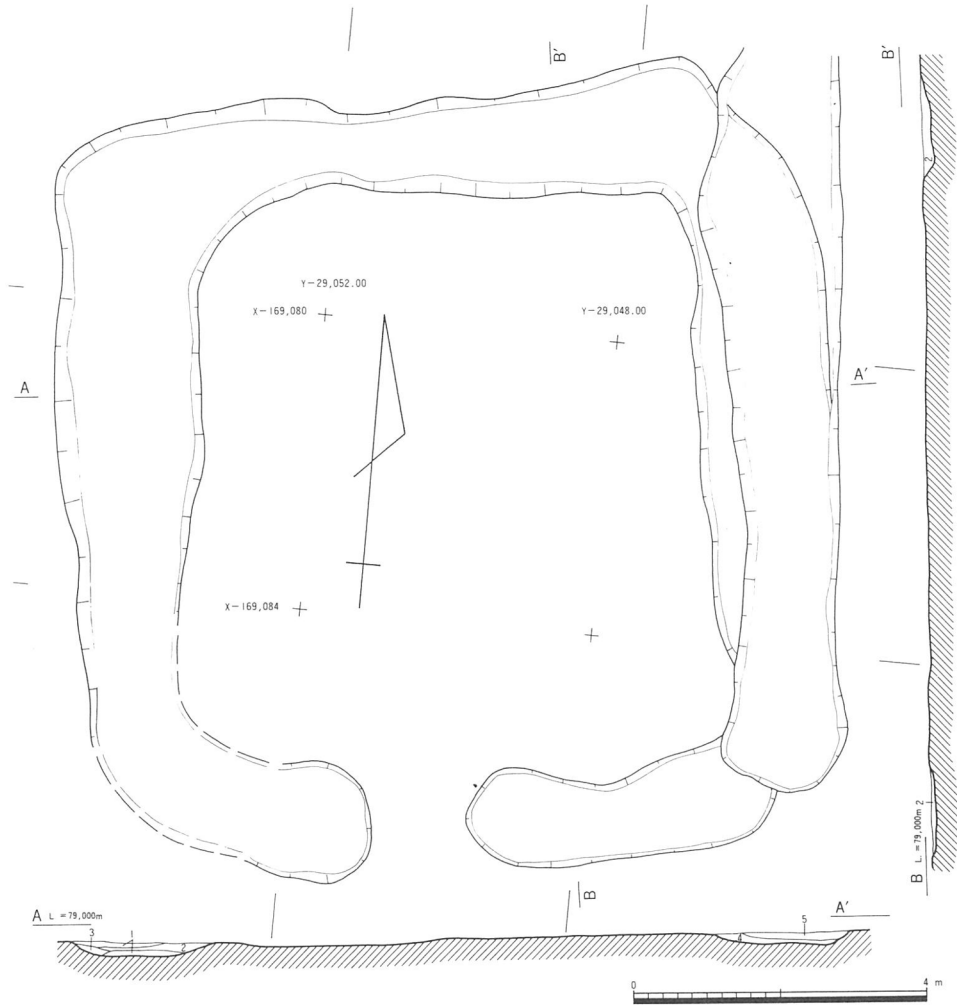
遺物としては、北辺中央より平安時代の黒色土器の椀2個体、南辺西側より土師器杯1個体を検出している。いずれも周溝埋土の下層からの出土である。

この遺構は各辺をほぼ四至にそろえられ、溝心々間の距離30尺と考えられる隅丸方形の平面形から火葬墓のような性格をもつ遺構であると考えられる。

2 溝

A 2-OS

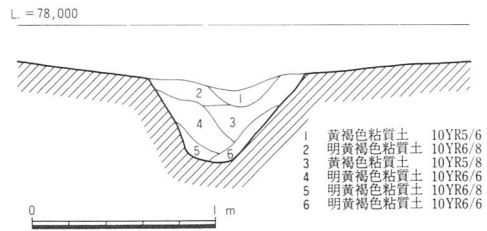
方形周溝状遺構1-OXの東辺に重複して検出した遺構である。全長30mにわたり、北北西の方向にのび、両端は完結している。削平のため幅が一定しないが、残りのよい部分で幅1.6m、深さ0.2mを測る。底面は、南から北へ傾斜する。遺物としては、須恵器片、土師器片を検出したが、時期を決め得るほどではなかった。



第63図 方形周溝状遺構 1-OX 遺構図 (1/100)

B 3-OS (第64図 写真図版82-2)

調査地北端の第4層上面において約26mにわたり検出した溝である。幅0.8m、深さ0.4mを測り、西北西へ向け直線的のびる。埋土は、若干シルト質であり、水の流れた可能性がある。遺物としては須恵器甕片、土師器片が出土した。



第64図 溝 3-OS 東壁断面 (1/50)

3 焼土壇（第65図）

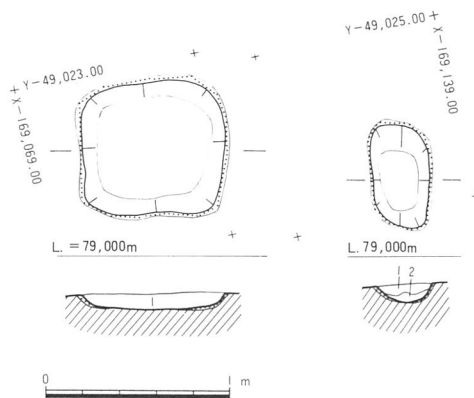
A 4-00

第1層直下の第5層上面で検出した。平面形が隅丸方形を呈する土壇である。規模は、東西0.76m、南北0.7m、深さ0.08mを測る。壁面は、緩やかで浅い断面形をなす。全面に酸化焼成をうけ壁面が0.02m程赤変する。埋土には木炭片が混じっている。伴出遺物はなく、時期は不明である。

B 5-00

4-00と同じく第5層上面で検出した。

平面形は楕円形を呈し、長径0.58m、短径0.30m、深さ0.10mを測り、横断面がV字形に窪む土壇である。全面が酸化焼成をうけ、壁面は0.01m赤変するが底面ではさらに薄い。埋土下層では形状をとどめる木炭の堆積があり、鉄片、鉄が32.2g存在した。この遺構もまた時期は不明である。しかし、この遺構の性格は4-00とともに野鍛冶に関連する遺構であると考えられる。



第65図 焼土壇4・5-00遺構図（1/40）

4 その他の遺構（写真図版81・82-1）

第2層上面及び第1層直下の第5層で検出した溝、土壇等がある。溝は幅0.1～0.6mのものと同幅0.4～0.6mのものが見られ、いずれも深さは0.3m未満である。現在の地割に平行もしくは直交することから畝溝と考えられる。調査地南西隅に集中する傾向がある。土壇は円形、方形、不定形の様々な形状を呈し、施肥関係のものが大半であると思われる。土壇6-00には平瓦等が廃棄されていた。第4層下面で検出する土壇は、厳格に区別することができず、存在することを指摘するにとどまらざるを得ない。最近の耕作に伴うものとしては他に堀立柱建物（210-OB）、溜池（211-OG）、肥溜、井戸等が存在した。

第三節 遺物

信太山遺跡C地区では、石器、サヌカイト剥片、チャートの剥片、古墳時代の須恵器、平安時代の土師器・黒色土器、近・現代の陶磁器、瓦が出土している。これらのうちで遺構から出土したものは少なく、そのほとんどが第1～3層で散在的に出土している。

A 石器 (第66図 写真図版83-1)

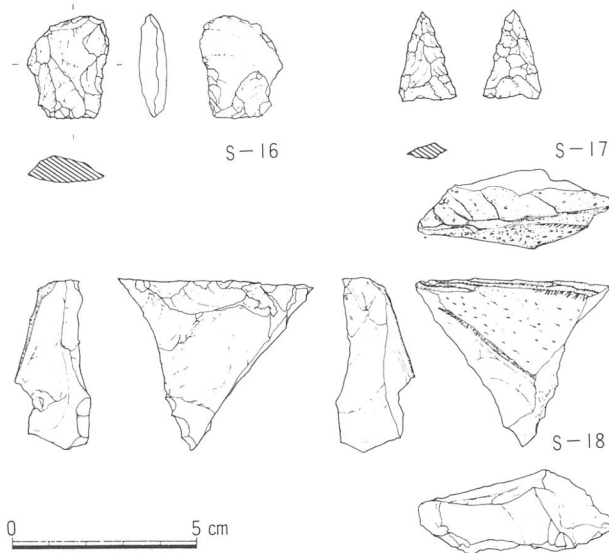
石器には石鏃、刃器、石核がある。石鏃(S-17)は、平基式で表面基部の左端が欠いている。長さ2.4cm、幅1.6cm、厚さ0.4cm、重さ1.4gである。両側辺はほぼ直線上を呈し、基部はわずかに内湾している。裏面中央に、素材剥片の主要剥離面を残す。サヌカイト製で風化が著しいが、弥生時代のものであろう。

刃器(S-16)は、サヌカイトの縦長剥片を素材として長辺沿いに刃部加工を行う刃器である。腹面には主要剥裏面を大きくとどめ、背面に多方向からの剥離を重ねている。短辺沿いにも剥離を重ねており、平面形が台形に近いことから楔形石器の範疇に入るかもしれない。長さ2.8cm、幅2.1cm、厚さ0.7cmを測り、重さは5.2gある。

石核(S-18)は、サヌカイト製で、平面形が三角形を呈する扁平な形態である。礫面をとどめており、二辺は

打点を転移した横長剥片を作り出した剥離面を認める。平面的に残る剥離面は、打面調整に伴うものかもしれない。長さ4.6cm、幅5.2cm、厚さ2.1cmを測り、重さは34.9gである。

石器類としては、他に剥片が6点あり、そのうち1点は、チャート製である。他は、全てサヌカイト製である。



第66図 C地区出土遺物(1)

B 須恵器 (写真図版83-2)

須恵器には、杯・壺・甕がある。細片が多く、全体を復元できるものは少ない。杯身(第67図-482)は、試掘の時に出土した。口縁の破片で受け部は、水平に突き出し、立ち上がりは、わずかに屈曲する。口縁端部は丸く、口縁・体部ともに回転ナデ調整が施されている。これらのことから6世紀後半に位置付けられる。図化しなかったが、他に杯の破片が2点出土している。一つは、高台の付く杯で摩耗が激しい。もう一つは、杯身体部の破片

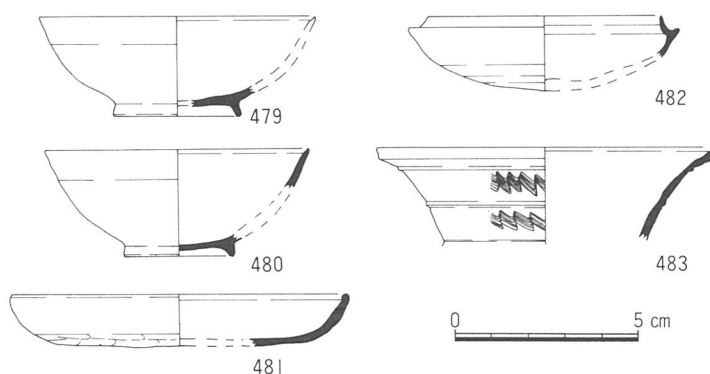
で外面には、回転ヘラケズリ、内面には回転ナデ調整を施している。壺（第67図-483）は、頸部から口縁部にかけての破片で口縁端部には面を有する。外面には、二条の沈線と九条一組の櫛描き波状文を二段に施す。口縁内部には、灰が付着している。甕は、頸部と体部の破片である。溝3-OSから出土した。外面全体には、格子状タタキを施し、肩部にカキ目を加える。内面全体には、同心円文のタタキが残る。なお、肩部には灰が付着している。

C 土師器（写真図版83-3）

細片が多く図化できたものは少ないが、皿（第67図-481）と甕の破片がある。皿は、方形周溝状遺構から出土した。平坦な底部と内湾気味に立ち上がる口縁部とからなる。口縁端部は丸く、内側にわずかに肥厚している。底部外面には、ヘラケズリを加え、口縁および体部はヨコナデで調整する。形態・口縁の形状から平安時代のものと考えられる。

D 黒色土器（写真図版83-3）

方形周溝状遺構から2個体出土した。第67図-479は、内面のみに炭素を吸着させて黒色化をはかる。底部には、逆台形状の高い高台をはり付ける。体部は、破片から推定するならば、椀状の形態をなすと思われる。口縁は、わずかに外反し、端部に弱い面をもつ。口縁部にのみヨコナデを加え、体部および底部は未調整で指圧痕を残す。内面には、横方向のヘラミガキを丁寧に加える。第67図-480は、内外面ともに黒色処理をおこなう。底部には、外へ向かって強くふんばる高い高台をはり付ける。口縁には、ヨコナデを加え、内面に沈線状の形態をなすと思われる。ともに、10世紀後半のものと考えられる。



第67図 C地区出土遺物(2)

E 瓦類 (写真図版83-5)

平瓦と丸瓦とがある。調査区中央の土壌6-00から出土した。瓦は、いずれも本瓦造りで、棧瓦ではない。平瓦は、破片で出土しており、全体を復元できるものは少ない。そのため、正確な出土個体数を確定することはできないが、隅部が残る破片だけでも16点ある。大きさのわかるものはないが、広端部の幅は、明らかなもので28.5cmと26.0cmの2種類がみられる。挟端部の幅は、24.5cmから23.0cmのものがある。全長のわかるものはない。厚さは、広端部側で2.2cmと1.7cmの2種類ある。このことから、平瓦は大小の2種類存在すると考えられる。両者ともに、全面に幅の広いナデを加えたのちに端部にそってとくにナデが施されている。しかし、端部をへら状工具で面取るものもみられる。また、一枚の平瓦で一部分の風化の程度がことなるものがみられる。これは、屋根に瓦が葺かれていた時に、瓦が重ねられていた部分とそうでない部分の違いであろう。丸瓦は、外面全体にナデ調整を施し、内面には布目の圧痕が残る。これら出土した平瓦、丸瓦から年代を推定することは非常にむずかしいが、遺構の埋土などから近世から近代に属すると考えられる。

F 陶磁器 (写真図版83-4)

調査区全体から散在的に出土した。伊万里の染付碗、美濃の天目茶碗、唐津の刷毛目鉢の破片がある。これらは、細片のため図化できず、時期も不明である。時期の明らかなものとして、明治時代以降の美濃の型紙すりつけの碗があるだけである。

時代	弥生土器	土師器	須恵器	黒色土器	瓦器	陶磁器	染付	瓦類	石製品	金属製品	合計
弥生時代	2								8		10
古墳時代		4	80								84
飛鳥・奈良時代			2								2
平安時代				26							26
近世・近代		1				15	26	72		3	117
時期不明		35				3					38
	2	40	82	26		18	26	72	8	3	171

第68図 C地区出土遺物数量表

第四節 まとめ

今回の調査は、他の調査区とあわせると信太山丘陵に幅約40m、長さ約1.5kmのトレンチを設定したことになり、丘陵を南北に縦断する発掘調査であった。その結果、信太山丘陵上の遺跡の存在の有無及び存在の範囲をより明確にすることができた。

その中で、C地区では開墾などの開発により、遺構面がかなり削平されていることが判明した。また、遺構の密度は高いが、大部分の遺構は時期、性格が不明であった。遺物は、

少量認められた。しかし、明白に遺物が遺構に伴い、時期が判別できる遺構は、方形周溝状遺構、溝、焼土壙等に限られた。他は、畑作に関連する溝、土壙等であり、それらは、近代・現代に属すると考えられる。

検出した遺物の中に、サヌカイト製の石器等が含まれることから、弥生時代以前の遺構も存在した可能性も考えられる。また、須恵器片の存在も同様の状況を示すと考えられる。今後の周辺の調査によってより明らかになるであろう。

今回の調査で最も注目すべき事柄は、ただ一基ではあるが平安時代の方形周溝状遺構の検出である。この遺構は、ほぼ正方形の平面形を呈し、四周に溝をめぐらしていた。溝内には黒色土器、土師器が存在し、それらは、10世紀後半にこの遺構がつくられたことを判断する資料となった。

この遺構は、当地が削平される以前には盛土を有していたと考えられ、墓であったと思われる。このような周溝墓は、近年、関東・東北地方では多数検出されている。^(注1) また近畿地方では、長岡京市の右京五条三坊十四町・西陣町遺構^(注2)、京都大学構内遺跡^(注3)などで検出されているだけで、類例は少ない。これらの調査によりこのような遺構が、従来マウンドを有し、その頂に塔婆が置かれ、溝内に供献土器が配された火葬墓であると判断されるようになった。

今回の調査では方形周溝状遺構に伴う遺物は、土器類だけで塔婆に関する遺物は一切検出することができなかった。それゆえ、マウンド上に塔婆が存在したか否かは不明である。しかし、今回の発掘調査が平安時代の墳墓研究の貴重な一資料になったことはいうまでもない。

注

- (1) 山岸良二「方形周溝状遺構」研究序説（Ⅰ）『東邦大学付属東邦中学校研究紀要』 2 1983年
「方形周溝状遺構」研究序説（Ⅱ）『東邦大学付属東邦中学校研究紀要』 3 1984年
- (2) 財団法人長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第2集1985年
- (3) 京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和53年度1979年

第六章 D地区の調査成果

第一節 D地区の調査経過と概要

1 位置と調査経過（図版1 写真図版84・85）

信太山D地区は、北西方向にのびる丘陵上に位置し、南北端を市道で画されている。この丘陵上には現在小開析谷があり、一部池の南端にもものびる。このため調査は、便宜上立蔵池の北側と南側にわけて行った。一方池の周辺部には、計6箇所のトレンチを設定し、池周辺部の遺構確認を行った。

調査以前の土地状況は、池北側が一部宅地や農地として利用されていたほか、池周辺部は雑木林、池南側は荒地となっていた。

2 基本層序（図版13）

調査区全体にわたる基本的な層序は、表土直下にすぐ地山層が露呈する。しかし、立蔵池に向かって緩やかに傾斜するところでは、黄褐色(2.5YR5/3、2.5YR5/4、10YR5/6)粘質土の堆積が認められる。また池北西部では、地山層を削平したと考えられる土で整地を行っている。この盛土層の最下部では薬瓶、灰皿などを検出し、この整地がごく最近行われたことを示している。

一方池南側に設定したトレンチでは、調査区西側から中央部にかけて、砂と粘土が互層に堆積している状況を確認した。これは、おそらく立蔵池堰堤の一部と考えられる。

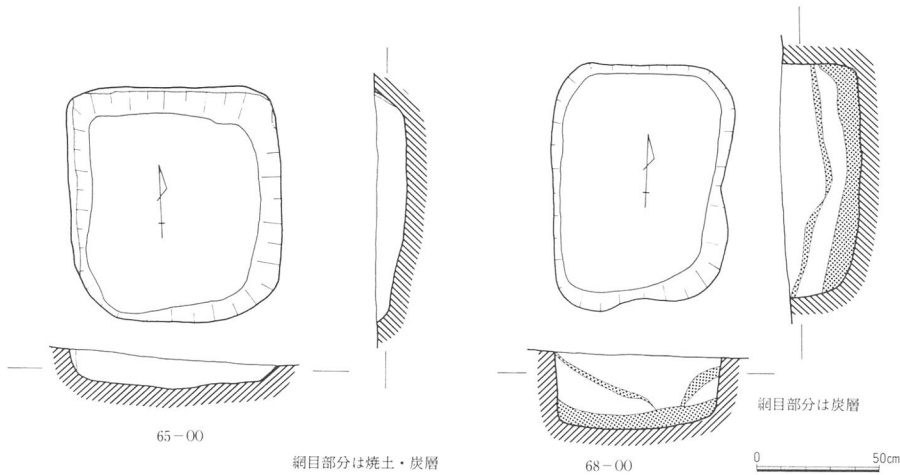
第二節 遺構（図版10・11 写真図版86）

遺構は、調査地内で総数391の土壌、溝、ピットを検出した。これらはいずれも地山面上で確認した。池北側で検出した溝のほとんどは、205-OSと206-OSで囲まれた区画内と、84-OSと102-OSで囲まれたところに集中している。これらの溝は、ほぼ同一方向(北東～南西)に走ることがわかる。これらの溝は、その方向が調査地東側に広がる畑の畝溝と一致すること、また溝内から染付片が出土することから、近世以降の畝溝と考えられる。

土壌についてもそのほとんどが遺物を伴わず、時期・性格については不明である。しかし、65-OO、68-OOは炭・焼土を含むものとして注目される。65-OOは96cm×94cmの土壌で、その北・西・東壁の一部を「コ」字形で炭・焼土が付着し、暗灰褐色(2.5Y4/2)

粘土を埋土とする。遺物は全く出土していない(第69図)。68-00は95cm×69cmの隅丸方形の土壇で、底に厚さ約5cm炭を充填し、そのうえに黄褐色(2.5Y6/4)粘質土、厚さ2～3cmの炭、黄褐色(2.5Y6/4)粘質土が堆積している。65-00と同様遺物は出土していないため、その性格は不明である。

池南側はかなりの攪乱をうけ、特に調査地南端付近では大規模な攪乱を受けているため、地形が著しく改変されている。遺構は、地山直上面で溝10条、土壇約20基を検出しているが、溝、土壇ともほとんど遺物を伴っていない。さらに溝はその方向が不規則なため、性格についても不明である。ただし390-OSからは、近世の染付、陶器の細片が出土している。



第69図 65・68-00遺構図(レベルは80.5m)

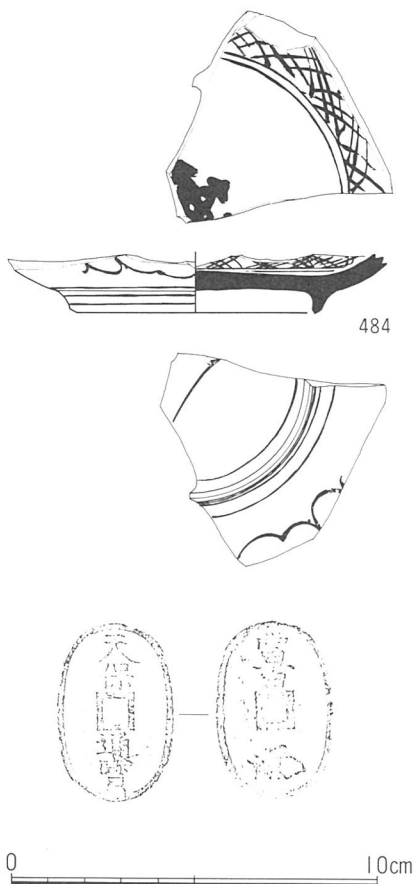
第三節 遺物

遺物は、調査地全体でコンテナ11杯分出土しているが、そのほとんどが近世陶磁器の細片である。その中で池北側中央部では伊万里染付皿が出土した(第70図)。残存口径10.3cm、残存器高1.6cm、見込中央にはコンニャク判の五弁花を押し、内面に唐草文を描く。18世紀後半頃と思われる。また、1-OSからは天保通宝が出土した(第70図)。池北側、南側双方から出土した陶磁器の細片も、この時期を大きくさかのぼるものではない。

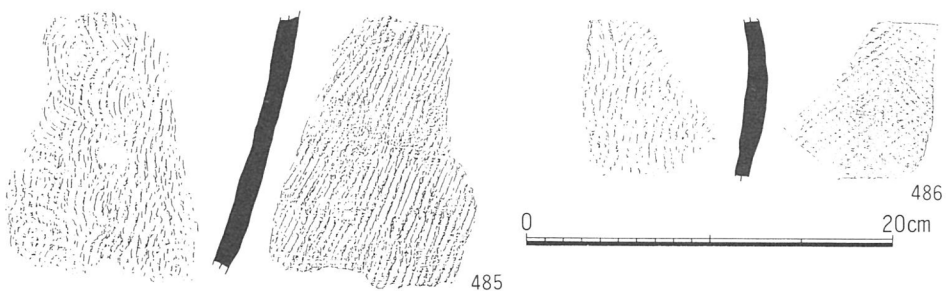
しかし、池北側から須恵器甕の胴部破片が数点出土している。外面は擬格子タタキを施し、内面には同心円文が残る（第71図）。

第四節 まとめ

調査地池北側では、出土遺物から18世紀後半以降のものと思われる畝溝を検出した。このことから調査地域は、江戸時代以降農地として利用されていたことがわかる。池南側については、遺構の性格に不明な部分が多いながら、池北側同様江戸時代以降農地などに利用されていた可能性が高い。また、池周辺部に設定したトレンチでは、立蔵池の堰堤を確認したものの、明確な遺構は検出されなかった。しかし、池北側斜面で須恵器片が出土しているため、当調査地付近にそれに伴う遺跡の存在が考えられる。



第70図 染付・天保銭



第71図 D地区出土須恵器

第七章 総括

A 地区、B 地区に相当する国有地は自衛隊の演習地であるため無数の塹壕が掘られ、C 地区、D 地区では耕作のため古い包含層も全て削平されていた。特に、A 地区、B 地区は第二次世界大戦後の演習地整備により地山上にキャタピラーの跡が残っている場所もある。このため、窪地に再堆積した土層や底の部分だけが残っている土壌には弥生時代や古墳時代の遺物を含み、この付近一帯に本来は多量に遺構が存在していた可能性を示すものである。現代の塹壕の埋土に含まれる弥生土器や須恵器、石器などもこの推定を裏付けるものである。C 地区で検出した溝が方形に巡る遺構は残存状況が極めて悪く、性格を決定するに至らなかった。台地上の部分には遺構が極めて少なかったが、これは後世の影響によるもので、本来ここに遺跡が存在しないことを意味するものではない。

A 地区、B 地区は南北に延びる谷で分断されているが、この谷の部分で窯跡を 5 基検出した。特に 4 号窯が構築されていた谷は規模が極めて小さく、完全に埋没していた。表面に遺物の散布も全く無く、このような小さい谷にまで窯が構築されていることは、今後の窯跡の調査に際しては留意すべき点である。また、陶邑古窯址群の調査の際に大阪府教育委員会が遺跡の範囲を分割した。今回の調査地はこの分割方法によると大野池支群に含まれる。大野池支群は他の支群に比べて窯跡の調査、報告例が少なく今回検出した窯跡は各支群間の比較検討に貴重な資料である。

検出した窯跡は 1 基（1 号窯）が奈良時代の終わりごろのものであるが、他の 4 基は古墳時代に所属し時期が近接している。これら 4 基の窯跡は、中村編年の I - 2 期（中村：1980）、田辺編年の ON - 46^(注1)（田辺：1984）の時期に相当する。2 号窯は窯の床面が二枚あり、確実に新旧の差がある。しかし、灰原の土層は、明確に床面と対応しない。この窯の上層の遺物は、中村編年の I - 3 期に、田辺編年の TK - 208^(注2)の時期に相当する。2 号窯の下層に当たる窯と、4 号窯の灰層の時期は極めて接近している。3 号窯の灰原は削り取られてほとんど残っていなかったが、2 号窯と 4 号窯は灰原が良好な状態で残っていた。2 号窯は灰原の範囲も広く、須恵器を含む層が厚く堆積していた。この窯の灰原は北西部が調査区の範囲外になるために完全に掘り切ることはできなかったが、遺物を収納する箱に 600 箱あまりの須恵器を検出した。これに対し 4 号窯は窯体が全く残存していないが、灰原は小さいながらも良好な状態で残っていた。検出した須恵器の量は 100 箱あまりと少ない

が、窯から掻きだしたと思われる燃えた木片を検出するなど窯の操業時の実体を把握するための貴重な資料であろう。

これらの灰原から検出した須恵器の特徴は図から判断するだけではTK-23およびII-3期に相当する須恵器に見えるが、端部が平坦かわずかに内傾する口縁部の形態、ロクロの回転力があまり強くないため削る幅が狭く、入念なヘラケズリ、入念に調整しているがあまり鋭くない端部や稜線などに古い特徴が明瞭に認められる。形態は中村、田辺両編年による、I-2期、TK-216などに通じる形態を示すものや、後続する型式に認められる特徴を有するものがある。今回の調査で得られた資料は灰原の資料であるため、時間的な差異がどのくらいのものか限定することが難しい。しかし、比較的短時間に堆積したと思われる4号窯の灰原の遺物にもかなりの個体差がある。この窯の遺物の個体差は灰原の資料という前提条件がなければ、到底同一型式とは認定できないほど個体差の大きいものがある。この報告書に使用した資料の中で4号窯出土の15と27とが窯跡ではなくて住居址や包含層から出土した場合に、これを同一の窯の製品で時間的な差があまりないことを証明することはかなり難しいことと思われる。

個体差を問題にした場合、「床式編年」に従えば、時期区分という単位では全く問題はないが、細分された段階ではさほど分類の基準が明確でない。これは、「床式編年」が古典的な森編年、田辺編年の隙間を新発見の資料で埋めたこと^(注3)に起因していると思われる。個体差の問題は「床式編年」が提唱された際にも部分的に取り上げられていたが、測定、計算の成果が「床式編年」にあまり反映されていない。今後、須恵器の編年作業が細部に及ぶに従って形態を数値で表現するための測定方法や、同一型式の中での個体差の許容範囲の設定など解決を迫られている問題が数多く残されている。

注

注1 文献49

注2 文献619

注3 文献22

付 章

信太山遺跡1号、2号、3号窯跡の考古地磁気測定

はじめに

昭和61年2月15日及び3月1日に採集した信太山遺跡1号、2号、3号窯址の試料の考古地磁気測定の結果について報告する。考古地磁気測定を用いた年代推定法は古窯の発掘調査においては近年かなり一般的に用いられる手法と成っており、よい解説も見られる(中島・夏原、1981)。原理・方法の詳細についてはそちらを御参照頂きたいが、我々は最近考古地磁気試料に対しても交流消磁を適用しているので(Shibuya、1984、渋谷・夏原、1985)それについて少し述べたい。

焼土の磁化は土中の小さな磁性鉱物の粒子によって担われている。これらの粒子は個々には常に磁化を持っているのだが、土壌が焼かれるまでは、殆どばらばらの方向を向いており、全体としては非常に小さな磁化しか持っていない。しかし、これが焼かれると、個々の粒子は固有の温度で磁化が失ない冷却時に周りの磁場の方向に磁化する。土壌中の磁性粒子は自然物であるので組成、大きさなどがまちまちである。磁性鉱物粒子の磁化方向の安定性(熱に対する安定性、交流磁場に対する安定性など様々なものがありうる。これらの安定性はお互いに完全には比例しないが、ある程度関係がある。)はこれらのファクターで変化するので土中には様々な安定度を持った粒子が混在していることになる。一般に良く温度の上がった焼土の場合、熱によって安定な粒子の磁化が書き替えられて、当時の磁場の方向に揃っているのが、強く安定な磁化を持っており、少々不安定な磁化がその後生じてても全体の磁化方向にはあまり影響しない。しかし、温度の十分上がっていない焼土の場合には、安定な粒子の磁化が書き替えられていないので、不安定な粒子の磁化が相対的に大きくなっている。不安定な粒子の磁化方向は、長時間の埋蔵中や試料採取後保存中の磁場の方向に変化していることがある。そのような場合は、全体の磁化方向も引き摺られていることとなる。このような不安定な磁化は試料を交流磁場にさらし、その振幅をなめらかにゼロに近付けることによって、試料全体としては消してしまうことができる。ただし、交流磁場に対する安定性と、弱い磁場に長時間さらされたことに対する安定性は完全

には比例しないので、いかほどの交流磁場をかければ二次的な磁化を消せるかは、個々に異なっている。また、消磁のために強い磁場にさらすのであるから、磁場のプラス側とマイナス側に少しはあるアンバランスによって付く磁化がかえって焼かれたときの磁化を覆ってしまう場合がある。そこで、普通は1サイトから1個以上の試料を選び、弱い方から段階的に様々な交流磁場で消磁し、いかほどの交流磁場が適当であるか確かめた後、残りの試料を消磁するようにしている。

測定手順

試料は1号窯と2号窯A層については1986年2月15日に、2号窯B層と3号窯については3月1日に採集した。試料採取の方法については中島・夏原(1981)を参照されたい。採集した試料数は2号窯A層が11個であるのを除いてそれぞれ10個づつであった。残留磁化の測定は京都大学理学部地質学鉱物学教室の超伝導磁力計で、消磁は同教室の五重磁気シールド中の非回転式交流消磁装置で行った。測定の手順はまず全試料の残留磁化を測定し、次に各サイトから1個の試料について段階交流消磁を行い、その結果を参照して適当と思われる強度の交流磁場で残りの試料すべてについて消磁するという順序に従った。

消磁結果

各サイトから段階消磁の結果を第1図に今回の測定に供した試料は第1図に示す通りいずれも非常に安定な磁化を持っていた。第1図はZijderveld図とか直交消磁図と呼ばれ、各消磁段階ごとの磁化ベクトルの終点を順次結んだ図の水平面投影図と垂直面投影図を一つにまとめた図である。黒丸が水平面への投影(上が西、下が東、右が北、左が南)、白丸が垂直面への投影(上が上、下が下、右が北、左が南)を表わしている。点の横に記した数字は交流磁場の強度で、単位はmT(ミリテスラ)である。この図で、点の間をむすんだ直線がその消磁段階で消された磁化ベクトルとなる。この図の上では磁化の各成分は直線上に並ぶ点の列で表され、特に考古地磁気試料の様な単純な熱史を持った試料では問題とする初生磁化は原点に向かう直線として表される。

第1図を見ると、いずれの試料を取って見ても安定で、10mTの消磁で磁化が10%も減らない。方向についても非常に安定であるが、15mTまでに消磁される成分が少し違う方向を持っているようにも見える。その後は原点に向かって直線的に消磁されている。15mTまでに消磁されている成分については、消磁による磁化の変化が少ないため、その変化量を取

って議論をすると、前章で述べた交流消磁によって寄生的に獲得されている磁化や測定の誤差の影響が大きく効いて来るので、これからだけでは何とも言えない。残りの試料の消磁結果を消磁前と比較して方向のまとまりが改善されたかを見て、消磁の効果を判断したい。

磁化方向

第2図は1号窯、2号窯A層B層、3号窯の消磁前と、消磁後(2号窯A層については10mT、その他は15mT)の磁化方向の等面積投影図である。第1表にその数値を示す。ただし、現在の偏角として西偏 6.5° を用いた。また、第1表には各サイトの平均も示した。平均にAとBの二つが有るものは、Aがそのサイトの全試料の平均で、Bが番号の横に*を打った試料を除いた平均である。平均Bを示したのは*を打った試料が消磁前あるいは消磁後の方向が他の試料と著しく異なっていたので他の試料と同列に論じることができないと判断したためである。考古地磁気測定においては通常の考古地磁気測定に比較しても細かい角度を問題としているので、例えば、試料が焼けた後に動いた場合や、試料整形時に乱れた場合など様々な原因で異常な方向を持つ試料が出るのをある程度は避けることができない。このような試料を排除するための客観的な基準として、ここでは各試料の磁化方向の内、平均から最も遠いものが孤立値であるかどうかの検定をMcFadden (1982)に従って5%の危険率で行い、孤立値であると判定されたものは省いて次に遠い者について同様に判定を行うという手順を省ける試料がなくなるまで繰り返している。孤立値と判定された試料を統計的テストだけで省くことをMcFadden (1982)は戒めているが、今回のデータでは排除された試料は磁化強度も他と比べて特に弱いものであった。異常な方向の原因は十分に温度が上がっていなかった為と考えられ、これらの試料は以降の議論で排除する。

磁化方向は消磁前も消磁後も非常にまとまりが良い。消磁前と消磁後の信頼角を比較すると必ず消磁前の方が消磁後より小さい(第1表では同じものも有るが、もう1桁取ると消磁前の方が小さい)。今回の様に十分に温度が上がって安定な磁化を持っているような試料の場合は、消磁による不安定成分の除去の割合より消磁装置が完全でないことによる磁化の獲得の方が大きい様である。以上の結果から年代の推定には消磁前の方向を用いる。信頼角は2号窯のA層が 2.9° と少し大きいのを除いていずれも 2° 以下で、交流消磁に対して非常に安定であったこととともに、結果の信頼度の高さを示している。

通常であればこの結果を用いて年代を推定するのであるが、今回2号窯では2層で試料

を採取しており、その相互の磁化方向が少し異なっているのに対して議論する。2号窯では窯体の上部から6個(31-6)下部から5個(37-41)を採取した。異常な方向を持つ36-8を除いて残りの試料について方向を見ると、上部の31-5が等面積投影図上で右上に下部の39-41は左下に位置している。また上部の試料はB層のデータと殆ど同じ方向を持っているのに対して下部の試料の方向はそれ等と異なっている。A層の試料採集の際の状況は上部ではかなりA層が多く残されていたが、下部では右半分のみが残されていて、上下及び左がたちわりで切られた長方形の1区画で採取している。このような状況の元ではA層の残された区画はB層の上面で滑りやすいであろう。上部と下部の磁化方向の10°程度の違いをこのように説明すればA層全体の平均で年代を議論するのは適当ではない。A層について、ここでは、上部の磁化方向がB層に近い事から見てA層とB層の間の時間間隔は少ないであろうとだけ述べて、それ以上の年代推定は差し控える。

推定年代

各窯址の平均磁化方向の偏角、伏角と Shibuya (1980) による地磁気永年変化曲線(中島・夏原(1981)に再録されている)との比較が第3図に示されている。1号窯については、このように大きな西偏示す時代は9~10世紀のみであり、伏角も一致することからそのころと考えられるが、この頃は偏角も伏角も変化の少ない時代であるので、その間のいずれの年代と特定する事はできなかった。一方、2号、3号窯はいずれも5世紀と考えられ、2号窯は中頃、3号窯は前半であろう。

文 献

McFadden, P. L. (1982) : Rejection of palaeomagnetic observations, *Earth Planet. Sci. Lett.*, 61, 392-395.

中島正志、夏原信義(1981) : 考古地磁気年代推定法。考古学ライブラリー9。ニュー・サイエンス社。

Shibuya (1980) : Geomagnetic secular variation in Southwest Japan for the past 2,000 years by means of archaeomagnetism, M. E. thesis, Fac. Eng. Sci., Osaka Univ., pp. 54.

Shibuya (1984) : Several archeomagnetic measurements on baked earths in Kyoto Prefecture, *Rock Mag. Paleogeophys.*, 11, 1-3

渋谷秀敏、夏原信義(1986)：四天王寺食堂焼土遺跡の考古地磁気測定、四天王寺食堂跡発掘調査報告書、四天王寺（印刷中）。

試料番号	交 流 消 磁 前			交 流 消 磁 後		
	偏 角	伏 角	強度又は 信頼角	偏 角	伏 角	強度又は 信頼角
1号窯				消磁強度 = 15mT		
OS21	-23.2°	50.1°	15.1 $\mu\text{A m}^2$	-22.7°	49.0°	12.5 $\mu\text{A m}^2$
OS22	- 7.4°	49.7°	8.82 $\mu\text{A m}^2$	- 8.6°	50.4°	7.93 $\mu\text{A m}^2$
* OS23	-25.5°	56.9°	3.95 $\mu\text{A m}^2$	-26.1°	56.1°	3.14 $\mu\text{A m}^2$
OS24	-18.3°	47.1°	15.6 $\mu\text{A m}^2$	-16.7°	47.6°	14.5 $\mu\text{A m}^2$
OS25	-14.9°	49.1°	15.9 $\mu\text{A m}^2$	-15.3°	48.3°	14.5 $\mu\text{A m}^2$
OS26	-14.3°	47.0°	49.9 $\mu\text{A m}^2$	-13.3°	47.5°	44.0 $\mu\text{A m}^2$
OS27	-16.3°	47.3°	45.1 $\mu\text{A m}^2$	-13.0°	48.3°	37.1 $\mu\text{A m}^2$
OS28	-17.3°	48.8°	55.2 $\mu\text{A m}^2$	-17.4°	48.2°	49.9 $\mu\text{A m}^2$
OS29	-15.7°	49.1°	87.7 $\mu\text{A m}^2$	-16.9°	48.3°	78.3 $\mu\text{A m}^2$
OS30	-18.7°	47.7°	12.6 $\mu\text{A m}^2$	-20.8°	47.5°	10.9 $\mu\text{A m}^2$
平均 A	-17.0°	49.4°	2.5°	-17.0°	49.2°	2.5°
平均 B	-16.2°	48.5°	1.9°	-16.1°	48.4°	1.9°
2号窯 A層				消磁強度 = 10mT		
OS31	- 5.9°	42.9°	91.0 $\mu\text{A m}^2$	- 5.8°	42.7°	88.2 $\mu\text{A m}^2$
OS32	- 4.0°	45.8°	68.7 $\mu\text{A m}^2$	- 3.6°	46.5°	58.3 $\mu\text{A m}^2$
OS33	- 3.0°	46.1°	49.9 $\mu\text{A m}^2$	- 2.9°	45.5°	48.3 $\mu\text{A m}^2$
OS34	- 0.9°	46.1°	47.9 $\mu\text{A m}^2$	- 1.8°	45.7°	46.2 $\mu\text{A m}^2$
OS35	- 9.6°	46.9°	75.0 $\mu\text{A m}^2$	-10.2°	46.6°	72.6 $\mu\text{A m}^2$
* OS36	-34.6°	38.8°	6.96 $\mu\text{A m}^2$	-37.8°	37.1°	6.85 $\mu\text{A m}^2$
* OS37	-43.3°	49.4°	9.62 $\mu\text{A m}^2$	-47.2°	48.4°	8.27 $\mu\text{A m}^2$
* OS38	-21.7°	63.4°	40.4 $\mu\text{A m}^2$	-24.6°	63.3°	3.78 $\mu\text{A m}^2$
OS39	- 5.7°	54.0°	115. $\mu\text{A m}^2$	- 7.0°	53.9°	1.08 $\mu\text{A m}^2$
OS40	- 8.4°	52.0°	145. $\mu\text{A m}^2$	- 8.6°	52.2°	1.37 $\mu\text{A m}^2$
OS41	-10.4°	49.7°	152. $\mu\text{A m}^2$	-11.3°	49.4°	1.47 $\mu\text{A m}^2$
平均 A	-13.2°	49.4°	6.4°	-14.4°	49.2°	7.0°
平均 B	- 5.9°	48.0°	2.9°	- 6.3°	47.9°	3.0°

第1表 各試料の残留磁化の方位と強度及びそれ等のサイト毎の平均方位とその信頼角。

平均に A と B のあるものは A が全試料の平均で B が試料番号の右に * を打った試料を除いた平均である。

試料番号	交 流 消 磁 前			偏 角	交 流 消 磁 後		
	偏 角	伏 角	強度又は 信 頼 角		偏 角	伏 角	強度又は 信 頼 角
2号窯 B層				消磁強度=15mT			
OS71	- 6.2°	44.6°	40.9 $\mu\text{A m}^2$	- 8.0°	43.9°	37.0 $\mu\text{A m}^2$	
OS72	- 7.6°	45.3°	64.3 $\mu\text{A m}^2$	- 8.3°	44.7°	58.2 $\mu\text{A m}^2$	
OS73	- 6.4°	42.8°	34.8 $\mu\text{A m}^2$	- 7.6°	41.9°	32.8 $\mu\text{A m}^2$	
OS74	- 5.1°	44.4°	64.9 $\mu\text{A m}^2$	- 4.9°	43.9°	58.5 $\mu\text{A m}^2$	
OS75	- 4.3°	44.5°	51.9 $\mu\text{A m}^2$	- 5.5°	44.1°	48.2 $\mu\text{A m}^2$	
OS76	- 4.2°	45.2°	40.5 $\mu\text{A m}^2$	- 4.8°	45.0°	36.9 $\mu\text{A m}^2$	
OS77	- 3.7°	44.2°	138. $\mu\text{A m}^2$	- 5.4°	43.5°	132. $\mu\text{A m}^2$	
OS78	- 2.9°	41.3°	131. $\mu\text{A m}^2$	- 3.9°	40.9°	127. $\mu\text{A m}^2$	
OS79	- 6.6°	43.4°	73.7 $\mu\text{A m}^2$	- 6.4°	43.5°	71.1 $\mu\text{A m}^2$	
OS80	- 6.1°	43.4°	108. $\mu\text{A m}^2$	- 6.9°	43.2°	102. $\mu\text{A m}^2$	
平均	- 5.3°	43.9°	1.0°	- 6.2°	43.5°	1.0°	
3号窯				消磁強度=15mT			
OS81	- 1.0°	45.2°	51.1 $\mu\text{A m}^2$	0.8°	43.9°	44.2 $\mu\text{A m}^2$	
OS82	- 1.3°	47.0°	66.7 $\mu\text{A m}^2$	- 1.4°	47.2°	61.5 $\mu\text{A m}^2$	
OS83	1.9°	46.0°	13.8 $\mu\text{A m}^2$	4.3°	46.2°	9.15 $\mu\text{A m}^2$	
OS84	- 3.2°	40.9°	54.0 $\mu\text{A m}^2$	- 1.5°	40.6°	45.2 $\mu\text{A m}^2$	
OS85	- 2.2°	43.8°	39.0 $\mu\text{A m}^2$	- 2.8°	44.6°	34.5 $\mu\text{A m}^2$	
OS86	1.9°	47.1°	23.3 $\mu\text{A m}^2$	2.9°	47.5°	21.1 $\mu\text{A m}^2$	
OS87	- 1.9°	46.0°	128. $\mu\text{A m}^2$	- 1.7°	46.1°	112. $\mu\text{A m}^2$	
OS88	2.8°	44.5°	15.9 $\mu\text{A m}^2$	3.9°	44.0°	12.6 $\mu\text{A m}^2$	
* OS89	11.9°	43.9°	6.94 $\mu\text{A m}^2$	11.6°	44.3°	4.74 $\mu\text{A m}^2$	
OS90	- 0.7°	42.7°	36.9 $\mu\text{A m}^2$	- 2.6°	42.9°	30.4 $\mu\text{A m}^2$	
平均 A	0.8°	44.8°	2.2°	1.3°	44.8°	2.3°	
平均 B	- 0.4°	44.8°	1.6°	0.2°	44.8°	1.9°	

第1表 (続き)

第1図 各サイトのパイロットサンプルの段階交流消磁結果の直交消磁図。

各消磁段階での磁化ベクトルの終点の水平面と南北軸を含む垂直面に投影したものを合わせた図で、白丸は水平面への投影を黒丸は垂直面への投影である。この図上で安定な磁化は原点に向かう直線で表される。水平面投影の点の横にある数字は交流消磁レベルで、単位は mT (ミリテスラ) である。単位は SI 単位系で示したが、cgs 単位系との換算は、 $1 \text{ mT} = 100 \text{ e}$ 、 $1 \mu\text{A m}^2 = 10^{-3} \text{ emu}$ である。

第2図 各試料の交流消磁前と消磁後の残留磁化方向の等面積投影図。

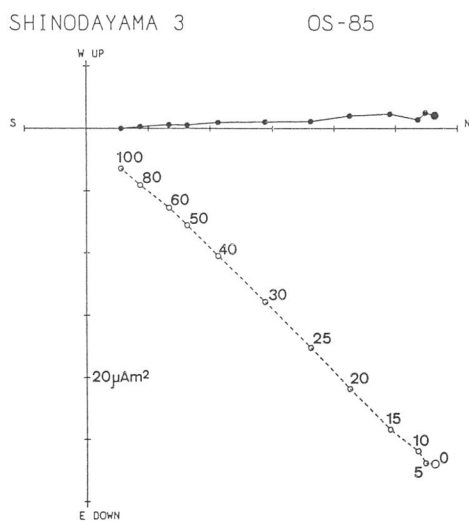
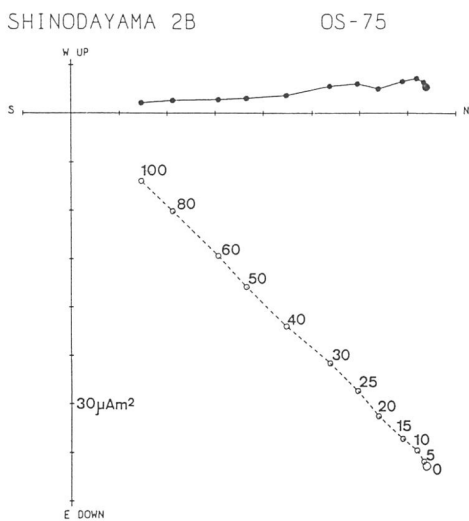
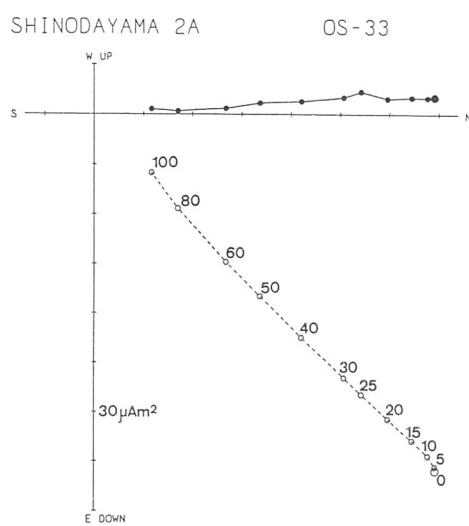
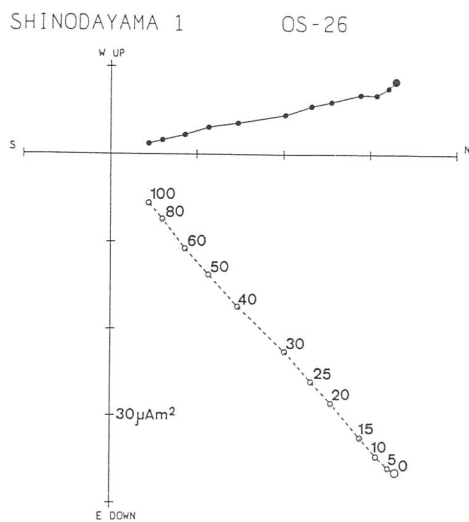
第3図 各サイトの平均磁化方向の等面積投影図。

第1表の交流消磁後の平均 (A、B あるものについては B) である。黒丸が各サイトの平均磁化方向、そのまわりの楕円は平均方向の95%信頼限界である。2号窯 B 層や3号窯では信頼角が小さ過ぎて楕円が見えなくなっている。

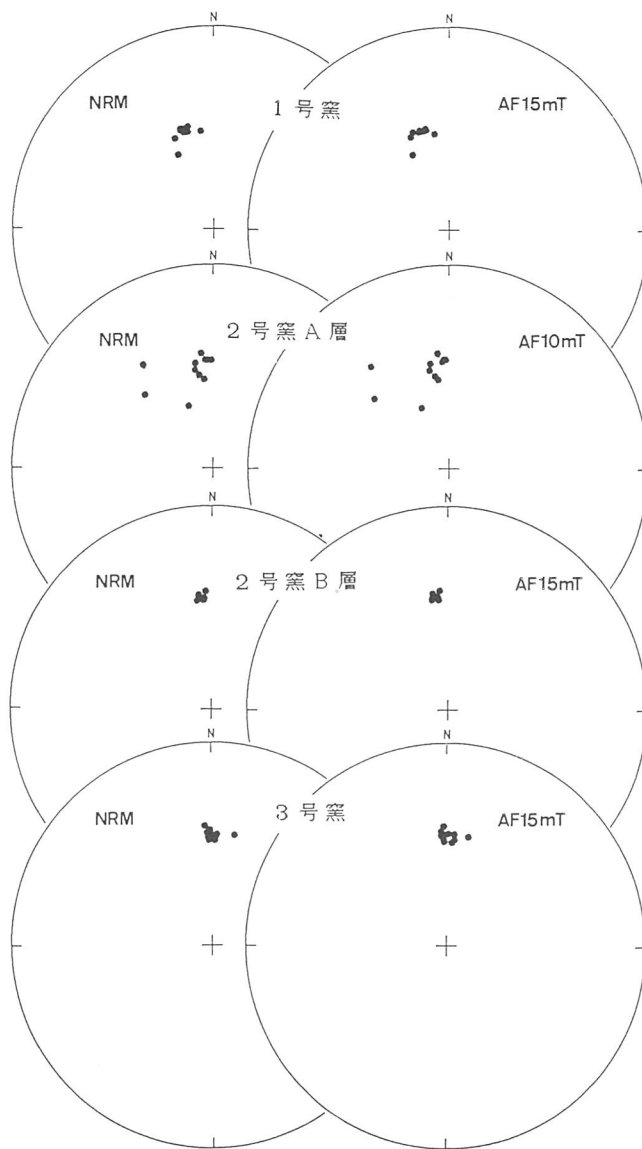
第4図 各サイトの平均磁化方向と過去2000年の西南日本の考古地磁気標準曲線。

横線は各サイトの平均磁化方向。縦線は偏角伏角の双方が標準曲線と交わる年代、即ち推定年代である。1号窯の年代は地磁気の偏角伏角ともに変化の少ない時代であるので、推定年代に大きな不確定性が残る。この標準曲線は Shibuya (1980) によるものである。

大阪府立大学総合科学部地学教室 渋谷 秀 敏
夏 原 技 研 夏 原 信 義
京都大学理学部地質学鉱物学教室 石 川 尚 人

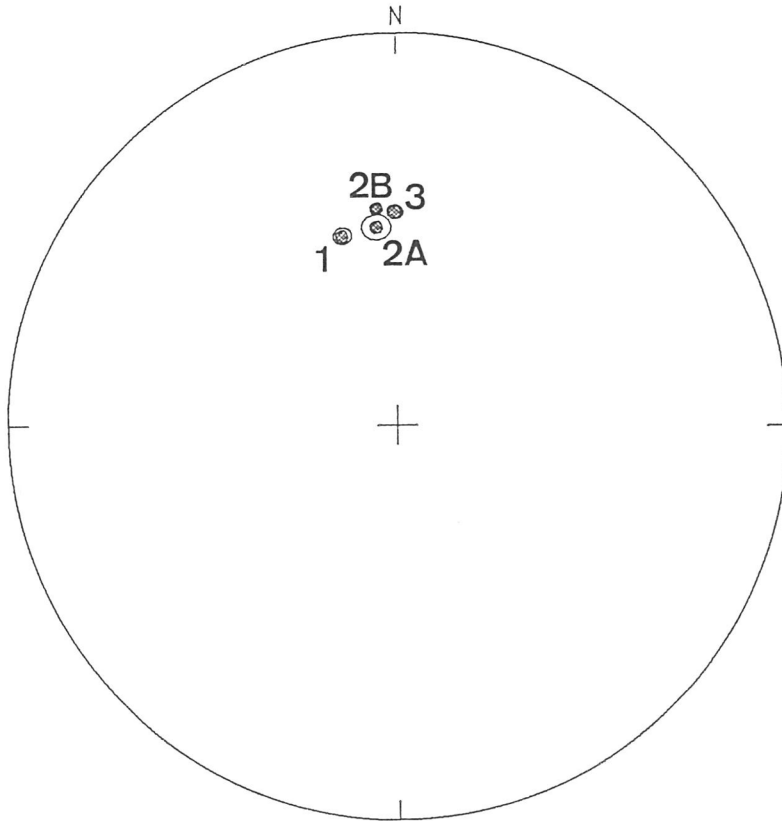


第 1 図

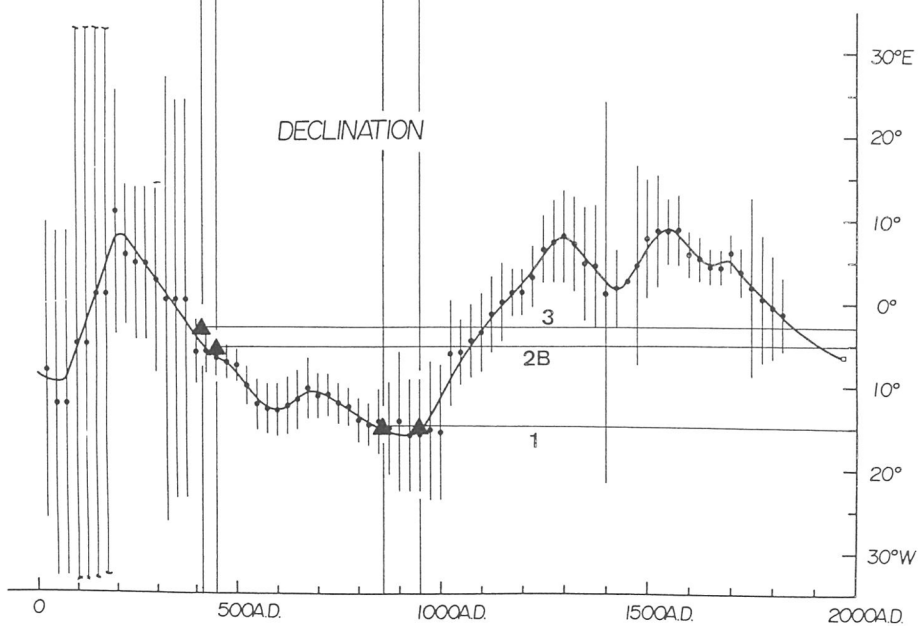
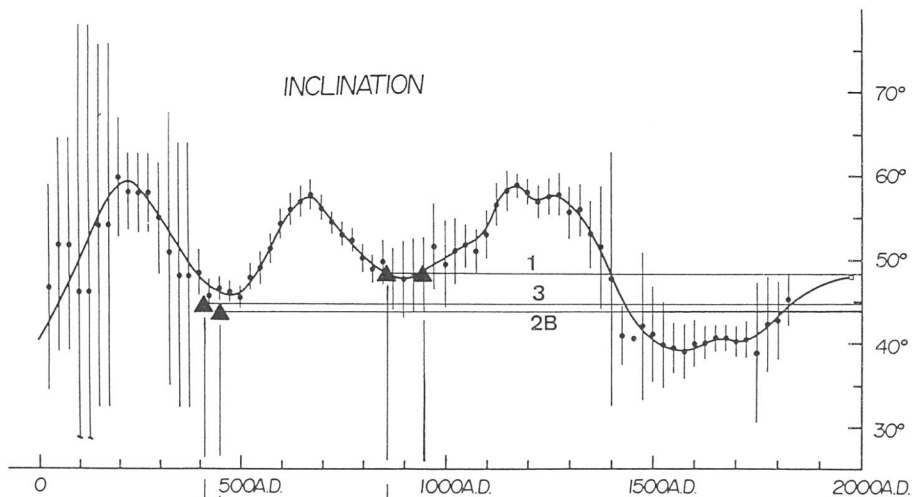


第 2 図

SHINODAYAMA KILNS before AFD



第 3 図



第 4 图

4号窯

種類	図版	写真	法量 cm	胎土・焼成	色調	備考	層位
須惠器 (杯蓋)	1	17	口径 14.0 器高 5.0	II 軟 質	外面 10Y6/6	1/2	6
須惠器 (杯蓋)	2	17	口径 12.7 器高 4.2	II 硬 質	N7/0	完	6
須惠器 (杯蓋)	3	17	口径 13.0 器高 5.2	I 硬 質	10YR8/1	ほぼ完 黒点	4
須惠器 (杯蓋)	4	17	口径 12.6 器高 4.9	II 硬 質	N7/0	2/3 黒点火ぶくれ	11
須惠器 (杯蓋)	5		口径 13.4 器高 4.4	III 硬 質	N6/0	完	4
須惠器 (杯蓋)	6	17	口径 12.7 器高 3.8	III 硬 質	10Y5/1	4/5	6
須惠器 (杯蓋)	7	17	口径 13.0 器高 4.8	III 硬 質	5B5/1	完	6
須惠器 (杯蓋)	8		口径 12.3 器高 4.4	III 硬 質	5B6/1	4/5 火ぶくれ	6
須惠器 (杯蓋)	9		口径 13.0 器高 4.4	II 硬 質	2.5GY7/1	2/3	6
須惠器 (杯蓋)	10	17	口径 12.3	III 硬 質	N6/0	2/3 黒点混入物(砂粒多い)	6
須惠器 (杯蓋)	11	17	口径 12.7 器高 4.1	III 硬 質	N6/0	4/5 瓦器のように外表銀化	4
須惠器 (杯蓋)	12		口径 12.3 器高 4.2	II 硬 質	N7/0	4/5 火ぶくれ	6
須惠器 (杯蓋)	13	17	口径 13.8 器高 4.3	II 硬 質	2.5GY7/1	2/3	4
須惠器 (杯蓋)	14	17	口径 11.4 器高 3.3	II 硬 質	N7/0	1/3	4
須惠器 (杯蓋)	15	19	口径 10.3 器高 4.0	II 硬 質	2.5GY5/1	1/3 天井部をへらでカキ取る	6
須惠器 (杯蓋)	16	19	(復元) 口径 8.7 器高 3.2	II 硬 質	2.5GY6/1	1/4 天井は手持ちへラケズリ	4
須惠器 (杯身)	17	18	口径 11.2 器高 5.3	II 軟 質	5Y8/2	2/3	6
須惠器 (杯身)	18	18	口径 10.2 器高 5.3	II 硬 質	N7/0	4/5	4
須惠器 (杯身)	19		口径 10.4 器高 5.4	III 硬 質	5PB4/1	完 火ぶくれ	11
須惠器 (杯身)	20	18	口径 10.2 器高 4.55	II 硬 質	10Y7/1	1/2 黒点	4
須惠器 (杯身)	21	18	口径 10.8 器高 5.1	III 硬 質	5B6/1	完 黒点少し	4
須惠器 (杯身)	22	18	口径 10.8 器高 5.2	I 硬 質	N8/0	完 黒点少し	6

種類	図版	写真	法量 cm	胎土・焼成	色調	備考	層位
須惠器 (杯身)	23	18	口径 10.6 器高 4.1	III 硬 質	5B G5/1	4/5	6
須惠器 (杯身)	24	18	口径 10.2 器高 4.8	II 硬 質	10G Y6/1	完	6
須惠器 (杯身)	25		口径 11.8 器高 5.7	II 硬 質	5G Y6/1	完	6
須惠器 (杯身)	26	18	口径 11.0 器高 4.9	II 硬 質	N7/0	完	11
須惠器 (杯身)	27	18	口径 2.6 器高 4.1	II 硬 質	7.5 Y6/1	完	4
須惠器 (杯蓋)	28	18	口径 9.3 器高 4.2	II 硬 質	10Y7/1	1/2	4
須惠器 (高杯蓋)	29	21	口径 13.0 器高 5.3	II 硬 質	10Y7/1	4/5	6
須惠器 (高杯蓋)	30	21	口径 13.0 器高 5.6	I 硬 質	10Y8/1	1/3	4
須惠器 (高杯蓋)	31	21	口径 12.3 器高 5.45	II 硬 質	N6/0	2/3	11
須惠器 (高杯蓋)	32	21	口径 13.0 器高 4.9	II 硬 質	N7/0	4/5	6
須惠器 (有蓋高杯)	33	21	口径 10.6 器高 9.2	I 硬 質	N7/0		6
須惠器 (有蓋高杯)	34	21	口径 11.1 器高 9.6 底径 8.8	I 硬 質	10G Y7/1	黒点	4
須惠器 (有蓋高杯)	35	21	口径 10.5 器高 8.9 底径 9.0	III 硬 質	N4/0		11
須惠器 (無蓋高杯)	36	22	口径 13.1 器高 8.5 底径 8.9	II 軟 質	2.5 YG7/1		6
須惠器 (無蓋高杯)	37	22	口径 17.6 器高 11.3 底径 9.5	II 硬 質	10Y7/1		4
須惠器 (無蓋高杯)	38	22	口径 17.4 器高 12.1 底径 9.7	III 硬 質	N4/0		6
須惠器 (無蓋高杯)	39	22	口径 19.2 器高 13.5 底径 11.9	III 硬 質	N4/1	他の個体片が内面に熔着 4/5	4
須惠器 (大型甗)	40	20	口径 11.0 残存高 16.7	I 硬 質	N5/1	自然釉	4,6,11
須惠器 (大型甗)	41	20	口径 12.0 器高 16.0	I 硬 質	N4/1	完自然釉	6
須惠器 (大型甗)	42	20	口径 12.6 残存高 15.2	II 硬 質	5B4/1	自然釉	4,6,11
須惠器 (大型甗)	43	20	口径 11.6 残存高 15.2	III 硬 質	N4/1		6
須惠器 (小型甗)	44	20	口径 10.8 残存高 10.2	III 硬 質	N4/1	自然釉(7.5Y4/3)灰被り	6~10

種類	図版	写真	法 量 cm	胎土・焼成	色 調	備 考	層位
須 惠 器 (小型壺)	45	20	口径 10.6 器高 11.1	II 硬 質	N7/1		11
須 惠 器 (小型壺)	46	19	口径 9.6 残存高 6.6	III 硬 質	N8/1	自然釉 (10Y5/7)	4～6
須 惠 器 (小型壺)	47		口径 9.6 残存高 9.7	II 硬 質	N5/1		4、6
須 惠 器 (小型壺)	48	19	口径 9.2 器高 9.1	II 硬 質	5B4/1		4
須 惠 器 (短頸壺)	49		残存高 4.2	II 硬 質	N7/1		6
須 惠 器 (短頸壺)	50	19	口径 9.2 器高 12.6	I 硬 質	N5/1	自然釉	6、11
須 惠 器 (短頸壺)	51	19	口径 8.0 残存高 9.6	III 硬 質	N6/1		10
須 惠 器 (広口壺)	52		口径 10.4 残存高 4.8	III 硬 質	N4/1		8
須 惠 器 (広口壺)	53		残存高 10.1	III 硬 質	N6/1		6
須 惠 器 (広口壺)	54		口径 9.4 残存高 13.6	III 硬 質	N3/1	自然釉	6、10、11
須 惠 器 (広口壺)	55	24	口径 9.4 残存高 14.5	II 硬 質	N3/1		11
須 惠 器 (壺A ₂)	56	23	口径 14.0 器高 18.3	III 硬 質	5B7/1		6、11
須 惠 器 (壺A ₂)	57	23	口径 16.2 器高 19.0	III 硬 質	5B7/1	自然釉	4
須 惠 器 (壺A ₂)	58	23	口径 14.0 残存高 20.0	II 硬 質	N6/1		4
須 惠 器 (壺A ₂)	59	24	口径 14.6 残存高 15.0	III 硬 質	N5/1	自然釉	4、6、11
須 惠 器 (壺A ₂)	60	24	口径 19.4 残存高 13.8	III 硬 質	N7 1	自然釉	6、11
須 惠 器 (壺A ₂)	61	23	口径 15.2 残存高 15.2	II 硬 質	7.5Y6/1	自然釉	4、6、11
須 惠 器 (壺A ₂)	62	24	口径 18.6 残存高 10.6	II 硬 質	N6/1		6
須 惠 器 (壺A ₂)	63	24	口径 19.8 残存高 20.0	II 軟 質	5Y5/2		6
須 惠 器 (壺A ₂)	64	23	口径 18.6	III 硬 質	N7/1	自然釉	4、6、11
須 惠 器 (器台)	65	25	口径 36.1 器高 30.0 底径 26.7	III 硬 質	7.5Y5/1	焼け歪み著しい	3、4、6、11
須 惠 器 (器台)	66	25	口径 36.0 器高 34.5 底径 27.6	III 硬 質	N6/0	焼け歪み著しい	7

4号窯 2号窯(86から)

種類	図版	写真	法量 cm	胎土・焼成	色調	備考	層位
須恵器 (器台)	67	25	口径 40.0	I 硬 質	N8 0		4
須恵器 (甕A1-b)	68	24	口径 14.8 残存高 31.0	III 中	N6 1		6
須恵器 (甕A1-a)	69		口径 19.0 残存高 6.0	III 硬 質	N6 1		4、6
須恵器 (甕)	70		口径 20.6 残存高 9.0	III 硬 質	5B4 1		10、11
須恵器 (甕)	71		口径 26.8 残存高 9.4	II 硬 質	5B4 1		11
須恵器 (甕A1-a)	72	25	口径 22.6 残存高 12.8	II 硬 質	5B5 1		4、11
須恵器 (甕B2)	73	23	口径 20.2 残存高 30.8	II 硬 質	N5 1		4、6、11
須恵器 (甕)	74		口径 21.2 残存高 8.0	II 硬 質	5B4 1		6
須恵器 (甕B1)	75		口径 20.3 残存高 39.4	III 硬 質	5B4 1		11
須恵器 (甕)	76	25	口径 22.2 残存高 35.0	II 硬 質	N6 1		4
須恵器 (甕)	77		口径 18.6 残存高 16.0	II 中	2.5GY5 1		4
須恵器 (甕)	78	26	口径 20.6 器高 34.0	II 硬 質	N6 1		6
須恵器 (甕)	79	26	口径 21.2 器高 32.2	III 硬 質	N4 1		4、6、11
須恵器 (甕A1-b)	80	26	口径 27.2 器高 41.7	IV 軟 質	5Y8 3		4
須恵器 (甕)	81	26	口径 25.6 器高 42.0	IV 軟 質	5Y8 3		4、6、11
須恵器 (甕B1)	82		口径 30.8 器高 57.4	III 硬 質	5BG2 1		4
須恵器 (甕)	83		口径 48.0 器高 84.4	I 硬 質	7.5Y6 1	自然釉	4
須恵器 (甕B2)	84		口径 39.4	II 硬 質	N5/1	自然釉	4
須恵器 (甕)	85		口径 41.2 残存高 75.0	II 硬 質	N6/1	自然釉	4
須恵器 (杯蓋A)	86	57	口径 13.5 器高 4.0	III 硬 質	⊕5B6/1 天井部10Y7/2 の自然釉	天井部4/5回転ヘラケズリ 天井部内面一定方向ナデ	
須恵器 (杯蓋A)	87		口径 14.1 器高 4.0	III 硬 質	⊕N4/0⊕N6/0 天井部7.5Y6/3 の自然釉	天井部4/5回転ヘラケズリ 天井部内面一定方向ナデ	
須恵器 (杯蓋A)	88		口径 12.7 器高 3.9	II 軟 質	⊕ N6 0	天井部4/5回転ヘラケズリ 天井部内面回転カキ目一定方向 ナデ	

2号窯

種類	図版	写真	法量 cm	胎土・焼成	色調	備考
須惠器 (杯蓋A)	89		口径 13.3 器高 4.3	II 中	㊦N5/0 ㊦N7/0	天井部4/5回転ヘラケズリ 天井部内面一定方向ナデ
須惠器 (杯蓋B)	90		口径 13.8 器高 4.6	III 軟 質	㊦5Y8/2 ㊦10YR8/3	天井部4/5回転ヘラケズリ
須惠器 (杯蓋B)	91	57	口径 13.6 器高 4.8	III 中	㊦㊦N7/0	天井部4/5回転ヘラケズリ 天井部内面一定方向ナデ
須惠器 (杯蓋B)	92	57	口径 13.7 器高 4.6	III 硬 質	㊦5B4/1㊦5B6/1 天井部7.5Y4/3の自然釉	天井部4/5回転ヘラケズリ 天井部内面回転カキ目+スリ消し状ナデ
須惠器 (杯蓋B)	93	57	口径 13.0 器高 4.8	I 硬 質	㊦㊦10Y7/1 天井部10Y6/2の自然釉	天井部4/5回転ヘラケズリ 天井部内面一定方向ナデ
須惠器 (杯蓋B)	94		口径 13.4 器高 3.9	III 硬 質	㊦2.5Y6/1㊦5B5/1 天井部10Y7/2の自然釉	天井部4/5回転ヘラケズリ 天井部内面回転カキ目+一定方向ナデ
須惠器 (杯蓋B)	95		口径 12.6 器高 4.5	II 硬 質	㊦㊦5P5/1 天井部7.5Y6/3の自然釉	天井部3/4回転ヘラケズリ 天井部内面一定方向ナデ
須惠器 (杯蓋B)	96	57	口径 13.3 器高 4.2	III 硬 質	㊦5GY4/1 ㊦5RP4/1	天井部4/5回転ヘラケズリ 天井部内面スリ消し状ナデ
須惠器 (杯蓋B)	97		口径 13.3 器高 4.4	II 中	㊦㊦5BG6/1 天井部10G7/1	天井部4/5回転ヘラケズリ 天井部内面不定方向ナデ
須惠器 (杯蓋B)	98	57	口径 12.4 器高 4.4	I 硬 質	㊦2.5GY4/1㊦N8/0 天井部10Y6/2の自然釉	天井部4/5回転ヘラケズリ 天井部内面一定方向ナデ
須惠器 (杯蓋B)	99		口径 12.2 器高 4.2	II 中	㊦㊦5B7/1 天井部10Y7/2の自然釉	天井部4/5回転ヘラケズリ 天井部内面回転カキ目+一定方向ナデ
須惠器 (杯蓋B)	100	57	口径 12.3 器高 3.8	III 硬 質	㊦5BG4/1 ㊦10BG4/1	天井部3/4回転ヘラケズリ 天井部内面一定方向ナデ
須惠器 (杯蓋B)	101	57	口径 11.6 器高 3.8	II 硬 質	㊦㊦5G5/1 天井部10GY7/1の自然釉	天井部4/5回転ヘラケズリ 天井部内面一定方向ナデ
須惠器 (杯蓋C)	102		口径 12.3 器高 4.9	II 硬 質	㊦10BG7/1 ㊦5B1/4 天井部10Y6/2の自然釉	天井部3/4回転ヘラケズリ 天井部内面一定方向ナデ
須惠器 (杯蓋C)	103	57	口径 11.9 器高 4.7	II 軟 質	㊦㊦10Y7/1	天井部2/3回転ヘラケズリ 天井部内面一定方向ナデ
須惠器 (杯蓋C)	104	57	口径 13.3 器高 4.8	I 硬 質	㊦㊦N8/0	天井部2/3回転ヘラケズリ 天井部内面一定方向ナデ
須惠器 (杯蓋C)	105		口径 12.4 器高 4.6	III 硬 質	㊦5GY6/1の自然釉 ㊦2.5GY6/1	天井部4/5回転ヘラケズリ 天井部内面一定方向ナデ
須惠器 (杯身A)	106		口径 11.5 器高 4.3	III 硬 質	㊦㊦5B4/1	底部部4/5回転ヘラケズリ 底部部内面一定方向ナデ
須惠器 (杯身A)	107	58	口径 10.8 器高 4.2	III 硬 質	㊦N4/0 ㊦N4/0	底部部2/3回転ヘラケズリ 底部部内面一定方向ナデ
須惠器 (杯身A)	108	58	口径 11.6 器高 4.6	III 軟 質	㊦㊦10Y7/1	底部部3/4回転ヘラケズリ 底部部内面一定方向ナデ
須惠器 (杯身A)	109		口径 11.3 器高 4.8	I 硬 質	㊦5BG7/1 ㊦N8/0	底部部4/5回転ヘラケズリ 底部部内面一定方向ナデ
須惠器 (杯身B)	110		口径 10.7 器高 4.5	III 軟 質	㊦㊦5G7/1	底部部4/5回転ヘラケズリ 底部部内面一定方向ナデ

2号窯

種類	図版	写真	法量 cm	胎土・焼成	色調	備考
須恵器 (杯身B)	111	58	口径 11.4 器高 4.7	II 軟 質	⑨10Y R6 1 ⑩10Y R7 4	底体部2/3回転ヘラケズリ 底体部内面一定方向ナデ
須恵器 (杯身B)	112		口径 10.6 器高 4.1	II 硬 質	⑨N6 0 N5 0	底体部3/4回転ヘラケズリ 底体部内面一定方向ナデ
須恵器 (杯身B)	113	58	口径 11.4 器高 5.2	III 軟 質	⑨⑩ 5B6 1	底体部4/5回転ヘラケズリ 底体部内面スリ消し状ナデ
須恵器 (杯身B)	114	58	口径 11.5 器高 5.0	II 軟 質	⑨2.5Y6 1 ⑩2.5Y8 1 ⑪2.5Y8 1	底体部2/3回転ヘラケズリ 底体部内面一定方向ナデ
須恵器 (杯身B)	115		口径 10.2 器高 5.1	III 硬 質	⑨⑩ 5B5 1	底体部3/4回転ヘラケズリ 底体部内面一定方向ナデ
須恵器 (杯身B)	116		口径 10.4 器高 4.7	III 硬 質	⑨5B5 1 ⑩5P B5 1 ⑪(変部)2.5G Y8 1	底体部2/3回転ヘラケズリ 底体部内面不定方向ナデ ヘラ記号「/」のヘラ記号
須恵器 (杯身B)	117	58	口径 10.2 器高 4.7	III 硬 質	⑨5B7 1 ⑩5P B4 1	底体部2/3回転ヘラケズリ 底体部内面不定方向ナデ
須恵器 (杯身B)	118		口径 10.2 器高 4.4	II 硬 質	⑨⑩⑪ 10Y7 1	底体部4/5回転ヘラケズリ 底体部内面一定方向ナデ 底部「Q」ヘラ記号
須恵器 (杯身B)	119	58	口径 10.4 器高 4.6	II 中 質	⑨N7 0 ⑩N8 0	底体部3/4回転ヘラケズリ 底体部内面一定方向ナデ
須恵器 (杯身B)	120	58	口径 10.9 器高 4.8	II 硬 質	⑨⑩ N6 0	底体部2/3回転ヘラケズリ 底体部内面一定方向ナデ 9本/cmのクシガキヘラ記号
須恵器 (杯身B)	121		口径 10.8 器高 4.9	II 硬 質	⑨⑩⑪ N6 0	底体部2/3回転ヘラケズリ 底体部内面一定方向ナデ
須恵器 (杯身C)	122		口径 11.1 器高 5.4	II 軟 質	⑨7.5Y8 2 ⑩10Y7 1 ⑪5Y7 2 黒斑7.5Y5 2	底体部3/4回転ヘラケズリ 底体部内面一定方向ナデ 未還元で土師質
須恵器 (杯身C)	123	58	口径 11.3 器高 5.9	II 軟 質	⑨⑩ N7 0	底体部2/3回転ヘラケズリ 底体部内面一定方向ナデ
須恵器 (杯身C)	124		口径 10.0 器高 5.0	II 軟 質	⑨5Y7 2 ⑩10G Y5 1	底体部2/3回転ヘラケズリ 底体部内面一定方向ナデ
須恵器 (杯身C)	125	58	口径 10.2 器高 5.0	II 硬 質	⑨5P B4 1 ⑩5P B5 1	底体部1/2回転ヘラケズリ+底体部1/2回 転カキ目(8本/cm)底体部内面一定方向ナ デ
須恵器 (高杯蓋A)	126	59	口径 12.0 器高 3.9	II 硬 質	⑨⑩N4 0 ⑪10R6 2	天井部4/5回転ヘラケズリ 天井部内面不定方向ナデ
須恵器 (高杯蓋B)	127	59	口径 12.4 器高 4.9	I 硬 質	⑨N4 0⑩N7 0 ⑪N6 0(天井部) ⑫10Y5 2の自然釉	天井部4/5回転ヘラケズリ 天井部内面一定方向ナデ
須恵器 (高杯蓋B)	128		口径 12.4 器高 5.8	III 軟 質	⑨ 5P B5 1	天井部4/5回転ヘラケズリ 天井部内面一定方向ナデ 内面5本/cm回転カキ目
須恵器 (高杯蓋B)	129	59	口径 12.4 器高 5.4	II 硬 質	⑨⑩N6 0 ⑪10R5 3	天井部4/5回転ヘラケズリ 天井部内面一定方向ナデ
須恵器 (高杯蓋B)	130		口径 12.9 器高 5.4	III 硬 質	⑨5P B6 1 ⑩(天井部) 7.5R5 2	天井部3/4回転ヘラケズリ 天井部内面不定方向ナデ
須恵器 (高杯蓋B)	131	59	口径 12.4 器高 5.0	I 硬 質	⑨2.5G Y4 1⑩ 7.5Y4 3(天井部) ⑪7.5Y4 3の自然釉	天井部4/5回転ヘラケズリ 天井部内面回転カキ目+一定方向ナデ
須恵器 (高杯蓋B)	132		口径 12.8 器高 5.4	II 硬 質	⑨10Y6 1 ⑩N6 0 ⑪5Y6 1	天井部4/5回転ヘラケズリ 天井部内面一定方向ナデ

2号窯

種類	図版	写真	法量 cm	胎土・焼成	色調	備考
須恵器 (高杯蓋B)	133	59	口径 12.6 器高 4.9	II 硬	質 ⑤N8/0 ⑥5B7/1 ⑦7.5Y7/1	天井部4/5回転ヘラケズリ 天井部内面一定方向ナデ
須恵器 (高杯蓋B)	134		口径 12.1 器高 5.2	II 硬	質 ⑤N8/0 ⑥N7/0	天井部4/5回転ヘラケズリのち2/3回転カ キ目、天井部内面一定方向ナデ
須恵器 (高杯蓋B)	135		口径 13.3 器高 5.6	II 硬	質 ⑤10Y6/1 ⑥N7/0 ⑦5YR5/1	天井部4/5回転ヘラケズリのち天井部内面 不定方向ナデ
須恵器 (高杯蓋C)	136		口径 12.6 器高 5.5	II 硬	質 ⑤⑥5PB7/1 (天井部)5Y5/4の 自然釉	天井部4/5回転ヘラケズリ 天井部内面一定方向ナデ
須恵器 (高杯蓋C)	137	59	口径 13.5 器高 5.8	II 硬	質 ⑤2.5GY6/1 ⑥N8/0	天井部4/5回転ヘラケズリ 天井部内面一定方向ナデ
須恵器 (高杯蓋C)	138		口径 12.6 器高 5.8	I 硬	質 ⑤N7/0 ⑥N8/0	天井部4/5回転カキ目(7本/cm) 天井部内面一定方向ナデ
須恵器 (高杯蓋C)	139	59	口径 13.3 器高 5.5	II 軟	質 ⑤N8/0	天井部4/5回転ヘラケズリのち同範囲に 回転カキ目(10本/cm) 天井部内面一定方向ナデ
須恵器 (高杯蓋C)	140		口径 12.8 器高 5.5	II 硬	質 ⑤5B7/1	天井部4/5回転ヘラケズリのち3/4に回転 カキ目(12本/cm)天井部内面一定方向ナデ
須恵器 (高杯蓋C)	141	59	口径 13.7 器高 6.1	II 硬	質 ⑤N6/0 ⑥10YR6/1	天井部4/5回転ヘラケズリ 天井部内面一定方向ナデ
須恵器 (高杯A I)	142		口径 10.5 器高 10.0	II 硬	質 ⑤N6/0 ⑥5B6/1	底体部1/2回転ヘラケズリ 底体部内面一定方向ナデ 脚部長方形四方スカシ
須恵器 (高杯A I)	143	60	口径 11.5 器高 9.9	III 硬	質 ⑤⑥N6/0 ⑦N7/0	底体部4/5回転ヘラケズリ 底体部内面一定方向ナデ 脚部長方形四方スカシ
須恵器 (高杯A I)	144	60	口径 10.2 器高 9.9	II 硬	質 ⑤⑥N6/0 ⑦10Y6/1	底体部2/3回転ヘラケズリ 底体部内面一定方向ナデ 脚部長方形四方スカシ
須恵器 (高杯A II)	145	60	口径 12.3 器高 9.5	III 硬	質 ⑤N4/0⑥2.5Y 6/2(脚部)7.5Y5/ 3の自然釉	底体部4/5回転ヘラケズリ 底体部内面不定方向ナデ 脚部円形三方スカシ突線アリ
須恵器 (高杯A II)	146		口径 11.4 器高 10.2	III 軟	質 ⑤N7/0	底体部3/4回転ヘラケズリ、底体部4/5+ 脚部2/3回転カキ目(9本/cm)底体部内面 一定方向ナデ脚部円形三方スカシ
須恵器 (高杯A II)	147		口径 10.0 器高 9.1	II 硬	質 ⑤(脚内)N4/0 杯内面N7/0	底体部2/3回転ヘラケズリ、底体部2/3+ 脚部4/5回転カキ目、底体部内面回転カキ 目+一定方向ナデ脚部円形三方スカシ
須恵器 (高杯A II)	148		口径 11.5 器高 9.7	II 硬	質 ⑤N7.5/0 ⑥N8/0	底体部2/3回転ヘラケズリ 底体部内面一定方向ナデ 脚部円形三方スカシ
須恵器 (高杯A II)	149	60	口径 10.3 器高 11.2	III 硬	質 ⑤10G5/1 ⑥5P5/1	底体部2/3回転ヘラケズリ、底体部2/3+ 脚部2/3回転カキ目(11本/cm)底体部内面 不定方向ナデ脚部円形三方スカシ
須恵器 (高杯A II)	150	60	口径 10.3 器高 9.1	II 硬	質 ⑤N7/0 ⑥N8/0	底体部2/3回転ヘラケズリ、底体部内面一 定方向ナデ脚部変形三方スカシ
須恵器 (高杯A II)	151		口径 10.8 器高 8.4	II 硬	質 ⑤5PB5/1	底体部3/4回転ヘラケズリ、底体部3/4+ 脚部1/2回転カキ目(14本/cm)、底体部内 面一定方向ナデ脚部変形三方スカシ
須恵器 (高杯A II)	152	60	口径 11.0 器高 9.65	III 硬	質 ⑤5BG6/1 (杯内)10BG6/1 (脚内)5BG7/1	底体部2/3回転ヘラケズリ 底体部内面一定方向ナデ 脚部変形三方スカシ
須恵器 (高杯A II)	153		残存高 5.5	II 硬	質 ⑤5GY5/1⑥N 6/0⑦7.5Y8/1 (脚部)10Y4/2の 自然釉	脚部へラ記号「尸」あり 脚部変形三方スカシ
須恵器 (高杯A II)	154		残存高 3.8	II 硬	質 ⑤N6/0 ⑥	脚部三方スカシ

2号窯

種類	図版	写真	法量 cm	胎土・焼成	色調	備考
須惠器 (高杯A II)	155		口径 9.2 器高 10.0	I 硬 質	⊗N7/0 ⊗N8/0	底体部4/5回転ヘラケズリ、脚部2/3回転カキ目(4本/cm)底体部内面一定方向ナデ 脚部隅丸三角形三方スカシ
須惠器 (高杯A II)	156		残存高 5.2	II 硬 質	⊗5B G7/1 ⊗2.5G Y8/1	脚部三角形三方スカシ
須惠器 (高杯A II)	157		残存高 5.5	III 軟 質	⊗10G Y6 1	脚部隅丸三角形三方スカシ
須惠器 (高杯A II)	158	61	口径 10.5 器高 9.8	II 硬 質	⊗N3/0 ⊗	底体部2/3回転ヘラケズリ、底体部内面一定方向ナデ、脚部突線あり 脚部細い楕円形三方スカシ
須惠器 (高杯A II)	159		口径 10.9 器高 9.8	II 硬 質	⊗N5/0	底体部3/4回転ヘラケズリ 底体部内面一定方向ナデ 脚部細い楕円形三方スカシ
須惠器 (高杯A II)	160		口径 10.9 器高 9.2	II 硬 質	⊗N4/0~5/0 ⊗	底体部3/4回転ヘラケズリ 底体部内面一定方向ナデ 脚部細い楕円形三方スカシ
須惠器 (高杯A II)	161	61	口径 11.2 器高 10.0	III 硬 質	⊗10Y7 1 ⊗2.5G Y7/1	底体部3/4回転ヘラケズリ 底体部内面不定方向ナデ 脚部細い楕円形四方スカシ
須惠器 (高杯C)	162	62	口径 19.2 器高 13.5	II 硬 質	⊗(脚内)N8/0 杯内面 ⊗2.5G Y8 1	底体部2/3回転ヘラケズリ 底部近くに環状把手 脚部長方形四方スカシ
須惠器 (高杯C)	163	62	口径 17.0 器高 11.7	II 硬 質	⊗5B G7/1 脚内面5B G6/1 杯部内面 10Y3/2の自然釉	底体部2/3回転ヘラケズリ 底部近くに突起状把手 脚部長方形四方スカシ
須惠器 (高杯C)	164	62	口径16.3~17.5 器高 12.1	II 硬 質	⊗N7/0と2.5 G Y7 1の中間 ⊗10Y8 1	底体部2/3回転ヘラケズリ 口縁部近くに環状把手 脚部内外面に面トリをほどこした長方形 四方スカシ
須惠器 (高杯C)	165	62	口径 18.2 器高 12.9	II 硬 質	⊗5B5/1 ⊗5Y6/1~ 5Y8/1	底体部調整不明 底部近くに環状把手の痕跡 脚部長方形四方スカシ
須惠器 (高杯C)	166	62	口径 16.4 器高 10.9	II 硬 質	⊗(脚内)5B6/1 ⊗10Y6/1 杯内面5B7/1	底体部2/3回転ヘラケズリ 底体部2/3回転カキ目(13本/cm) 底部近くに環状把手 脚部四方スカシ
須惠器 (高杯C)	167	62	口径 16.5 器高 13.1	II 硬 質	⊗N4/0 ⊗	底体部3/4回転ヘラケズリ、底体部3/4+ 脚部3/4回転カキ目(7本/cm)底部近くに 環状把手脚部外面に面トリほどこした長 方形四方スカシ
須惠器 (高杯C)	168		口径 17.5 残存高 12.0	III 硬 質	⊗5P B4/1銀色 状に発色 ⊗5R P5/1	底体部3/4回転ヘラケズリ 底部近くに環状把手 脚部長方形四方スカシ
須惠器 (高杯B)	169	61	口径 13.6 器高 9.5	II 軟 質	(杯外)2.5Y8/3 (脚外)5Y R8/4 (杯内)10Y R8/4 (脚内)5Y R8/3	底体部4/5回転ヘラケズリ 底体部内面不定方向ナデ 脚部突線円形三方スカシ
須惠器 (高杯B)	170		口径 13.6 器高 8.5	III 硬 質	⊗5B4 1 (杯内)N4 1 (脚内)5B6 1	底体部2/3回転ヘラケズリ、底体部4/5回 転カキ目(14本/cm)底体部内面一定方向 ナデ、脚部円形三方スカシ
須惠器 (高杯B)	171	61	口径 12.3 器高 8.3	II 硬 質	⊗5B5/1 (杯内)N5/0 (脚内)5B6/1	底体部4/5回転ヘラケズリ、底体部全面回 転カキ目、底体部内面一定方向ナデ 脚部円形三方スカシ
須惠器 (高杯B)	172	61	口径 13.4 器高 8.4	III 硬 質	⊗10B G4/1	底体部4/5回転ヘラケズリ、4/5回転カキ 目(14本/cm)底体部内面一定方向ナデ 底体部内面に径5cmの環状突起
須惠器 (高杯B)	173		残存高 7.8	III 軟 質	⊗N2/0 ⊗5Y8/3	底体部4/5回転ヘラケズリ 底体部内面一定方向ナデ 杯底部内面に径6.7cmの環状突起
須惠器 (高杯B)	174		残存高 5.9	II 硬 質	⊗N7/0 ⊗N3/0	底体部、脚部2/3回転カキ目 無スカシ
須惠器 (甕B ₁)	175	63	口径 41.8 器高 85.0	III 硬 質	⊗10G B6/1 ⊗10G B5/1 ⊗7.5R4/3	口縁部外面頸基部から1/4横ナデ、他は回 転ナデ、体部外面擬格子状平行タタキ(4 本/cm)、カキ目(21本/cm)、体部内面すり 消し状ナデ
須惠器 (甕B ₁)	176		口径 46.4 残存高 15.0	III 硬 質	⊗10B G7/1 ⊗10R5/2	口縁部、外面頸基部から1/4横ナデ、他は 回転ナデ、体部外面平行タタキ(4.5本/ cm)体部内面すり消し状ナデ

2号窯

種類	図版	写真	法量 cm	胎土・焼成	色調	備考
須恵器 (甕B1)	177		口径 43.0 残存高 19.0	III 硬質	⊕5B6/1 ⊕7.5Y R4 4 ⊕10B G5 1	口縁部、外面頸基部から1/4横ナデ他は回転ナデ。一部タタキ縦方向カキ目残る。体部内面、一部同心円文かすかに残る。
須恵器 (甕B2)	178		口径 43.4 残存高 17.0	III 軟質	⊕5B6 1	口縁部、外面頸基部から1/4横ナデ。他は回転ナデ。体部外面擬格子タタキ(4.5本/cm) 体部内面すり消し状ナデ
須恵器 (甕B2)	179		口径 52.5 残存高 24.0	III 硬質	⊕5B4 1 ⊕5B7 1	口縁部、外面頸基部から1/4横ナデ他は回転ナデ。体部内面ナデ
須恵器 (甕B2)	180	63	口径 46.8 残存高 20.3	III 硬質	⊕N4 0	口縁部、外面頸基部から1/2横ナデ。他は回転ナデ。一部回転カキ目。体部外面平行タタキ(3.5本/cm)体部内面ナデ
須恵器 (甕A1)	181		口径 19.6 残存高 9.2	II 硬質	⊕N4 0 ⊕N6 0	体部外面平行タタキ(4本/cm)回転カキ目(7本/cm)体部内面すり消し状ナデ。他は回転ナデ。
須恵器 (甕A1)	182	64	口径 19.2 残存高 10.8	II 硬質	⊕N7 1 ⊕N6 1	体部外面平行タタキ(3本/cm)体部内面すり消し状ナデ他は回転ナデ
須恵器 (甕A1)	183		口径 19.4 残存高 8.5	II 軟質	⊕2.5G Y6 1 ⊕2.5Y7 3	体部外面平行タタキ(3.5本/cm)体部内面横ナデ。他は回転ナデ
須恵器 (甕A1)	184	64	口径 18.5 残存高 13.0	III 軟質	⊕N7 0	体部外面平行タタキ(4本/cm)体部内面すり消し状ナデ、他は回転ナデ
須恵器 (甕A1)	185		口径 21.5 残存高 13.7	III 硬質	⊕5R P7 1 ⊕5R P7 1	体部外面平行タタキ(3.5本/cm)回転カキ目(5本/cm)体部内面ナデ他は回転ナデ
須恵器 (甕A1)	186		口径 23.0 残存高 11.4	I 硬質	⊕10Y7/2の自然釉 ⊕N7 0	体部外面平行タタキ(4本/cm)体部内面ナデ、他は回転ナデ
須恵器 (甕B2)	187		口径 16.0 残存高 9.5	II 硬質	⊕2.5G Y8 1 ⊕5B5 1 ⊕10Y R7 1	体部外面平行タタキ(3本/cm)他は回転ナデ
須恵器 (甕B2)	188	64	口径 14.5 器高 18.1	III 中	⊕N7 0 ⊕N3 0	体部外面平行タタキ(4本/cm)回転カキ目(10.5本/cm)へラ記号「#」底部内面円弧状工具痕、他は回転ナデ
須恵器 (甕B2)	189		口径 15.3 残存高 18.8	III 硬質	⊕10B G4 1	体部外面擬格子タタキ(4本/cm)回転カキ目(8本/cm)体部内面下半ナデ。底部内面円弧状工具痕、他は回転ナデ
須恵器 (甕B2)	190	64	口径 14.8 残存高 18.0	II 硬質	⊕N7 0 ⊕N6 0	体部外面平行タタキ(2.5本/cm)回転カキ目、体部内面ナデ。他は回転ナデ
須恵器 (甕B2)	191		口径 19.8 器高 29.3	III 硬質	⊕5P5 1 ⊕5P B5 1 ⊕5R5 1	体部外面擬格子状タタキ(4.5本/cm)回転カキ目(7本/cm)(指頭痕かすかに残る)体部内面下半ナデ、他は回転ナデ
須恵器 (甕B2)	192	64	口径 18.2 残存高 24.0	III 軟質	⊕5G Y7 1 ⊕2.5G Y7 1	体部外面タテ平行タタキ(4.5本/cm)、回転カキ目、体部内面、下半ナデ、他は回転ナデ
須恵器 (甕B2)	193	64	口径 18.6 器高 27.6	II 軟質	⊕5B G6 1 ⊕10B G4 1	体部外面タテ平行タタキ(4本/cm)回転カキ目(指頭紋、同心円文かすかに残る)体部内面ナデ、他は回転ナデ
須恵器 (甕B1)	194		口径 20.4 残存高 8.4	II 硬質	⊕N6 1	体部外面平行タタキ(3本/cm)回転カキ目体部内面ナデ。他は回転ナデ。
須恵器 (甕B1)	195		口径 23.6 残存高 10.3	III 硬質	⊕10B G6 1	体部外面平行タタキ(4.5本/cm)体部内面ナデ(同心円文残る)他は回転ナデ
須恵器 (甕B1)	196	65	口径 22.0 残存高 10.9	III 硬質	⊕10B G4 1 ⊕5B G5 1 ⊕7.5Y R5 2	体部外面擬格子状タタキ(5本/cm)体部内面ナデ。口縁部外面回転カキ目(6本/cm)他は回転ナデ
須恵器 (甕B1)	197	65	口径 24.1 残存高 9.4	III 硬質	⊕5B G3 1 ⊕5B G5 1	体部外面平行タタキ(4本/cm) 回転ナデ体部内面ナデ、他は回転ナデ
須恵器 (甕B1)	198		口径 28.0 残存高 17.7	III 硬質	⊕5Y R5 4	未還元。体部外面平行タタキ(5本/cm)・ヨコナデ(同心円文残る)体部内面ナデ。他は回転ナデ

2号窯

種類	図版	写真	法量 cm	胎土・焼成	色調	備考
須恵器 (甕C ₁)	199	65	口径 27.0 残存高 7.2	III 硬 質	⑤5P B3 1 ⑥	体部外面平行タタキ(4本/cm)体部内面 スリ消し状ナデ(同心円文残る)口縁部外 面回転カキ目(7本/cm)他は回転ナデ
須恵器 (甕C ₁)	200		口径 23.8 残存高 5.8	II 硬 質	⑤5P B5 1 ⑥	内外面回転ナデ
須恵器 (甕C ₂)	201	65	口径 19.6 残存高 5.8	III 硬 質	⑤2.5G Y7 1 ⑥5B4 1	内外面回転ナデ 口縁部「ハ」へラ記号
須恵器 (甕D)	202	65	口径 21.2 残存高 4.7	II 軟 質	⑤2.5G Y7 1 ⑥	内外面回転ナデ
須恵器 (甕D)	203	65	口径 18.0 残存高 10.0	II 硬 質	⑤N7 0 ⑥	体部外面平行タタキ(4本/cm)回転カキ 目(11本/cm)体部内面ナデ(指頭痕残る 他は回転ナデ)
須恵器 (甕E)	204	66	口径 19.6 残存高 20.4	III 硬 質	⑤N5 1 ⑥N8 1	体部外面平行タタキ(5本/cm) 回転カキ目(9本/cm)、体部内面ヨコナ デ(同心円文残る)、他は回転ナデ
須恵器 (甕E)	205	66	口径 13.7 残存高 20.4	II 硬 質	⑤N5 0 ⑥	体部外面下半擬格子状タタキ(4本/cm) 底部内面径7.8cmの同心円状工具痕 他は回転ナデ
須恵器 (甕E)	206		口径 8.2 残存高 7.5	II 硬 質	⑤N5 0 ⑥5B6 1	内外面回転ナデ
須恵器 (甕E)	207	66	口径 8.2 残存高 8.3	II 硬 質	⑤5B6 1 ⑥	体部下半回転カキ目(15本/cm) 他は回転ナデ
須恵器 (甕F)	208		口径 14.4 残存高 7.1	I 硬 質	⑤N7 0 ⑥	体部外面平行タタキ(4本/cm) 他は回転ナデ
須恵器 (甕F)	209	66	口径 17.8 残存高 8.6	III 硬 質	⑤10G6 1 ⑥	体部外面平行タタキ(5本/cm)ヨコナデ 他は回転ナデ
須恵器 (甕F)	210		口径 16.7 残存高 8.4	II 軟 質	⑤5Y8 3 ⑥	未還元、体部外面平行タタキ(5本/cm) 回転カキ目(5本/cm)、内面不明 他は回転ナデ
須恵器 (甕F)	211		口径 15.8 残存高 6.9	III 軟 質	⑤5Y8 4 ⑥	未還元、体部外面平行タタキ(4本/cm) 回転カキ目(5本/cm)、体部内面ヨコナ デ、他は回転ナデ
須恵器 (甕F)	212		口径 10.0 残存高 12.3	I 硬 質	⑤5G3 1 ⑥10B G5 1	体部外面下半ナデ 底部内面ナデ 他は回転ナデ
須恵器 (甕F)	213	66	口径 10.3 残存高 13.4	III 硬 質	⑤5B5 1 ⑥	底部外面平行タタキ(4本/cm) 他は回転ナデ
須恵器 (甕F)	214		口径 10.0 残存高 11.9	II 硬 質	⑤10Y6 1 ⑥N7 0 ⑥10R6 2	体部下半平行タタキ(3本/cm) 他は回転ナデ
須恵器 (甕G ₁)	215	67	口径 9.6 残存高 10.1	II 軟 質	⑤N8 1 ⑥N6 1	体部外面下半カキ目 体部内面下半ナデ 他は回転ナデ
須恵器 (甕G ₂)	216	67	口径 10.3 残存高 12.6	III 硬 質	⑤5B4 1 ⑥5R P6 1	体部外面下半ナデ 底部内面一定方向ナデ 他は回転ナデ
須恵器 (甕G ₂)	217	67	口径 10.3 残存高 10.6	II 硬 質	⑤5B5 1 ⑥	内外面回転ナデ
須恵器 (甕G ₂)	218	67	口径 10.6 残存高 9.5	III 硬 質	⑤5Y6 1 ⑥	内外面回転ナデ
須恵器 (甕G ₂)	219		口径 12.5 残存高 11.7	III 硬 質	⑤7.5Y5 1 ⑥	体部外面下半回転カキ目((5本/cm) 他は回転ナデ)
須恵器 (甕G ₂)	220	67	口径 10.0 残存高 13.4	II 硬 質	⑤5B5 1 ⑥	体部外面下半ヨコナデ 底部内面ヨコナデ 他は回転ナデ

2号窯

種類	図版	写真	法量 cm	胎土・焼成	色調	備考
須恵器壺H(題)	221	68	口径 9.8 残存高 10.6	II 軟	質 ⑤5Y R4/1 ⑥5Y R6/6	還元不良、体部外面下半ナデ 体部内面下半ナデ、他は回転ナデ 「ハ」ヘア記号
須恵器壺H(題)	222	68	口径 9.0 器高 9.9	II 硬	質 ⑤5G4/1	体部外面下半回転ヘラケズリ・ナデ 体部内面下半ナデ 他は回転ナデ
須恵器壺H(題)	223	68	口径 10.9 器高 11.0	II 軟	質 ⑤10Y R7/3	体部外面下半カキ目のちヘラケズリ 底部内外面ナデ、他は回転ナデ 「ノ」ヘア記号
須恵器壺H(題)	224	68	口径 10.2 器高 12.1	II 中	質 ⑤N7/0	体部外面下半回転カキ目(7本/cm)、ナデ 底部内面棒状工具痕、他は回転ナデ 「\\\\」ヘア記号
須恵器壺H(題)	225		口径 10.9 残存高 12.3	II 軟	質 ⑤N6/0	体部外面下半ナデ(平行タタキ目残る) 体部内面下半ナデ、他は回転ナデ 体部内面上半シボリ目
須恵器壺H(題)	226		口径 10.6 残存高 12.7	II 硬	質 ⑤N6/0 ⑥N7.5/0	体部外面下半ナデ(平行タタキ目残る) 体部内面ナデ 他は回転ナデ
須恵器壺H(題)	227		口径 11.0 残存高 12.8	III 硬	質 ⑤5G4/1 ⑥N4/0	内外面回転ナデ
須恵器壺H(題)	228	68	口径 11.8 器高 16.1	II 軟	質 ⑤5G4/1 ⑥10B G7 1	底部外面平行タタキ(5本/cm) 底部内面指頭痕 他は回転ナデ(シボリ目残る)
須恵器壺H(題)	229	68	口径 11.7 残存高 16.0	III 硬	質 ⑥10B G4 1 ⑤5B6/1	体部外面下半ナデ 底部内面指頭痕 他は回転ナデ
須恵器蓋(壺I)	230		残存高 3.1	I 硬	質 ⑤10Y6/2 ⑥10Y7/1	天井部外面回転ヘラケズリ 天井部内面小範囲一定方向ナデ 他は回転ナデ
須恵器蓋(壺I)	231	69	口径 10.3 器高 4.4	I 硬	質 ⑤10Y7/1	天井部外面4.5回転ヘラケズリ 天井部内面広範囲不定方向ナデ 他は回転ナデ
須恵器蓋(壺I)	232	69	口径 14.2 器高 3.2	II 硬	質 ⑤7.5Y5.2 ⑥10Y5/1	天井部外面2.3回転ヘラケズリ 天井部内面広範囲不定方向ナデ 他は回転ナデ
須恵器(壺I)	233	69	口径 9.0 器高 34.5	I 硬	質 ⑤7.5G Y6 1	体部外面下半平行タタキ(4本/cm)、回転ナデ、体部内面下半ナデ、他は回転ナデ、三角形七方交互スカシ
須恵器(壺I)	234		口径 9.0 残存高 5.9	II 硬	質 ⑤N8/0	内外面回転ナデ
須恵器(壺I)	235		口径 9.0 残存高 5.9	II 硬	質 ⑤N6/0	〃
須恵器脚台(壺I)	236	69	口径 9.0 残存高 5.0	III 硬	質 ⑥10B G6 1 ⑤5B6 1 ⑥10R5 2	内外面回転ナデ(一部平行タタキ目残る) 長方形縦列二段スカシと三角形スカシの 六方交配置
須恵器脚台(壺I)	237		残存高 16.6	II 硬	質 ⑤N8 1	脚部内外面回転ナデ 三角形七方交互スカシ
須恵器脚台(壺I)	238	69	残存高 17.8	II 硬	質 ⑤10G6 1	脚部内外面回転ナデ 三角形五方交互スカシ
須恵器(壺I)	239	69	口径 8.3 器高 9.1	III 硬	質 ⑤5B5/1 ⑥N7/0 ⑥10R4/2	体部下半平行タタキ(4本/cm) 底部外面ナデ 底部内面円弧状工具痕
須恵器(壺)	240	65	口径 10.15 残存高 4.9	I 硬	質 ⑤10B G5 1	内外面回転ナデ
須恵器(高杯形器台)	241	70	口径 35.4 器高 37.7	II 軟	質 ⑤2.5G Y7 1	受け部内底面不定方向ナデ。受け部外面 下半から底部に、擬格子状タタキ(4.5本/ cm) 他は回転ナデ。脚台部端面外面にタ タキ目残る
須恵器(高杯形器台)	242	70	口径 38.2 器高 37.8	III 軟	質 ⑤10Y7 1	擬格子状タタキ(4本/cm) 他は241と同じ

2号窯

種類	図版	写真	法量 cm	胎土・焼成	色調	備考
須惠器 (高杯形器台)	243		口径 33.6	II 硬	質 ⑤5B7/1 ⑥N6/0	内底面不定方向ナデ 外面下半から底部に平行タタキ(4本 cm) 他は回転ナデ
須惠器 (高杯形器台)	244	71	残存高 22.0	II 軟	質 ⑤7.5Y4/6	外面回転カキ目(7本 cm) 他は回転ナデ 三角形七方交互スカシ
須惠器 (高杯形器台)	245	71	残存高 25.8	II 硬	質 ⑤5B4/1	外面回転カキ目(4本 cm) 他は回転ナデ。長方形三段縦列スカシと 三角形スカシの交互配置
須惠器 (高杯形器台)	246		残存高 29.3	III 軟	質 ⑤7.5Y8/2	内外面回転ナデ 長方形七方縦列スカシ
須惠器 (筒形器台)	247	71	口径 15.5 残存高 11.8	III 硬	質 ⑤5PB4/1 ⑥5RP4/1	内外面回転ナデ 長方形八方スカシ
須惠器 (筒形器台)	248	71	残存高 9.3	III 硬	質 ⑤5B7/1 ⑥5B5/1	内外面回転ナデ
須惠器 (鉢)	249	72	口径 11.0 残存高 5.3	II 軟	質 ⑤10BG6/1	体部外面下半ヘラケズリ、底部外面未調整(指頭痕残る)、底部内面不定方向ナデ 他は回転ナデ
須惠器 (鉢)	250	72	口径 20.4 器高 10.6	II 軟	質 ⑤10YR8/3 ⑥外面一部 10Y4/1	体部外面下半ヘラケズリ 底部内外面不明 他は回転ナデ
須惠器 (鉢)	251	72	口径 12.0 残存高 7.6	II 硬	質 ⑤5B6/1	体部外面回転カキ目(5本 cm) 他は回転ナデ 把手はヘラケズリ
須惠器 (鉢)	252	72	口径 12.0 残存高 7.6	II 硬	質 ⑤N7/0 ⑥N6/0	体部内面下半ヨコナデ 他は回転ナデ
須惠器 (把手付椀A)	253	72	口径 9.4 残存高 4.9	III 軟	質 ⑤10Y5/1	内外面回転ナデ 把手は粘土組貼り付け
須惠器 (把手付椀A)	254		残存高 6.3	III 軟	質 ⑤N5/0	体部外面下半回転ヘラケズリ、静止ヘラケズリ、底部外面ナデ 底部内面一定方向ナデ
須惠器 (把手付椀B)	255	72	口径 9.0 残存高 4.8	III 硬	質 ⑤5B7/1 ⑥N7/0	内外面回転ナデ
須惠器 (把手付椀B)	256	72	口径 9.0 残存高 5.2	III 硬	質 ⑤N5/0	内外面回転ナデ
須惠器 (把手付椀C)	257	72	口径 8.0 器高 6.0	III 硬	質 ⑤10GY7/1	体部外面下半回転ヘラケズリ 底部外面ナデ 他は回転ナデ
須惠器 (把手付椀C)	258		口径 6.7 残存高 7.0	II 軟	質 ⑤2.5Y4/2	
須惠器 (把手付椀D)	259		口径 6.0 器高 5.65	II 硬	質 ⑤10Y7/1	底部外面不定方向ナデ 底部内面不明 他は回転ナデ
須惠器 (把手付椀D)	260	72	口径 5.7 残存高 5.4	III 硬	質 ⑤N5/0	内外面回転ナデ
須惠器 (把手付椀D)	261		口径 10.2 残存高 6.9	II 軟	質 ⑤7.5Y8/2	体部外面下半から底部ヘラケズリ 底部内面一定方向ナデ 他は回転ナデ
須惠器 (甗A)	262	73	口径 43.6 残存高 10.5	II 硬	質 ⑤7.5Y8/1	体部外面平行タタキ(3.5本 cm)・ナデ 体部内面ヨコナデ 口縁端部回転ナデ。
須惠器 (甗A)	263	73	口径37.4~36.2 器高 32.2	II 軟	質 ⑤5G1.7/1	体部外面底部近く静止ヘラケズリ、底部内外面不明。体部内面ヘラケズリのちナデ(指頭痕残る)。他は回転ナデ。(平行タタキ目残る)
須惠器 (把手)	264	73	最大径 2.6 長さ 6.0	II 硬	質 5Y5/1	手づくね成形 切り込み

2号窯 3号窯(272から)

種類	図版	写真	法量 cm	胎土・焼成	色調	備考
須惠器 (把手)	265	73	最大径 3.5 長さ 7.2	II 軟 質	2.5Y6/2	手づくね成形 切り込み
須惠器 (甌B)	266		口径 20.4 器高 16.0	II 硬 質	⑤N1/6 ⑥	体部外面底部近く静止ヘラケズリ 底部内外面不明 他は回転ナデ
須惠器 (甌C)	267		口径 25.5 残存高 7.1	II 硬 質	⑤N5/0 ⑥	体部外面平行タタキ(4.5本/cm) 回転カキ目(7本/cm) 他は回転ナデ
須惠器 (甌C)	268		口径 31.6 器高 24.5	II 軟 質	⑤7.5Y5/1 ⑥	体部外面擬格子状タタキ(4本/cm)・口 縁部近くに回転カキ目(6本/cm)・底部 近く静止ヘラケズリ・口縁部回転ナデ。 体部内面ナデ
土師器 (壺)	269	74	口径 15.9 残存高 6.9	1mm以下の砂粒を含む中	⑤⑥2.5Y6/2 一部黒斑	内外面ヨコナデ
土師器 (甕)	270	74	口径 18.5 残存高 3.0	2~3mmの砂粒を多く含む中	⑤黒焦 ⑥2.5Y5/2	内外面ヨコナデ
鉢(韓式系?)	271	74	底径 11.1 残存高 4.5	1mmの砂粒。 赤色粒を多く含む中	⑤10Y4/1 ⑥	体部外面底部近くヘラケズリ 底部外面ナデ(指頭痕残る) 体部内面ヨコナデ他は不明
土師器 (高杯)	272	75	口径13.2(復元) 器高 5.0(復元)	白色砂粒含む中	⑤5Y7/1 ⑥	天井部4/5回転ヘラケズリ 他は回転ナデ・ロクロ回転反時計
土師器 (高杯)	273	75	口径12.8(復元) 器高 4.9	白色砂粒含む中	⑤5Y6/1 ⑥	天井部4/5回転ヘラケズリ 他は回転ナデ・ロクロ回転反時計
須惠器 (蓋)	274	75	口径 12.0 器高 4.8	白色砂粒含む 軟質	⑤2.5Y7/3 ⑥10Y R7/2	天井部3/4回転ヘラケズリ 他は回転ナデ・ロクロ回転反時計
須惠器 (蓋)	275	75	口径11.8(復元) 器高 3.6(復元)	白色砂粒含む中	⑤5Y5/2 ⑥	天井部4/5回転ヘラケズリ 他は回転ナデ。ロクロ回転反時計
須惠器 (杯身)	276	75	口径 11.6 器高 4.6	白色砂粒含む 硬質	⑤N7/0 ⑥	底部部5/6回転ヘラケズリ 他は回転ナデ。ロクロ回転反時計
須惠器 (杯身)	277		口径 11.8 器高 4.4	白色砂粒含む 軟質	⑤7.5Y R5/4 ⑥7.5Y5/2	底部部5/6回転ヘラケズリ 他は回転ナデ。ロクロ回転反時計
須惠器 (杯身)	278	75	口径 11.6 器高 4.6	白色砂粒含む中	⑤10Y R6/1 ⑥	底部部5/6回転ヘラケズリ 他は回転ナデ。ロクロ回転反時計
須惠器 (杯身)	279		口径10.4(復元) 器高 4.9	精 良 中	⑤N4/0 ⑥7.5Y6/1	底部部5/6回転ヘラケズリ 他は回転ナデ。ロクロ回転反時計
須惠器 (杯身)	280	75	口径 10.4 器高 4.9	白色砂粒含む中	⑤灰黄褐色 ⑥10Y R4/2	底部部3/4回転ヘラケズリ 他は回転ナデ。ロクロ回転反時計
須惠器 (杯身)	281		口径 11.6 器高 4.9	白色砂粒含む 軟質	⑤2.5Y5/3 ⑥2.5Y4/2	底部部5/6回転ヘラケズリ 他は回転ナデ。ロクロ回転反時計
須惠器 (杯身)	282	75	口径 11.0 器高 4.8	白色砂粒含む 硬質	⑤10G7/1 ⑥10Y7/1	底部部5/6回転ヘラケズリ 他は回転ナデ。ロクロ回転反時計
須惠器 (杯身)	283		口径 11.2 器高 4.8	精 良 硬質	⑤N7/0 ⑥	底部部5/6回転ヘラケズリ 他は回転ナデ。ロクロ回転反時計
須惠器 (杯身)	284	75	口径 10.8 器高 5.0	白色砂粒含む 硬質	⑤10Y7/1 ⑥	底部部3/4回転ヘラケズリ 他は回転ナデ ロクロ回転反時計
須惠器 (杯身)	285		口径 10.4 器高 4.5	精 良 中	⑤2.5Y4/2 ⑥2.5Y4/2	底部部1/2回転ヘラケズリ 他は回転ナデ ロクロ回転反時計
須惠器 (杯身)	286		口径 10.0 器高 4.6	白色砂粒含む中	⑤N6/0 ⑥	底部部2/3回転ヘラケズリ 回転カキ目1/3、他は回転ナデ ロクロ回転反時計

3号窯 1号窯(304から)

種類	図版	写真	法量 cm	胎土・焼成	色調	備考
須惠器 (杯身)	287	75	口径 10.4 器高 4.6	白色砂粒含む 軟質	⊕5Y8 3 ⊖	底体部2 3回転ヘラケズリ回転カキ目1 3 他は回転ナデ、ロクロ回転時計
須惠器 有蓋高杯(蓋)	288		口径 12.8 器高 4.9 つまみ高 0.8	精良 中	⊕10Y R6 2 ⊖	天井部1 2回転ヘラケズリ 他は回転ナデ ロクロ回転反時計
須惠器 高杯(脚部)	289		基底部径 10.0 (復元)	精良 中	⊕2.5Y7/3 ⊖5Y7 1	内外面とも回転ナデ 一条凸帯
須惠器 高杯(脚部)	290	75	基底部径 11.4 (復元)	白色砂粒含む 中	⊕N6 0 ⊖2.5Y5 2	内外面とも回転ナデ 一条凸帯
須惠器 高杯(脚部)	291	75	基底部径 9.6	精良 中	⊕5Y6 1 ⊖	内外面とも回転ナデ 端部に2条の凹線
須惠器 高杯(脚部)	292	76	基底部径 9.2	精良 中	⊕5Y6 1 ⊖	内外面とも回転ナデ
須惠器 (無蓋高杯)	293	76	口径16.4(復元) 器高13.3(復元)	精良 中	⊕2.5Y7 1 ⊖10Y R3/1	杯身底部の一部回転ヘラケズリ その他回転ナデ
須惠器 (椀)	294	76	口径 9.0(復元) 器高 6.3(復元)	精良 中	⊕5Y R5/2 ⊖	体部外面静止ヘラケズリ。その他回転ナ デ。凸線一条有り、一条(5本)の波状文
須惠器 (壺)	295	76	口径10.0(復元) 器高 不明	精良 中	⊕N7 0 ⊖	内外面とも回転ナデ 口頸2 5、3 5断面三角形凸線 凸線間に1条(11本)の波状文
須惠器 (壺)	296		口径 8.6(復元) 器高 不明	精良 中	⊕5Y7 1 ⊖	内外面とも回転ナデ 1条(7~9本)の波状文
須惠器 (甕)	297		口径 19.4 残存高 5.3	白色砂粒含む 硬質	⊕N8 0 ⊖	内外面回転ナデ 一条のヒネり出し凸線
須惠器 (甕)	298		口径24.0(復元) 残存高 4.8	白色砂粒含む 中	⊕7.5Y5 3 ⊖10Y R6 1	内外面回転ナデ 一条のヒネり出し凸線
須惠器 (甕)	299	76	口径 20.6 残存高 6.4	精良 中	⊕5Y R6 1 ⊖	内外面回転ナデ 体部外面平行タタキ(3本/cm) 一条のヒネり出し凸線
須惠器 (甕)	300		口径25.2(復元) 残存高 10.0	白色砂粒含む 中	⊕5Y R5 4 ⊖7.5Y6 1	内外面回転ナデ 体部外面平行タタキ(3本/cm) 一条のヒネり出し凸線
須惠器 (甕)	301		口径 18.4 残存高 4.6	白色砂粒含む 中	⊕10Y R3 1 ⊖5Y7 3	内外面とも回転ナデ 口頸部1 3・2 3に断面三角形の凸線 三条(9~13本)の波状文
須惠器 (甕)	302	76	口径 17.2 残存高 10.2	精良 中	⊕2.5Y8 2 ⊖	体部平行タタキ(5本/cm)、その他回転 ナデ。口頸部二条の凸線、二条(8~11 本)の波状文
須惠器 (甕)	303	76	口径 18.8 器高 22.0	黒色粒白色粒多く含 む 硬質	⊕10R4 2 ⊖	体部外面回転カキ目。底部平行タタキ(3 本/cm)、底部内面指押え、その他ナデ
須惠器 (杯蓋)	304	56	口径 16.8 残存高 2.7	緻密、白色砂粒を散 見、硬質	5B6 1	内面に火ダスキあり
須惠器 (杯蓋)	305	55	口径 16.0 残存高 2.4	緻密 硬質	7.5Y R3 1	内外面に火ダスキあり
須惠器 (杯蓋)	306	55	口径 17.2 残存高 2.3	緻密 硬質	7.5Y R5 4	内外面に火ダスキあり 一部を最終床面より検出
須惠器 (杯蓋)	307	56	口径 16.8 残存高 1.9	緻密、白色砂粒を散 見、硬質	5B7/1	内外面に火ダスキあり
須惠器 (杯蓋)	308	56	口径 17.2 残存高 1.55	緻密、白色細砂粒を 散見、硬質	5G6/1	内外面に火ダスキあり

1号窯

種類	図版	写真	法量 cm	胎土・焼成	色調	備考
須惠器 (杯蓋)	309	56	残存高 1.8	緻密 硬質	5B7/1	輪状つまみをもつ
須惠器 (杯身)	310	56	残存高 3.0 底径 11.3	緻密、白色細砂粒を 多く含む、硬質	10B G6/1	
須惠器 (鉢)	311	56	口径 17.6 残存高 5.6	緻密、大きめの白色 砂粒を散見、軟質	10Y R7/4	
須惠器 (鉢)	312	56	口径 19.0 残存高 5.0	緻密、白色砂粒を多 く含む、軟質	2.5Y8/4	
須惠器 (鉢)	313	55	口径 19.0 残存高 7.0	緻密、白色砂粒を多 く含む、軟質	2.5Y8/4	
須惠器 (皿)	314	55	口径 16.0 器高 1.75	緻密 軟質	7.5Y8/2	
須惠器 (皿)	315		口径 16.4 器高 2.15	緻密 軟質	7.5Y8/2	内面に火ダスキあり
須惠器 (皿)	316	55	口径 21.2 器高 2.0	緻密、白色砂粒を散 見、軟質	7.5Y8/2	
須惠器 (皿)	317		口径 16.0 器高 1.7	緻密 硬質	5B G5/1	底部外面に砂粒溶着 内外面および割れ口に自然釉かかる
須惠器 (皿)	318	55	口径 16.0 器高 1.2	白色、白色砂粒を多 く含む 中	5B G5/1	底部内面に火ダスキあり 一部に焼け歪みあり
須惠器 (皿)	319		復元口径 14.4 復元器高 2.4	緻密、白色砂粒を比 較的多く含む 中	10B G5/1	焼け歪みが著しい
須惠器 (蚶壺)	320		底径 3.4 器高 8.6	緻密、白色砂粒を散 見 中	7.5R4/8	窯体内焼土層より検出
須惠器 (蚶壺)	321	55	底径 3.2 器高 8.8	緻密 軟質	2.5Y R3/4	窯体内焼土層より検出
須惠器 (壺)	322	55	口径 8.4 残存高 14.1	緻密 硬質	5B G6/1	一部に焼け歪みあり
須惠器 (壺)	323	56	底径 8.8 残存高 5.1	緻密 硬質	5B G6/1	
須惠器 (瓶子)	324	56	底径 4.2 残存高 4.2	気泡が多く、細かい 白色砂粒を多く含む 硬質	5Y5/1	外面の底部付近から上方へ向かって自然 釉がみられる
須惠器 (壺)	325	55	口径 8.2 残存高 6.5	緻密だが口縁部では 気泡がみられる 硬質	5B G6/1	一部に焼け歪みあり
須惠器 (壺)	326		胴部 最大径 7.8 残存高 6.8	緻密 硬質	5B G5/1	
須惠器 (壺)	327	55	底径 8.5 残存高 2.7	緻密やや大型の白色 砂粒を多く含む 硬質	5B G5/1	
須惠器 (摺鉢)	328	56	底径 7.5 残存高 4.4	緻密、白色砂粒を多 く含む 中	2.5Y8/3	
須惠器 (甕)	329		底径 5.0 残存高 13.2	緻密、白色砂粒を多 く含む 硬質	2.5Y5/1	
須惠器 (甕)	330		口径 25.2 残存高 7.3	緻密、白色砂粒を散 見 硬質	5B G6/1	

4号窯(346から)

種類	図版	写真	法量 cm	胎土・焼成	色調	備考	
須恵器 (杯身)	331	27	口径 10.0 器高 4.9	軟質	⊕2.5GY8/1 ⊖5GY8/1	カキ目のちへラケズリ	
須恵器 (杯身)	332	27	口径 10.7	軟質	⊕5Y8/2 ⊖N7/1		
須恵器 (杯身)	333		口径 10.7	軟質	⊕10Y6/1 ⊖N7/0		
須恵器 (壺)	334	27	口径 15.7	硬質	⊕N10/6 ⊖7.5Y8/2		
須恵器 (杯身)	335	27	口径 11.0 器高 5.5	軟質	⊕7.5Y7/1 ⊖5Y7/1		
弥生壺	336	28	底径 3.4	中	⊕10YR7/4 ⊖10YR6/2		
須恵器 (壺)	337	28	口径 20.8	硬質	⊕10Y5/1 ⊖7.5Y6/1	壺の小破片	
須恵器 (杯身)	338		口径 10.9	硬質	⊕7.5Y6/1 ⊖	TK-23	
須恵器 (杯身)	339	28		硬質	⊕7.5Y6/1 ⊖7.5Y8/3	小破片	
須恵器 (壺底部)	340	28	底径 9.9	硬質	⊕7.5Y6/1 ⊖10Y6/1		
須恵器 (高杯細部)	341	28	底径 9.0	硬質	⊕10Y5/1 ⊖7.5Y6/1		
土師器 (羽釜)	342	28		硬質	⊕2.5Y6/6 ⊖		
須恵器 (鉢)	343		口径 31.0	硬質	⊕10YR5/1 ⊖10YR6/1		
瓦器皿	344		口径 11.0 残存高 2.0	硬質	⊕N2/0 ⊖10Y8/1		
土師器 (製塩土器)	345			硬質	⊕2.5GY8/1 ⊖5Y8/2		
						層位	
須恵器 (杯身)	346	31	口径 8.8 器高 4.2	白色粗砂粒 硬質	⊕10BG7/1 ⊖	へラ記号	4
須恵器 (杯身)	347		口径 10.2 器高 5.2	白色粗砂粒 黒色細砂粒 硬質	⊕N8/0 ⊖5R5/1	へラ記号	6
須恵器 (杯身)	348		口径 11.4 器高 5.1	白色細砂粒 硬質	⊕5BG4/1 ⊖5PB3/1 ⊖10Y8/1	へラ記号	10
須恵器 (杯身)	349		口径 10.7 器高 4.8	白色粗砂粒 硬質	⊕5B7/1 ⊖5PB7/1	へラ記号	6
須恵器 (杯身)	350	30	口径 10.8 器高 5.4	白色細砂粒 白色粗砂粒 硬質	⊕10BG6/1 ⊖5BG7/1	へラ記号	11
須恵器 (杯身)	351		口径 11.4 器高 5.0	白色粗砂粒 黒色粗砂粒 硬質	⊕5B7/1 ⊖5PB7/1 ⊖5RP5/1		6
須恵器 (杯身)	352		口径 10.7 器高 4.9	白色細砂粒 硬質	⊕10BG3/1 ⊖7.5GY4/1	へラ記号	6

4号窯

種類	図版	写真	法量 cm	胎土・焼成	色調	備考	層位
須惠器 (杯身)	353		口径 10.3 器高 4.7	白色粗砂粒 硬質	㊦5B G 6/1 ㊦N 8/0 ㊦10G Y 6/1	ヘラ記号	11
須惠器 (杯身)	354		口径 10.4 器高 4.3	硬質	㊦2.5G Y 6/1 ㊦5B 6/1		4
須惠器 (杯身)	355		口径 10.4 器高 4.9	白色細砂粒 黒色粗砂粒 硬質	㊦10B G 4/1 ㊦N 8/0	ヘラ記号	11
須惠器 (杯身)	356		口径 11.1 器高 5.0	白色細砂粒 硬質	㊦10B G 6/1 ㊦5B G 6/1	ヘラ記号	6
須惠器 (杯身)	357		口径 10.7 器高 5.1	白色細砂粒 黒色細砂粒 硬質	㊦10B G 6/1 ㊦5B G 6/1	ヘラ記号	4
須惠器 (杯身)	358	31	口径 10.7 器高 4.8	白色粗砂粒 硬質	㊦N 6/0 ㊦10B G 7/1	ヘラ記号	6
須惠器 (杯身)	359		口径 10.6 器高 5.4	白色細砂粒 硬質	㊦10Y 7/1 ㊦5G Y 7/1	ヘラ記号	6
須惠器 (杯身)	360		口径 11.0 器高 5.2	硬質	㊦10Y 6/1 ㊦5Y 8/2		4
須惠器 (杯身)	361		口径 10.0 器高 4.1	白色粗砂粒 硬質	㊦5B 5/1 ㊦10Y 4/1 ㊦10Y 5/1	ヘラ記号	7
須惠器 (杯身)	362	30	口径 10.3 器高 4.3	白色細砂粒 白色粗砂粒 硬質	㊦10B G 5/1 ㊦5B 5/1 ㊦5R 4/1	ヘラ記号	6
須惠器 (杯身)	363	30	口径 10.7 器高 4.6	黒色細砂粒 白色粗砂粒 硬質	㊦N 8/0 ㊦5B 7/1 ㊦5B 3/1	ヘラ記号	11
須惠器 (杯身)	364		口径 11.0 器高 4.2	白色細砂粒 硬質	㊦10B G 3/1 ㊦5B 4/1 ㊦5R 5/1	ヘラ記号	4
須惠器 (杯身)	365		口径 10.8 器高 4.7	白色細砂粒 硬質	㊦5G Y 6/1 ㊦N 7/1 ㊦5R 5/1	ヘラ記号	11
須惠器 (杯身)	366	30	口径 10.8 器高 4.5	白色細砂粒 白色粗砂粒 黒色粗砂粒 硬質	㊦10B G 6/1 ㊦10B G 1/1	ヘラ記号	6
須惠器 (杯身)	367		口径 11.1 器高 4.7	硬質	㊦5B 5/1 ㊦5B G 5/1		10
須惠器 (杯身)	368		口径 11.0 器高 4.8	中	㊦N 6/0 ㊦N 6/0		6
須惠器 (杯蓋)	369		口径 12.6 器高 5.4	硬質	㊦N 5/6 ㊦N 6/6		11
須惠器 (有蓋高杯)	370	22	口径 11.3 器高 8.8	白色・黒色細砂粒 硬質	㊦10G Y 7/1 ㊦10G Y 8/1 ㊦10G Y 7/1	ヘラ記号	6
須惠器 (有蓋高杯)	371		口径 12.2 器高 不明	硬質	㊦N 7/0 ㊦N 7/0	杯身、脚は欠損 波状文7条	6
須惠器 (有蓋高杯)	372	21	口径 不明 器高 12.9	硬質	㊦10Y 7/1 ㊦10Y 8/1	杯と蓋が融着 火ぶくれ、歪みあり	6
須惠器 (有蓋高杯)	373	22 31	口径 16.4 器高 12.1	白色・黒色細砂粒 硬質	㊦10B G 4/1 ㊦5G 5/1 ㊦5R 5/1	波状文5条 ヘラ記号	6

4号窯 須恵器計測データ

資料番号	口径	器高	立上高	資料番号	口径	器高	立上高
117-1	10.4	4.7	1.8	116	10.3	4.7	1.9
103-11	11.3	4.8	1.7	122-9	10.4	4.7	1.8
120-38		4.5	1.6	160-24	11.0	4.5	1.9
102-13	10.0	4.2	1.4	105-15	10.6		1.8
156-5	9.8	4.6	1.6	118-23	11.3	5.0	2.1
159-35	10.3	4.6	1.8	102-12	11.1	4.7	1.9
118-5	10.6	4.8	1.9	115-29		5.2	1.9
118-3	10.7	4.5	1.9	116-31		4.6	1.7
120-18	10.4	4.4	1.5	140-1		3.9	1.4
116-20	11.5	5.3	1.9	104		4.7	1.6
101-1	10.9	5.0	2.0	120-72		4.2	1.9
118-2	10.6	4.9	1.9	160-6	11.4	4.8	2.0
118-1	10.5	4.8	1.7	118-15	10.8	5.2	2.0
116-26	10.6	5.4	2.0	102-29		4.6	1.8
102-15	10.8	5.1	2.1	119-18		4.7	1.9
116-21	11.0	4.7	1.7	118-6		4.9	1.8
116-50	10.8	5.0	1.9	156-3		4.8	1.9
120-19	11.3	4.9	1.9	103-22		4.6	1.7
120-14	10.8	4.9	1.9	120-17		5.2	1.7
157-2	10.6	4.6	2.0	156-2	10.2	4.5	1.7
116-38		4.2	1.6	156-4	11.8	5.2	1.9
122-4	11.0	5.0	2.0	118-20	10.6	4.6	1.9
118-21		4.7	1.9	102-9	11.3	4.7	1.9
103-21		4.9	1.9	118-34	12.0	4.7	1.8
158-53	11.3	5.1	2.2	160-12	11.6	5.0	1.9
119-20		4.8	1.8	118-12	10.7	4.7	1.8
159-17		4.8	1.7	118-14	11.3	5.0	2.1
159-25		5.2	1.7	116-56	11.1	4.5	2.0
120-67		4.7	1.9	103-7	11.1	5.0	2.0
103-15		4.2	2.1	160-9	11.0	4.6	1.7
128-1	11.2	5.1	1.9	102-6	10.9	5.3	2.0
158-1	12.1	4.6	1.8	115-12	10.7	4.7	2.0
103-23		4.6	1.7	54-1	11.6	5.3	1.8
153-1	10.8	4.7	1.7	120-11	10.6	4.5	1.7
118-17		4.0	2.1	101-3	10.3	4.3	1.8
105		4.6	1.7	160-3	10.6	4.7	1.8
118		5.0	1.9	118-29	11.9	4.9	1.9
115		4.6	1.8	101	10.2		1.7
103		4.5	1.9	118-13	10.9	5.3	1.8
156-7			1.9	120-23	10.3	4.9	1.8
117-3		4.2	1.9	118-4	10.8	5.2	1.9
115,116		4.4	1.7	160-13	10.4	5.2	1.8
160-18		4.4	1.6	119-5	10.7	4.8	1.9
159-44	11.5	5.4	1.5	120-39	10.8	4.6	2.0
115-10	10.9	5.0	1.9	160-2	10.4	4.6	2.0
118	11.2	4.2	1.4	153-2	11.1	4.5	1.9
160-9	11.1	4.9	1.9	116-64	10.8	4.5	1.9
115	10.9	4.0	1.5	119-7	10.8	4.7	1.8
121-20	10.2	4.7	1.7	115-8	10.8	5.2	2.0
160-8	10.6	5.0	1.7	115-15	11.9	5.3	1.8

(単位：cm)

資料番号	口径	器高	立上高	資料番号	口径	器高	立上高
108-1	10.9	5.0	2.1	159-31	11.0	4.8	1.9
121-1	10.3	4.9	1.8	116-44	10.9	5.1	2.1
159-50	10.6	5.2	1.8	120-42	11.3	5.4	1.8
153-6		4.5	2.0	120-35	11.0	5.3	1.9
102-5		4.2	1.3	159-28	10.3	5.0	1.7
100-5		4.6	1.9	116-27	10.6	5.1	2.0
103-6		4.4	1.8	116-51	10.1	5.0	1.7
120-3		4.9	1.8	119-21		5.1	2.0
116-34	10.1	4.5	1.7	117-4		5.2	2.2
121-3	11.8	4.8	1.4	141-5		4.4	1.6
116-37		4.9	1.9	120-30		4.8	2.1
120-12	10.3	4.6	1.8		11.3	5.2	2.0

(単位：cm)

Summary

Suemura, the biggest site of Sue kilns, is located within Sakai, Izumi City, southern part of Osaka Prefecture. We can see its name in Nihon Shoki, the official historical record edited in 8th century A.D. At Suemura, they started to produce Sue potteries in 5th century A.D., and kept on making for about 400 years.

From the second half of 1950s, archaeological surveys were organized by the Board of Education of Osaka at this site, accompanied with the wave of urbanization. Six reports have already been published. They divided the distribution of the kilns into seven groups. The kilns we surveyed this time belong to Ohno–Ike group, the most north–western part of all.

Here we found five kilns. The kiln No.1 was made in the end of 8th century. The layer of fragments and ashes, resulted from the production of Sue potteries, was so small. It shows that it was used for a very short time. The kiln No.2 was built twice. It made a thick, large layer which included 80,000 fragments of its products. The potteries found in it can also be divided in two groups, the older and the other. The chronology of Sue potteries was completed by Shozo Tanabe and Hiroshi Nakamura. According to this, the older can be placed in the end of the first stage, and the other in the middle of the second. Both of them were produced in the course of the end of 5th century to the beginning of 6th. Most of the layer, with the trashes the kiln No.3 made, has disappeared because of the recent destruction. The products of this kiln were the contemporaries with those of the kiln No.2 and No.4.

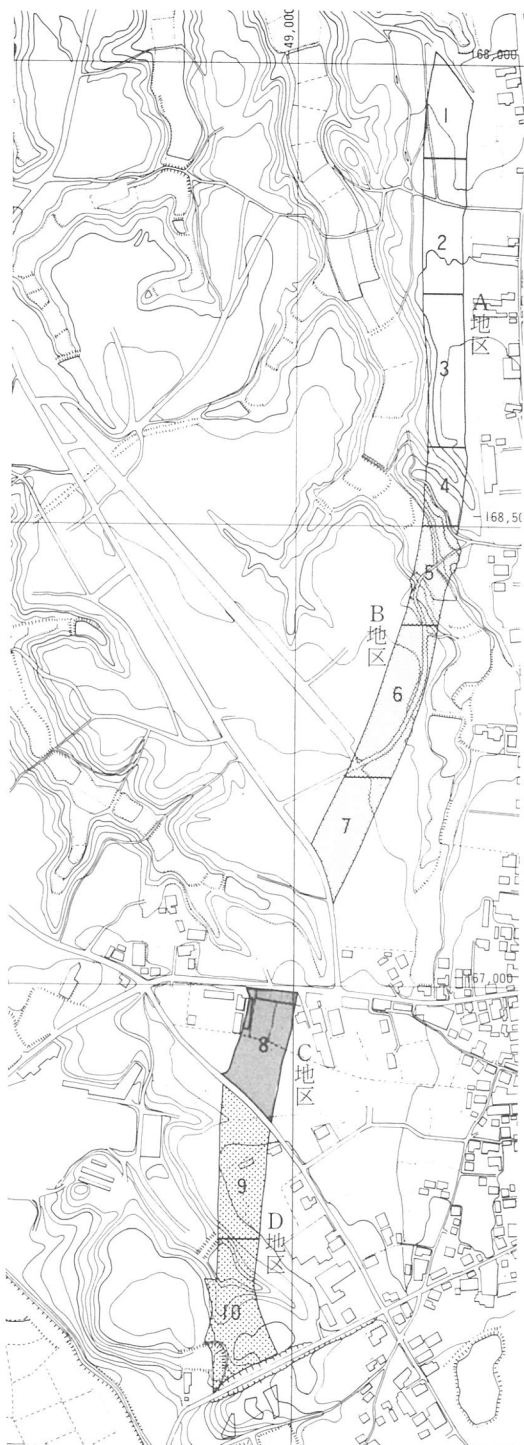
The studies about Suemura have dealt mainly with Komyo–Ike group, abundant with the materials. But there exist delicate differences among the seven groups, concerning the making technique and the shapes of the potteries. The chronology was established on the study of the remains in the kilns. As the data increase, the stages were divided into smaller ones. Some might think it is owing to the timespan, but we could find that local characteristics and individual differences of skill might also give some influence to them.

H. Shirai

圖

版

図版一 遺跡調査区 全体図



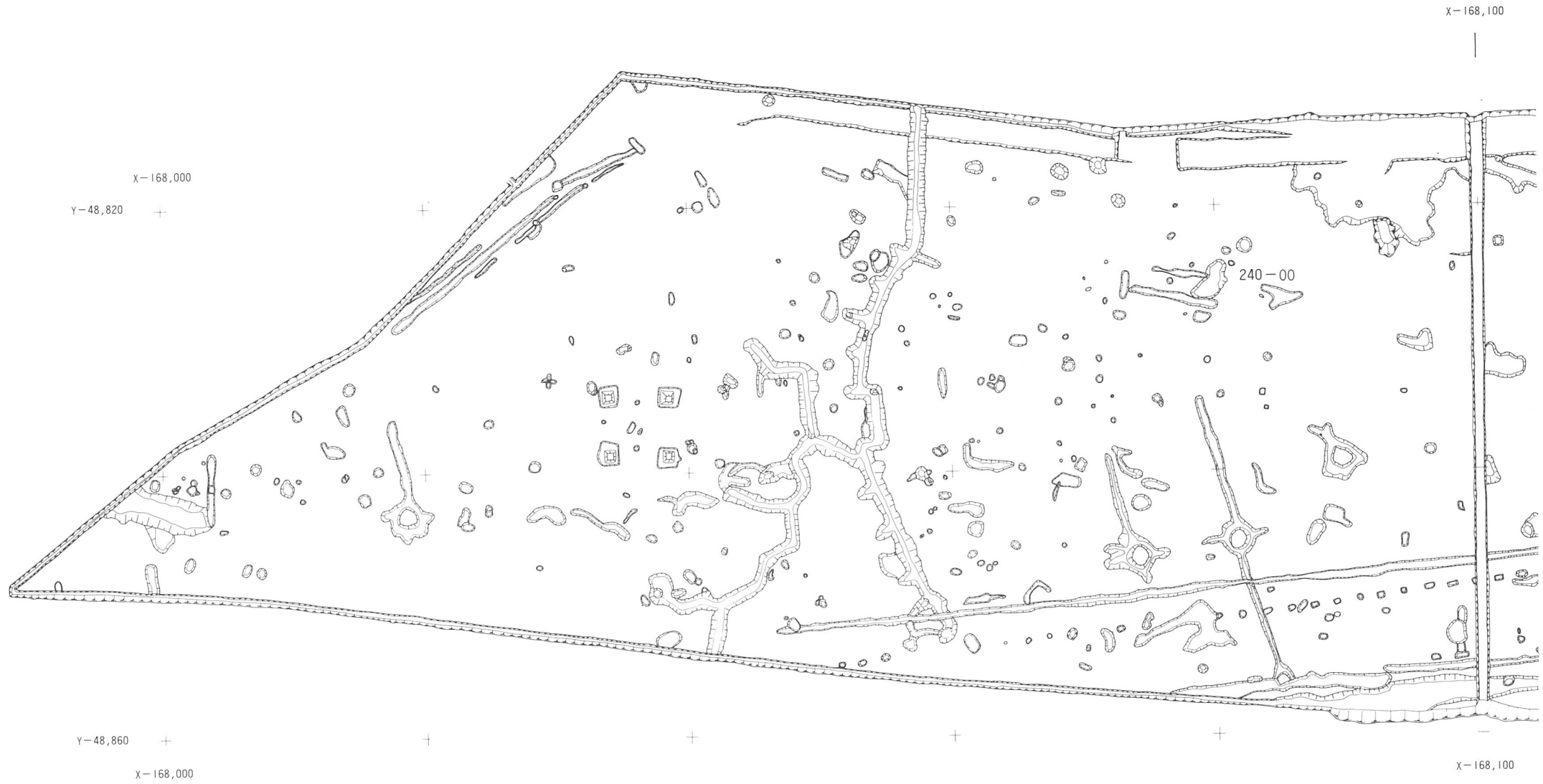
- * 図中に使用している方位は全て第VI座標系の北を示している。
- * 水準は T.P を使用している。
- * 土層の色調の表示は「標準土色帖」に従っている。
- * 遺構の番号は各地区毎に 1 番から使用し、図中には本文で説明のある遺細にだけ番号を記入してある。
- * 遺跡の 1/400 全体図に記入されている C22、G18 などの記号は 100m 単位の地区割を示している。「標準土色帖」に従っている。
- * 座標の単位は m である。
- * 全体図中の数字は遺跡平面図 1～10 に対応している。

大E 4-4
K22区

大D 4-16
C02区

大D4-16
C07区

図版二
遺跡A地区
遺跡平面図1



大D 4-16
C07区

大D 4-16
C12区

